谷口研究室

60年度年間活動報告書

Vol.3

甲南大学文学部

目　次

I.	巻頭言	谷口　文章	－1－
II.	第十回ゼミナール合宿（春期）		－3－
i.	日程		－4－
ii.	解説：エンカウンター・グループについて	谷口　文章	－6－
	1983年3月の経過報告		－7－
	1985年3月の経過報告		－9－
	エンカウンター・グループ体験記	小谷　英子	－11－
	ゼミ旅行についての感想文	大向　順子	－12－
	ゼミ合宿に参加して	岡　千秋	－13－
	ゼミ旅行に参加して	小泉　さより	－15－
	雑感	後藤　雅晴	－16－
	箱庭療法を経験して	黒川　禎三	－17－
	ゼミ合宿雑感	大嶋　利枝	－18－
	春のゼミ旅行	藤田　清士	－19－
III.	第十一回ゼミナール合宿（夏期）		－21－
i.	日程		－22－
ii.	解説：ニホンザルの生態，チンパンジーの人工言語習得実験，奇形ザル問題について	谷口　文章	－24－
	ニホンザルの生態とチンパンジーの人工言語		－25－
	野生ニホンザルについて（日本モンキーセンター学芸部）		－25－
	チンパンジー人工言語との関係	房安　雄司	－31－
	モンキーセンターを見学して	小竹　代理子	－33－
	「言語と社会行動」～ゼミナール研修旅行に参加して～	黒川　禎三	－35－
	心の存在の否定からかすかなる肯定へ	小林　究	－36－
	類人猿とヒトの間	佐保田　圭吾	－38－
	チンパンジーの知能について	菅野　弘	－40－
	チンパンジーの人工言語修得の状況	大野　康	－42－

奇形ザル問題 —44—
環境汚染？サルの警告(朝日新聞 １９８６年２月２４日) —44—
今走れ！今生きる！ ——信じられない頃に——
合志 由美子 —45—
「奇形ザル」（奇形ザル問題研究会）を読んで
小谷 英子 —46—
奇形ザル問題を考える 村松 伊津子 —47—
砂上の楼閣——サルも虫も雑草も無視しないで！——
高木 敏宏 —48—
今ゝ “サル” から学ぶ事 高井 賢一 —50—
環境問題と人間の良識 桜井 智晴 —52—
サルについて私の考え 吉田 秀樹
奇形ザルについて 鈴木 路子 —55—
サルの勉強を通して 紋谷 陽子 —57—
日本ザルに感じて 川上 義雄 —58—
犬山モンキーセンター訪問 岩田 哲郎 —60—
ゼミ研修旅行とその周辺 藤田 清士 —61—
ゼミ旅行に参加して 岡 千秋 —62—
生命の危機 山田 美紀 —63—
ゼミ研修旅行運営後記 脇田 博代 —65—

IV. 授業の一風景 —67—
「ウイ ラブ 裕さん——ガンを明るく——」のビデオを見て
北詰 由美 —68—
身心二元から物心一元へ——「ウイ ラブ 裕さん」より——
石田 智子 —70—
書評 犬養 道子「人間の大地」 谷口 文章 —73—
深層心理学研究会案内 （日本ユングクラブ・ニューズレターより）
—73—

V.　卒業論文・ゼミナール論文要旨　—75—

卒業論文　—76—

哲学の視点から見た禅　小竹　代理子　—76—

ジャン・ジャック・ルソー“自己愛からの出発”—市民と人間—
村松　伊津子　—79—

詩人における感覚の問題—中原中也論—
(文・高阪ゼミ) 石田　智子　—81—

光合成細菌R. rubrumの非紅色変異菌についての研究
(理・中村ゼミ) 植木　通博　—84—

研究生論文　—88—

ルソー「エミール」における教育の意義—透明な心を探して—
川崎　幸千代　—89—

ゼミナール論文　—90—

楽園を求める心—顕教四方仏・弥勒—
吉内　信子　—90—

日本人の意識構造—現代社会の意識形成における宗教の位置づけ—　黒川　禎三　—92—

J. S. ミルの停止状態論にみる環境問題
菅原　宏樹　—94—

現代社会における混迷—豊かさを考える—
高井　賢一　—96—

VI.　甲南大学谷口研究室　昭和６０年度年間活動報告　—99—

VII.　編集後記　—103—

巻頭言

文学部助教授　谷口文章

本年度の研究室活動を報告します。本年度は、今までで最高の２４名という大所帯のゼミ生・研究生・聴講生になりました。メンバー構成は、文学部以外に経・理・法学部の学生たちで、厳しいながらも全体に明るく楽しい雰囲気の中で勉強できました。

ゼミ生の半数を占める人たちがまもなく卒業することは、心よりお祝いしたい気持ちと同時に大変寂しい思いでもあります。四回生の人たちには、新たなる人生の出発に際して、未知なるものに対する「畏れ」を抱きながらも未来に対する「希望」、人々とのめぐり会いにおける「優しさ」を忘れないで飛びたって欲しいと願っております。ゼミで学んだ知的好奇心を社会において一層推し進めて下さい。

昨年三月のゼミナール合宿は、例年のように関西地区大学セミナー・ハウスにおいて、三つの分野について行なわれました。哲学系はルソー「人間不平等起源論」の研究発表、心理学系はロジャース「人間の潜在力」を参考にしながらエンカウンター・グループの実習、そして箱庭療法の体験、教養系はVTR「0才児のたたかい」等を観た上で討論を行ないました。

特にこの報告書では、一昨年の三月のエンカウンター・グループの事例と、昨年のものとを収めており、具体的にどのような展開がみられたかを、解説を加えて載せてあります。

七月のゼミナール研修旅行は、犬山市の日本モンキーセンターと、京都大学霊長類研究所を訪れました。センターでは世界の珍しいサルを見学し「日本ザルの生態」についてのお話を伺いそのあと討論を行ないました。そして研究所では「チンパンジーの人工言語習得訓練」に関する理論についての説明と質疑応答を行い、それから実際の訓練の様子を見学しました。

ところで、このゼミ研修旅行では少し従来の「奇形ザル問題」から焦点がズレた感じがしない訳ではありませんでしたが、むしろ広い地平からすると、哲学と生態学や心理学との関連を総合的に研究する端緒が拓かれたと言ってよいでしょう。すなわち私たちは動物から人間に至る精神の形成・発達を、「言語」という記号を通して「シンボルの哲学」（これは来年度のゼミのテーマです）を理解できるのではないか、と考えるのです。もちろんこのような立場まで理論的に進もうとするからといって、今までの環境汚染・破壊の実践的諸問題、詳しく述べる

なら第一に物理的環境(自然からの乖離による森林伐採・飢餓・難民の問題、交通事故や核戦争などによる不安定な社会状態)、第二に化学的環境(大気汚染や酸性雨、食品添加物・保存料などによる悪化した生活環境)、第三に精神的環境(神経症、分裂病、生きがい喪失等の病理学的対象の増加)の諸問題を決して忘れている訳ではありません。これらは広い意味での実践哲学の問題として――例えば第一の問題はサル等を中心とした生物学・生態学のテーマとして、第二の問題は奇形ザル、水俣病等を課題として、健全な常識を培うための教養的なテーマとして、そして第三の問題はエンカウンター・グループや箱庭療法また催眠法や自律訓練法等心理学・精神病理学のテーマとして私たちは追求してきたのでありさらにそれらを総合的に理論化するために哲学的基礎づけを試みてきた――思索し行動し続けてゆかねばならない、と思うのです。研究室活動の現在の位置づけを行なうために、つい筆が滑って長くなりすぎました。元へ戻りましょう。

卒業論文に関して、私の研究室からは二名、他の研究室(国文、生物)から二名(両者ともゼミ参加者)が書きました。それらの要旨と、ゼミ論および研修旅行・合宿のレポートも今まで通り載せておきました。それぞれ力作ぞろいです。

今年度の報告書も、学生諸君の大変な努力によって完成されました。御苦労さまでした。

(昭和61年3月10日記)

Ⅱ．第十回ゼミナール合宿（春季）

第10回ゼミナール旅行研究発表会のお知らせ

昭和60年2月1日　甲南大学　谷口研究室

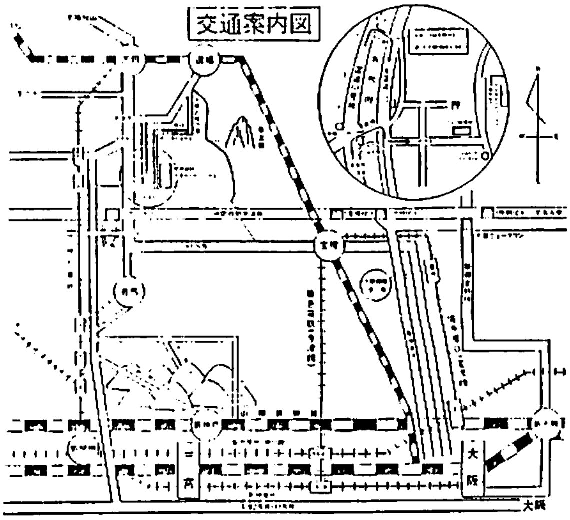
厳冬の折、皆様御健勝のことと存じます。今年も一年間の努力の成果を発表する、恒例のゼミ旅行の日程が下記の通り決まりましたのでお知らせします。奮って御参加下さい。

―――――――――――――――――― 記 ――――――――――――――――――――

目的：　卒論及びゼミ論の研究発表，エンカウンターグループ実習，
　　　　早期教育と個別教育の諸問題についての討論，

日時：　3月8日（金）～10日（日）
　　　　2泊3日

宿泊地：　関西地区大学セミナーハウス
　　　　（右図）
　　　　神戸市北区道場町生野字ロクゴ
　　　　318－2
　　　　☏07956－4－4391



集合場所：　国鉄宝塚駅　改札口
　　　　午後1時集合

費用：　１３，０００円
　　　　５，０００円を前金としてお送り下さい。

携帯品：　寝具、洗面具、その他。

研究文献：　哲学系 ルソー「人間不平等起源論」(岩波文庫)
　　　　その他 卒論，ゼミ論の発表
　　　　心理学系 ロジャーズ「人間の潜在力」(創元社)
　　　　教養系　VTRを資料として使用「ゼロオからのたたかい」他

問い合せ先：　谷口文章先生 ☏07712－3－9464

問い合せ、申し込み先：　高井賢一　〒652　神戸市兵庫区駅前通2丁目1－29－236
　　　　☏078－577－3356

締め切り：　2月28日（木）必着

●利用についてのお願い

(1)宿泊室への入室はPM2:00、退室はAM10:00です。
なお、セミナー室はそれ以外の時間でも使用できます。

(2)入館の際は、責任者が予約金領収書をフロントに提出し、利用者名簿記入等の手続きをすませ、宿泊室の鍵をお受け取りください。

(3)滞在中、各宿泊棟及び研修室は各グループで自主的に管理していただくことになっていますので、お部屋の管理保全は各自責任をもってお願いします。(特に、各宿泊棟内の個室の鍵及び窓ガラスは必ず施錠して外出するようにお願いします。)

(4)この施設は山間部に建てられていますので、火災予防上屋外でのくわえたばこはつつしんでください。また、立入禁止区域や遊歩道以外の山林にはむやみに立入らないでください。

(5)夏の冷房や冬の暖房、あるいは昼間の電灯など不用なものは必ず消すようにして、省エネルギーにご協力ください。

(6)施設の飲食物の持込みは一切お断りいたします。
また、宿舎、研修室での飲食は禁止しています。

(7)宿舎は大小合わせ18棟からなり、数多くのグループが利用していますので、大学人として、あるいは社会人として恥かしくない品位と節度ある行動をとってください。
(特に夜間の騒音、大声は他のグループの迷惑になりますのでつつしんでください。)

(8)宿舎、研修室で使用した備品等は、必ず元の状態に戻し、貸出し備品については、必ずフロントへ返し確認を受けてください。

(9)退館日のAM10:00までに、宿泊室の鍵をまとめてフロントにお返しください。

(10)ご利用に際し、お気づきの点、ご不満の点がございましたらご遠慮なくお申し出ください。
よりよいセミナーハウスにするために、皆様方のご意見をお待ちしております。

－－－－－－－－－－－－－－－－－キリトリセン－－－－－－－－－－－－－－－－－

第10回ゼミナール旅行に前金５，０００円を添えて申し込みます。

参加者氏名：　　　　　　　　　　　　　　　印

住所：　〒

解説：エンカウンター・グループについて

谷口　文章

エンカウンター・グループ（Encounter Group　以下Ｅ．Ｇ．と省略）について概説しよう。

まず、その特徴的機能について述べる。第一にエンカウンター・グループに参加することによって得られることは、「日常の役割行動」からの脱出ということである。日常生活では、私たちはそれぞれの社会において、仮面（ペルソナ）を被って各々の役割を演じているが、Ｅ．Ｇ．の場面では、あるがままの人間として直接的で自発的な行動を体験することができる。第二に自己自身の探究の場を提供する。単に心理治療という効果だけでなく、自分の気づかなかった感性、考え方、独創性、偏見の修正、他人による自己評価や可能性を発見させてくれる自己実現の場を提供する。第三に自己や他人に対して、一層純粋な自分になり得るし、その結果人々との真の心の触れ合いを可能にする。すなわち現代人の孤立した、自己本位な生き方に対して反省を促すであろうし、より純粋になることが出来れば、人々の温い心に直接触れ、それを現実の世界へとフィードバックさせることもできよう。要するにＥ．Ｇ．は、グループの中で、個人の変様、変革をねらい、自己実現を助けるものといえよう。

次にロジャースに従ってＥ．Ｇ．の典型的な展開過程を要約しておこう。

１．模索
２．個人的表現または探究に対する抵抗
３．過去感情の述懐
４．否定的感情の表明
５．個人的に意味のある事柄の表明と探究
６．グループ内における瞬時的対人感情の表明
７．グループ内の治癒力の発展
８．自己受容と変化の芽ばえ
９．仮面の剥奪
10．フィードバック
11．対決
12．グループセッション外での援助的関係の出現
13．基本的出会い
14．肯定的感情と親密さの表明
15．グループ内での行動の変化

このように肯定的なプロセスを経ることが多いが、時にはマイナスのプロセスを経る危険もあるので注意を要する。特に私たちの体験したものは２泊３日の７セッションという短いものであったために、上述のような過程を十分に体験しなかったといえよう。また危険な状況も出現したが、筆者がＥ．Ｇ．終了と同時にカウンセリングを行なうことによって解決した。本来ならこのような事態はグループで解決されるものと思われる。

以下、第一回のＥ．Ｇ．はＫ．Ｓ．とＭ．Ｋ．の両君にファシリテイター（促進者）として記録をとってもらい、第二回のＥ．Ｇ．は同じくファシリテイターのＡ．Ｆ．君にまとめてもらった。両方の報告とも時間を経ているとはいえ、プライバシーに触れるところもあり、かなりの加筆、訂

正を行なった。したがって文責は筆者にあることを明記しておきたい。参考までに両方において話題となった中心人物は、その後、大幅な人格成長を遂げたことを報告しておきたい。

※箱庭療法は、昨年の三月の時に初めて経験したのであるが、時間の余裕のないままに少しだけの体験で終わった。この療法の体験は次回のゼミ合宿において十分な時間をとって実習をする予定である。したがって解説や、詳しい体験談は次回の報告書にまわしたく思う。

～第一回エンカウンター・グループについての報告～

報告者 K.S. , M.K.

1983年3月19日～20日に行なわれた第一回エンカウンター・グループの実習について報告しよう。

私たちの参加したエンカウンター・グループのメンバーは男子7名女子3名の構成で、一人の高校生（男子）を除き、全員大学生で、年齢層は17才～26才になる。ファシリテーターは2名、1名は経験者、他の1名は初めての経験である。Iセッションは原則として90分で計7セッションが行なわれた。

以下時間経過に沿って、セッションごとにまとめていく。

<セッション・I>　ファシリテーターのAの提案で自己紹介から始まる。しかし話は続かず、すぐに沈黙となる。全体的に緊張感があるようである。やがてEが中心となって、色々と話題を見つけて、会話を保とうとする。しかし、他のメンバーの発言が続かず、やはり沈黙が続く。発言するメンバーのなかで、虚勢を張ったBや自己防衛の強いCの発言は、他のメンバーにあまり受け容れられない様子であった。特にAは、この2人の発言にはかなり反発しているみたいである。女子3名は、特に緊張と沈黙の度合いが著しいようだ。

<セッション・II>　高校生のDが、自分の住んでいる土地の環境についての昨夜の発言が、皆をかつぐために勝手に面白おかしく作り上げた冗談であったことを告白する。メンバーの大部分は、その話を信じていたので、爆笑となった。かなり緊張感がほぐれたようである。その時、Bは「ボクはウソであることを感じていた。だけどみんな、ウソとわかってもすがすがしく笑えるでしょう。」といった。多くの者は、彼だけがそのように分かっていたことが意外であったが、さらにBのこのような発言に多少なりとも驚いた様子があった。とくにAは、そのような発言が不快であるといった。しばらくAとBの議論が続くが終始、話はかみ合わないようである。

これをきっかけに、徐々に発言が増えてきた、そんな中でBは、自らの発言がグループに受け容れられないことに気付きだしたようだが、また、同様の俗にいう優等生的発言が続けられたために、次第に孤立していく感じであった。他のメンバーも彼の態度を見るうちに、各自、自分を見つめ始めたようである。再々の沈黙の時には、まだ、ほとんどのメンバーは下か横を向いていて、他のメンバーの顔をあまり見ようとはしていない。

<セッション・III>　Aの提案で、野外の体育広場で始める。内向的なCのみが少し反対する。ベンチを四つ正方形に並べて、向かい合って座る。天気はよく、春の日差しがあふれている感じである。

AとIの提案で「オーム」を唱える、冥想を行なう。少しメンバーの気持ちが落ち着いたようである。グループ全体に少しずつまとまりが出てきた。陽気なEは、沈黙に耐えられない、落ち着かない様子で、話しの中心にいたが、この後に沈黙を持続し始める。

しばらくして、AとBの議論が再び始められた。これにF子、D、Iが加わってBへの質問を始

めたが、Bに彼らの質問内容が伝わらず、ファシリテーターのHが、それに口をはさみ話を調整する。いつまでも本音を吐かないBを批判する空気が、グループ中に生じだした。ただCだけが、Bに同調するような発言を少ししていた。沈黙を守っていたG子はまだ相変わらず、うつ向いていることが多い。。

＜休憩＞　BとCが二人で話し、Iは一人離れ、他のメンバーは雑談している。その後朗らかなA、E、D、F子、G子、HというグループとB、C、I、J子というグループの二つに分かれて過ごす。

＜セッション・Ⅳ＞　Aの提案で「シード・グループ」を行なう。これは、一人を残して全員で肩を組んで輪をつくり、残されたものが輪の中に入るゲームで、中に入った後、今度は全員が手で体にスキンシップの温かさを送る。B、Iは初め拒否していたが後には参加する。それ以降のセッションでは、全体に雰囲気はさらに良くなったようだ。浮かび上がっていたBは、調子を合わせ始める。

＜セッション・Ⅴ＞　セッション・Ⅳでの「シード・グループ」の効果もあってか、全体に初対面の緊張感はなくなり、グループとしての一体感が生じてきた。沈黙にも不快感やイライラといったものが感じられなくなってきた。そしてE、F子、Hを中心に「友達」を話題に話が進む。やがてD、J子、G子、B、C、Aが加わり穏やかな感じで話が続く。ただ、Aはあまり話にのっていないようであった。

＜セッション・Ⅵ＞　セッション・Ⅴの延長といった感じで、沈黙と会話が続く。全体に何となく疲れてきた感じもする。今まで、下を向くことの多かったG子が自分から質問を始めた。ただ、グループ全体としてそれぞれのつっこんだ内容にまでは到らなかった。Aはあと1セッションを残すだけであることを心配して、強い不満とあせりを表明する。だが、それに対する反応は全体に鈍く、これが彼の気持ちを一層イラだたせたようだ。その雰囲気を換えるようにHが、自分のことをどう思うかといって話題を転換する。

＜休憩＞　E、G子、Aが三人で話している。「ある話題があって、それについて考えをまとめている間に、その話が終わってしまって、まとまった頃には沈黙しか残っていない」「さっきの話で実はと言って、話を戻すのも気がひける」といった話をしていた。

＜セッション・Ⅶ＞　この最後のセッションで、再びBが表面的で本来の感情を表現していない発言を始めた。Aがそれに反発する。Aの発言がBに伝わらず、AはHに仕方なく話しかける。

A:「実は、Hさん、しんどい、疲れました。何かをしようという気でグループに来るのだけど、逆にそれが自分で構えをつくってしまう結果になってうまくいかなかった。・・・ 特にB君には、攻撃しすぎたみたいで・・・。」（泣き始める。）

F子が話し始める前にBが、相変わらずいいかっこうをした発言をしたので、Aは「おまえの話を聞きたくない」と大声で叫び、部屋から出ていってしまう。それにもかかわらずBはそのことを無視するように話を続けようとした。そこでHは「このまま、Aを去らせてよいのか」といって他の者の意見を聞く。Aはまもなく部屋にもどってくる。

A:「びっくりさせてすみません。B君にはもう少し通じるように話しかければよかった・・・」

B:「皆、一番Aさんがかわいそうだと思っているかもしれないけれど、本当はボクの方がつらいんです・・・ 」

A:「うん、Bが一番つらいと思う・・・」（二人とも泣き始める。）

B:「自分が崩壊しそう」

A:「ここで崩壊してもいいやん・・・」

彼は、思わずBの横に行き、軽く肩を抱く。
B:「苦しい、すごくしんどい」
他のメンバーは、この間二人をじっと見つめていた。泣き出した者もいる。ある者はびっくりしたような表情になり、またある者は困惑したような顔をしていた。
このような思いがけない成り行きの下で、今回のエンカウンター・グループが終わった。

〜第二回エンカウンター・グループについての報告〜

報告者 A.F. , K.T.

昭和60年 3月 8日〜10日において行なわれた、第二回のエンカウンター・グループ(E.G.)の経過報告について述べる。構成メンバーは、18歳〜24歳までの男子6名(A〜F)、女子3名(G子〜I子)で、うち大学生7名、他は社会人である。ファシリテーターは、DとEで前回のE.G.の経験者である。セッションは90分で計7セッションのE.G.であった。
我々のグループには、大きな二つの話題の流れがあったと言える。その一つは、メンバーの家庭環境についてであり、いま一つは、メンバーの個人的性格についてであった。前者においては、対象となったメンバーの個人的な問題を話しているにもかかわらず、いつのまにか一般的な教育論の討論会のような雰囲気になってしまった。その内容はともかくとしてE.G.としては感情の高まりが不十分だったので、この場での紹介は省略することとする。後者においては、個人の性格に対する他のメンバーの、感情の集中という形を取ったものであるが、E.G.の展開として参考になりそうなので、その中の会話や雰囲気について触れてみたい。話題の中心となったのは、Aで、後から考えるならば、事のおこりは最初のセッションにおいて彼が行なった自己紹介に端を発しているようにも思える。
<セッションI>
Aは、自己紹介においてゼミの先生との関係について自分をあたかも同格あるいは一段上において紹介した。彼自身は、いつものように軽口のつもりで話したことが、他のメンバーの感情を害してしまった。このことについてEが指摘するとAの態度が急変し、今にも泣き出しそうになった。この変化には、他のメンバーがあわててしまい、Dや他のメンバーが話題を変えた。いずれにしてもこの時に、今後の展開の下地ができたことは間違いなさそうである。
<セッションIV> (II、IIIは省略)
Aの話題は、初めはおだやかな形で始まった。彼が自分の性格について語り出し、それに対して他のメンバーが同情的態度で彼を励ましていた。メンバーの中で生死観という話題が出た時にAは、「自分はいつ死んでもいいと思う。また死ぬことを考えるとそればかり考えてしまう。自分はだめな人間で、いつも皆んなから浮いていた。」ということを話した。これに対する他のメンバーの反応は、たしかに、一般論的(あるいは、客観的)すぎるものであったが、彼に対して肯定的なものであった。その後の状況を再現してみよう。
B:「確かに彼(A)は、何というか、僕の今まで付き合っていた奴と考え方が違うし、ものの見方なんかもずらして考えてるみたいやし、そういう点で変わった奴やと思うんです。ということは、そういう風に変わっているからそれが値打ちなのであって、悪い言い方をすれば、面白いと言えば面白いのであって、それが、良い悪いとは一概には言えないし、そういう性格・キャラクターを持っている。だからそれを前面に押し出して、(人と)同じ方向からじゃなしに、違う面

からいろんなこと考えていくことによってね、発想の転換とかやって、面白いことが発明出来たりしていくことになっていったりして、いいと思うんですよ。そういう点で羨ましいし、僕はどちらかというと本当に平凡な普通の考え方しかできひん人間やから、そういう点で変わっているのが本当に羨ましいというのはあるね。」

A：「・・・・・」

E：「皆んなで研究室にいるときにね、そこで話しをしている時にコロッと話しを変えることがあるけどそのことについてどう思う？」

A：「・・・・・（聞いているような、いないような表情でいる）・・・・・」

D：「Aは、自分がしゃべる時は、なんか一生懸命しゃべるけど、人の話しは全然聞いていないように見えるけどなぁ。」

A：「でも・・・・・」

D：「ほら、今の言い方な、俺がポンと言うたらな、すぐ“でも”て言う。」

G子：「人がせっかくA君の為を思って忠告したげてるのに、“でもね”ていう言い方は、損してるんじゃない。」

F：「自分の得意な分野ならボワーと言うけど、そうでなかったら、自分がそうしようと思わなくても聞こうという気持ちを持たないんじゃない。」

A：「自分なりに言おうとしていることが言える機会があれば言おうと思っているんですけれど、人が真剣に話していることについては、本当に何も言えないんです。」

D：「話出来ないのは解るけど、その前に聞く態度すら取ってないんとちゃうんか。聞く態度せぇよ。」

A：「それやったら、話をすればいいということになるんちゃいますか。」

F：「おまえ、ゼミ旅行に何しにきてんねん！」

・・・・・・・・・・

ここで新しいメンバーH子がはいって来たので、話題が中断した形になってしまった。この後、少しの間彼女についての話題が続いた。

<セッションV>

セッションⅣが終わって、沈黙と様々な会話の繰り返しがあったが、Aの話題についての、各メンバーの高まりつつある感情が全体の雰囲気となって、その話題にもどろうとしていた。

A：「自分は、昔いじめられていた経験があって、あんまり人と争いたくないんです。自分は、人の意見にあまり反論したくない・・・」

D：「そしたら、人に言われたままにするんか。死ね言われたら死ぬんか！」

A：「人に死ねていわれたら、ほんまに死んだ方がええんかなと自分は考えてしまう。」

E：「ほな死んだら・・・・・」（突き放した笑い）

C：「おまえ、そんなんでええんか」

B：「自分いうもんを持ってへんのか」

A：「・・・・・・・」

G子：「私ね、A君見てたらいらいらしてくる，私が男やったらひっぱたいてやりたいわ」

D：「かまへん、許すしひっぱたいたって」（思わず全員笑う）

この時、メンバーの感情は最も緊迫していたが、セッションⅥ以降平静に向かって行った。その途中でAに、他のメンバーといかに考え方が違うかということを各人が各人の感じたままに話しを

続けていくのだが、結局平行線は交わらないという状態のままで時間が果ててしまった。ただ最後にAが「自分は今迄皆に、こんなに真剣に自分のことを話してもらったことはなかったし、ボク自身も、人にしゃべったこともなかった。」と述懐した。

Aと他のメンバーとの間に共有できる感情を十分に生み出せないままであったが、Aの体験と同様のものを持つというH子の告白なども、その後展開した。最終的には和やかな雰囲気の中でE.G.を終わったがメンバーの全員がもう少し時間があれば、互いにもっと接近できたであろうという感想をもらしていた。

エンカウンター・グループ体験記

甲南大学　理学部　一回生　小谷　英子

このゼミ旅行に参加して、初めてE.C.G.（エンカウンターグループ）を体験することになった。二人のほんのわずかに面識のある人を除いては、全く初対面のメンバー七名で開始された。E.C.G.を始めるにあたって下された指示は、「その場限りにおいて、何を言っても良い。」ということだった。私にとってE.C.G.は未知のものであったが、お互いのそれまでの状況を何も知らない個人の集合体（の状態）の下で、ある設定されたテーマについて討論会をもった高校時代の体験が思い出された。そうして、その討論会を越えたE.C.G.のイメージはぼんやりして形にならず、ただ漠然と存在していた。「これは成り行きを見るしかないなあ‥‥」と思った。

実際にいざ始まってみると、とたんに困惑が待ち構えていた。どうやってこの場の中にアプローチすれば良いかわからないのである。何と言ってもよいとこういう場を設定されても、普段の日常生活の中に意識や感情が自然に開放できる場所をひとりひとりが持っていて、自分のエリアを守る城壁をもつ一国の主としてこの場に存在しているのであって、この場の中に自然にあふれてくるものは当然ないのである。意識的に動かなくては、何も新しい試みとはならないのである。しかし、これは容易なことではなかった。模索しながら、少しずつ行なう働きかけも的をはずれていたり、却って大きな拒絶反応を引き起こしてしまったり、何の進退もないままに時間が過ぎていった。そうしているうちに、城壁に対して自分自身をぶつけるという攻撃体制をとる人が現れた。その時、鋭い痛みを私は彼自身の内に感じた。もちろん、城の中でひとりひとり強く何かを感じていたと思う。二つ三つの言葉をつぶやいただけで、私の感性が感じたものは表現できないままになってしまった。表明的体験の許容量を上回った深い体験を経た人に対して、私の感情は原始的な形に留まり、言葉にならない——としても、彼の行動そのものに私達は何らかの形で答える必要があった。しかし、私はできなかった。

彼は大きな失望をこの場に対して感じたであろうし、私達はこの試みにおいてのターニングポイントを逃してしまったように私は感じた。

その後、一般論に話が移り、各々の立場の意見を語って、延べ十時間余りのE.C.G.は終わった。年令幅四歳の同世代の集まりであったがこれからの一年一年どんなにたくさんのことを自分自身が吸収していかなくてはならないか改めて感じることができた有意義なものであった。しかし、新しい試みとして私達のE.C.G.は成功したとはいえない。　———WHY？ 何故なら、自己の本質を解放できなかったためである。先入感、自尊心等における悪しき偏見は自己の感性を覆ってしまい、偏見を超越したところに存在する生来の原始的感性に素直になることを阻害してしまう。私達の囚れているものは自ら生みだした空想の産物であり、それから解放されるべく内的革命を行なっていかなくてはならないのであろう。（今回のE.C.G.はその難しさをおしえてくれたが。）E.C.G.は本当に私にとって貴重な体験の一つだと思う。

ゼミ旅行についての感想文

甲南大学　理学部　一回生　大向　順子

今回、初めてゼミ旅行に参加させていただきました。特に私は、クラブの合宿と重なったために、途中から参加ということになりました。

まず最初にエンカウンターグループに入りました。話し合いというものが、どちらかと言えば好きな方なので、途中からしか参加できなかったことが、とても残念でした。今までは、一つの問題点について話し合っていました。ですから、エンカウンターのようなタイプの話し合いは初めてでした。まるで、親や兄弟姉妹、友だちと話をするのと同じような感じを受けました。私が参加したときは、話の途中でしたが、A君の性格、性質について話していましたから、話の中に入って行き易かったです。最初、割と激しい討論でびっくりしました。きつい、厳しい言葉も飛び出していました。しかし、聞いていると、だんだんと、それはA君のことを思って、あえて、耳の痛い言葉を言っているんだということがわかってきました。皆さんA君のどこが欠点なのか、またどうしたらいいのかを、気づいてもらおうと一生懸命でした。私もいろいろと言いましたが、思っていることをうまく表現できなかったことがたくさんありました。また、沈黙なるものもありました。どう話を切り出したらいいのか、どういう話をして行けばいいのかわからず、あまり気持ちのいいものではありませんでした。何となく雰囲気が、ピ

ーンと張っているような感じでした。この沈黙というものは、初めての経験でした。

研究発表では、ほとんどの人がルソーの著作による発表をしていました。私も、ルソーの著書の「学問芸術論」を哲学の授業で読み、要約したことはあります。しかし、その他の著書は読んだことがありません。この発表によって、「人間不平等起原論」、「エミール」において、何を言いたいのかということや、考えなどが、まあまあわかりました。これから読む上で、この発表内容を踏まえて読むことができるので、本文の内容が理解し易いでしょう。特に、私は教職を取るつもりなので「エミール」は必ず読んでみようと思っています。研究発表の著書を読んでいれば、発表の内容も、もっとわかっただろうし、疑問に思うことも出てきただろうと思います。そうすれば、発表についての意見が言えたでしょう。今回は何も言うことがなく、自分で何がわかっていないのかもわかりませんでした。そのことがとても残念でした。

箱庭というものは、哲学の授業のスライドで見ただけで、実際に目にしたのは初めてでした。やってみたいと思う反面、何だか恐い気がしますが、いつかは箱庭を作ってみたいと思います。このとき、箱庭を経験された方が、「土をいじっていると楽しくなってきた。」とおっしゃっていたのが印象深く残っています。

最終日は、予定より時間を延長したのでたっぷりと時間をかけることができ、素通りのようにならなくてよかったです。できましたら是非、次のゼミ旅行に参加させていただきたいと思います。

ゼミ合宿に参加して

甲南大学　理学部　一回生　岡　千秋

哲学が非常に難しい学問だというイメージを、谷口先生の講義によってひととおりはぬぐわれたにしろ、やはりゼミナールの一貫として行なわれるこの合宿は厳しいものであろうという恐怖感がありました。しかし、おもいきって今回初めて参加し、社会人の方々や自分と学部の違った方々と接することによって、これまでの私にとって経験しえなかったことを体験させていただいたり、又いろいろと考えてみる機会をあたえていただいたようで、大変自分にとって良かったと思いました。

まず、先輩方や一部の一回生の方々の研究発表を聴いていて、発表の難しさ、又発表の後の質問の難しさをとても強く感じました。最初は真剣に耳を傾けていたのですが、途中で頭が混乱しはじめ、果たして私もこのような発表をすること

ができるのだろうかと不安を感じたりしましたが、同じ文献の発表を聴いていると、なんとなく発表内容がつかめてきたような気がしてきました。先生が一度このように発表というものを経験することによって、まだ発表を経験していない人より、はや一歩進むのだとおっしゃいました。

私にとって、本を研究するということは大変苦手な分野であるので、勇気や況して自信などありえないのですが、この先生の一言で、積極的に取り組んでいくことが自分を高める上で、重要なのだということを実感させられました。

次に私にとっては、ほとんど初対面の人々といきなり討論するというエンカウンターグループで、あれだけの人数が向かい合っているにもかかわらず三十分近くも沈黙が続くというとても奇怪な気分を味わいました。

同じ沈黙でも耐えられるものと耐えられないものがあって、この場合のは、議論の途中の延々と続く沈黙であり、みんな口を閉ざしてはいるけれども、それぞれが心の中で思いを巡らし、それぞれが考えをまとめようと、なにか見えない討論をしているように感じたのでした。どこまで深く考えて行くのだろう、どれが真実なのだろう、そこまで考えなければならないのだろうかなど、いろいろな思いが浮かんできて、それまでの自分は、あたりまえとして考えて通りすごしていたことが多いことに気付いたりもしました。時間がもう少しあれば、打ち解けられたのではないかと思っています。

この合宿で、とにかく得るものがあったことをうれしく思いました。

日頃、取っ付きにくい本を読んでみようかという気持ちになり、人と話し合うことがいかに難しく、そして沈黙というものが、人と応対した場合にどこかになくてはならないものではないかという思いが、後になって感じられました。

そしてなによりも、いろんな方々と知り合えたことがとてもうれしく思いました。今回得ることのできたことを十分に生かして、もっともっと人間的に成長していきたいと思います。

ゼミ旅行に参加して

竜谷大学　文学部　一回生　小泉　さより

人との出会い一これがゼミ旅行に参加させていただいて最大の収穫でした。まず、この目まぐるしく変化する世の中では、ややもすれば自分を見失ってしまう危険すらあります。事実私自身、自分が存在しているという意識が非常に希薄であったように思われます。

しかし、このゼミ旅行、特にエンカウンターグループにおいては、自分の存在を明確にかつ他人にそれを表示していかなければなりません。これは私の苦手とするところでした。限られた時間の中で、幾度となく自己との葛藤がありました。でも私は、それに打ち勝つことができなかったのです。開かれた門を自分の手で閉ざしてしまう結果となってしまいました。今考えてみると「自分が自分であること」を表現するのをそんなにためらっていた自分に腹立たしささえ感じています。これは、私の大いに反省せねばならないところだと思っています。と同時にこの場においては大いに学ばねばならないところが多々ありました。そこでは、各々の人たちがそれぞれの立場での主張をし、熱い討論が展開されていました。今の私にとっては、それを拝聴させていただけたことにより大きな意義があると思います。

次に、研究発表についてですが、何の予備知識も持たずまた何一つ準備をしてこのゼミ旅行に臨んでいない私にとっては、遠い存在に感じられました。そのため、私は意見を求められても通り一遍のことしか言えませんでした。でもこれはとかく目先のことにとらわれて視野が狭くなりがちな私には、必要な知識だと思います。そして、「わからない」なりに試行錯誤を重ねて何か一つでも明らかにすることができたらと思っています。

私は、先に述べた人との出会いほどすばらしいものはないと思います。もし私がこのゼミ旅行に参加させていただかなかったら、私の内部には何の変化も生じなかったでしょう。しかし、様々な人々との出会いがあり、そこで様々な経験ができたことによって、今、私の内部で少しずつ何かが変化しようとしています。その何かが一体どのようなものであるのか、今の私には見出すすべはありません。でもそれがどのような結果となろうとも、決して後悔することはないと信じています。

このように、今回のゼミ旅行は、自己探求の一つの契機となりました。私は、焦燥にかられ戸惑いを覚えながらも、確実にその第一歩を踏み出したのです。

私は、この新鮮な感動をいつまでも忘れることなくまた自分を見失うことなく、常に自分というものを見つめていきたいと思います。

そして、何よりも学生という立場に甘んじることなく、一人の大人としての自覚を持ち、常に何かを求め続ける自分でありたいと思います。

最後になりましたが、甲南大学の方々をはじめ、このゼミ旅行に参加されたすべての方々、本当にどうもありがとうございました。

雑感

奈良高専　OB　後藤　雅晴

「技術屋の考え方やなあ。」　僕にとってこの一言程恐ろしいものはない。昨年の春から社会人となって以来、僕の頭の中を幾度か去来していたものは、「技術屋」の己れと「人間」としての己れの距離に他ならない。ボタンを押せば答が得られるような、そんな機械的な価値観の不毛さについては常々警戒して来たつもりであったが、自己の姿を一番客観的に見ることができるのは自分ではない。

僕にとって、ゼミ合宿というのはいつでも一つのターニング・ポイントであった。ある時は絶頂から下落への変曲点であり、また混沌から再生への回帰点でもある。谷口先生をはじめとする皆さんとの出会いが、旧知の友人たちとの再会を含んでいても、いつも新鮮に感じられるのはおそらくそうした理由からなのだろう。ただ、どうして自分自身の転機とゼミ合宿とが一致するのかはよくわからない。「同時性」というのはユングの術語であるが、僕とゼミ合宿での出会いにはおそらく目に見えない大きな伏線が各々に対して張られているに違いない。

目に映る機械論的な世界観では決して説明できない世界の存在を僕に知らしめるのが、ゼミ合宿である。初めてなのに懐しくもあり、懐しいのに新鮮なのだ。エンカウンター・グループについて少しばかり言及すれば、僕は自分自身を常に造りかえていく人間の不思議な在り様を、いつも見ていたような気がする。懐しさと初々しさを同時に感じるのはそのためだろう。僕は限られた時間の内にささやかな敗北と復活の絶えないくり返しを、そしてその積み重ねの後に来る大きな変化を見たように思う。エンカウンター・グループという極めて特異な状況を離れても、自己の心の動きに対する感受性を高められれば、それは他ならぬ自分の心の軌跡として見ることができるのではないだろうか。「自己実現」という漠然とした課題に対しての、それは一つのアプローチであるかもしれない。

僕は「人間」である。社会人であり技術屋である以前に人間である。しかし、ともすれば僕はその事を忘れてしまいそうになるのだ。だから、僕にとってゼミ合宿というのは重要な存在なのだ。

箱庭療法を経験して

甲南大学　経済学部　四回生　黒川　禎三

昭和60年度第10回ゼミナール合宿において、私は、初めて箱庭療法を実際に目で見て、また、経験する機会を得た。そこで最初に箱庭療法を実施した場合の一般的効果を述べよう。

箱庭療法は遊戯療法の一技法であり、その治療要因として考えられることは、まず第一にカウンセラーとクライエント間の信頼関係を促進する。第二に無意識内の欲圧されていたものがイメージとして外界へ表現、意識化されると、一種のカタルシス（浄化）作用がある。この他、無意識内の創造性を表出させ、自己表現を十分に行なう事によって心理的圧迫を克服し、自己治療力を発揮する事ができるとされる。

次に実際に私が作った箱庭について感じた事を述べていきたい。まず箱庭の上下や左右の意味づけをしたグリュンワルトの空間象徴理論を谷口先生が説明された。そのあと、作り出してみると、自然と夢中になってきて、自分の思い通りに箱庭を完成させる事ができた。特に印象的だったのは、先生から言われて気付いたのだが最初から箱庭を自分を正面に向けて作ったのではなく、見ている人を正面に向けて作ってしまった事である。自分自身は異和感などは全然感じなかったのであるが、普通の人から考えるとかなりユニークな作り方になるらしい。先生によると箱庭を逆に作ったという事は、独特の個性が無意識の中に存在しており、箱庭を作った時に意識の世界に浮び上がり表出した事を示すものかもしれないという事だった。

この様に、箱庭を一回作っただけでも、その人の持つ個性や感性がある程度把握できるという事を、実際に自分が箱庭を作る事によって体験できた。しかし、土をさわる楽しさ、おもちゃをならべる喜びをひさしぶりに感じた事が箱庭を作って、一番の収獲ではないかと思った。

ゼミ合宿雑感

甲南大学　理学部　一回生　大嶋　利枝

私は今回初めてゼミ合宿というものに参加しました。もちろん今までにこのような機会はまるでなく、その内容などは非常に貴重な体験であったと思います。

研究発表会では、私は発表せず、ただ聞いていただけでしたが、人の発表を聞き、理解するということが、ひどく難しいということだとわかりました。聞くことはできたのですが、それを消化しきれなかったように思います。これからは、少しでも多く消化できるよう努力したいと思います。

エンカウンターグループの箱庭の実習は私にとって、とても印象深いものでした。まず、エンカウンターグループですが、私はこういう機会の中で、私の内にある憤りとでもいう様なものに対し、何かが見いだされるのではないかという気持ちが、どこかにありました。エンカウンターグループの中で私が本音を全て出したとは言えないでしょう。しかし、その中で人の心を直接に感じることができた様な気がしました。また、今までとは違う目で自分自身を見つめ直した、あるいは人の中に自分の姿を見た、その様な気がしました。エンカウンターグループが終った時、緊張がほぐされ、言葉ではとても言いつくせない何か優しく柔らかい空気に包まれた感じがして、とてもうれしかったことを覚えています。私の中にあったものに対する答えであるか否かはまだわかりませんが、それでも何かが見つかったのではないかと思います。

次に、箱庭について述べてみます。講義の時に箱庭療法のスライドを見ましたが、その時、わけのわからない怖さに襲われました。何故なのかまるで説明のつけようがありませんでした。しかし、よく考えてみると、おそらく自分の内に潜んでいるものが形をとり、視覚的に一目瞭然となって表れるということに怖さを感じたのではないかと思います。また同時に、それ故ひどく興味をそそられました。スライドでは、でき上がった箱庭しか見ていませんでしたが、作っていく過程を見、その中で、数多くある物の中から何を選び使うのかを初めて見ました。その結果、でき上がった箱庭を見ると、もちろん私は心理学的に特別な知識を持っているわけではありませんが、漠然とはわかったような気がしました。時間の関係のために、一つの箱庭を四人で使用して約四分の一ほどの大きさの中で、実際に箱庭を作ってみました。とても楽しかったです。先生は土にふれるということよって生命力が回復すると言われましたが、何のことかよくわかりませんでし

た。しかし自分で土にふれてみてはっきりしました。子供の頃はよく砂場などで遊んだり、裸足で走ったりもしていましたが、今では、ほとんど全くといっていいほどしていません。土にふれる機会が少なくなっていたのです。そして土にふれているうちに本当にだんだんと夢中になっていきました。箱庭というものはその上に置くためのものだけを使うのだと考えていましたが、土というものがどれだけ人間の心理に重要な係りをもつのかよくわかりました。四分の一という小さな箱庭ではありましたが、そこでもまた自分の一面を、内からではなく外から見ることができたと思います。

このゼミ合宿で行なった内容は、本当に人間の内面の無意識の面にふれていると思いました。私自身、今まで見えなかったものが見えてきました。これからもう一歩踏み出せるか否かはまだわかりませんが、吸収したものを消化し、そしてそれを糧にしていきたいと心からそう思います。

春のゼミ旅行

甲南大学　理学部　一回生　藤田　清士

三月の上旬にしては、穏やかな暖かい雨で始まったゼミ旅行でした。そんな中で、これからどの様な実習や発表が行われるかを思うと、とても不安でした。最初のエンカウンターグループに関しては、研究室で谷口先生から多少の予備知識を授かっただけで、その輪郭の一部さえ捉えられないままの参加となり、現在でも大変後悔しています。

グループでの討論は、私の考えていた議論と違っており、感情を入れて良いと言う、新しい次元の場所を与えてくれました。しかし、それを認知する事が遅れたので、私自身は、必ずしも自分に合格点を与える事は、できませんでした。又、内容については、その場限りですし、時計係り（ファシリテーター）の方が、冷静に見た目で手記を残されるので紙面を譲りたいと思います。

次に研究発表ですが、文系の発表を、余り見た事のない私は、文章をいかに構成し発表するかに苦労しました。色々な方の発表を拝聴するにつれ、自分の論理展開のまずさ、読み方の浅さを痛感し、良い反省材料となりました。さらに最大の失敗は、期日までに原稿を書けず、谷口先生及び皆様に、御迷惑を、おかけした事です。ただ、自分にとって最大の収穫は、一日目の晩に、アルコールに目を向けず（？）、三時間だけですが文章を書きあげる事ができたという驚きです。今後もあの“火事場の馬鹿力”を自分に課していくつもりです。

今回のゼミ旅行は心理学的側面が強く、大変興味深い物がありました。それが箱庭療法です。教養の哲学の講義で、そのスライドだけは見たのですが、実物での実習となると、さらに好気心が湧いて来ました。初めは、懐かしいおもちゃとの出会いで、我を忘れていましたが、数人の方のサンプルを見て、説明を聞き、自分ならこんな配置をすると思い楽しんでいました。そして、普段、私達が生活している上で、気付いても、気付かなくても、多くの行動が、その心理状態に強く左右される事を、目撃できました。以前は、個人の心理状態を単純に表す事は不可能だと考えていましたが、心理学の立場から見れば、これも愚かな事でしょう。ただ、時間の推移、つまり人間の成長期における心理状態の変遷と催眠による心理状態の逆行との相関関係が、後の疑問点として残りました。

教養の哲学の講義や研究室での会話とゼミ旅行での実習は、「理論と実践」の違いをよく示してくれました。特に、エンカウンターグループのあの独特な雰囲気などは体得してこそ意義があるのですし、発表や箱庭に関しても、同じ事でしょう。自然科学の分野でも、この概念は通用すると考えると、理系・文系の壁（現在では、その様なものはないと考えるのが正当でしょうが）を越えて痛感しました。

最後の日の昼休みに、バレーボールをしながら次の夏のゼミ旅行では、もう少し進歩した自分を見つけられるだろうかという不安と期待が起こり、帰りの電車の中ではそれを次回まで考えてみようと決心しました。

Ⅲ. 第十一回ゼミナール合宿（夏期）

第１１回　ゼミナール研修旅行の案内書

梅雨のころとなりましたが、皆様お変りございませんでしょうか。今年の夏もまた、谷口研究室ではゼミナール研修旅行を下記の通り計画しております。一昨年の淡路島のモンキーセンターの実地研修、そして昨年の愛媛県の自然農法家の訪問にひき続き、さらに理論固めを意図して、愛知県の犬山日本モンキーセンターの博物館での資料収集、および京大霊長類研究所の心理学部門におけるチンパンジーの人工言語習得の見学を行う予定です。ふるって御参加下さい。

甲南大学文学部　谷口研究室

昭和６０年６月２５日

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜　記　〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

1.　日時：　集合　７月２０日（土）　阪急　梅田駅　スクリーン前　午前８時
（時間厳守）

解散　７月２２日（月）大阪駅　午後８時３０分

2.　携帯品：　着替　運動靴　常備薬　学生証　参加残金　保険証のコピー

3.　研修先：　京都大学霊長類研究所
愛知県犬山市官林 41
☏ 0568 − 61 − 2892

日本モンキーセンター
愛知県犬山市犬山官林 26
☏ 0568 − 61 − 2327

4.　参考文献：　河合雅雄「ニホンザルの生態」（河出文庫）
岡野恒也「チンパンジーの知能」（ブレーン出版）
ニホンザル奇形問題研究会「奇形ザル」（汐文社）

5.　スケジュール：　７月２０日(土)は京大霊長類研究所・犬山日本モンキーセンターの見学及び討論会を行い２０日中に松本に向かう。２１日は上高地で一日を過ごす予定。２２日に帰路につく。

宿泊地　松本市　池田旅館　☎0263（32）0805
（20日、21日とも同旅館）

6.　申し込み方法：　費用は、三万五千円です。うち一万五千円を前金として下記へ７月10日までに申し込み書といっしょにお送り下さい。

〒590―01　堺市宮山台4―9―23
脇田　博代

7.　問い合わせ：　ゼミ旅行幹事
脇田博代　☎0722―97―1064
高井賢一　☎078―577―3356
谷口文章先生　☎07712―3―9464

―――――――（キリトリ）―――――――――

申し込み用紙

第11回ゼミナール研修旅行に、前金一万五千円を添えて申し込みます。

氏名
住所
電話
大学名・勤務先

解説：日本ザルの生態、チンパンジーの人工言語習得実験、奇形ザル問題について

谷口文章

まず日本ザルの生態については、伊谷純一郎著「高崎山のサル」（講談社文庫）、河合雅雄著「ニホンザルの生態」（河出文庫）を予備知識にして、日本モンキーセンターを訪問した。センター内を巡って珍しいサルを見学した後、三戸幸久学芸員の「野生日本ザルの生態に」についてのお話を伺った。豊富な観察経験に裏づけられた解説には、書物のみでは得られない興味深いものがあった。

次にチンパンジーの人工言語習得実験では、VTR「チンパンジーと話す」（ブレーン社）や岡野恒也著「チンパンジーの知能」（ブレーン出版）を参考にしながら、京都大学霊長類研究所を訪れ、心理研究部門助教授の浅野俊夫先生の講演の後、多くの疑問について答えていただいた。その後、実際にチンパンジーの「ポポ」（2才・名前はタンポポが咲き始めた頃に生まれたことに由来）の実験を観察した。これは、図形語によるチンパンジーの概念形成と文の習得についての研究で、まだ初期の段階であったようだが、ポポの愛敬のある顔と、熱心に実験スクリーンに向う知的な顔が印象的であった。

また、奇形ザル問題であるが、ニホンザル奇形問題研究会編「奇形ザル」（汐文社）を七月の参考文献に挙げておいたが、研修旅行先ではこの問題にあまり触れることがなかった。しかし、その後今年の一月に生態学の観点から、奇形ザルを扱っておられる竜谷大学の好広真一助教授と連絡がとれ、夏の合宿には指導していただく計画になっている。また淡路島モンキーセンターの中橋実所長から、二月に淡路島自然史博物館協会に入会の勧誘があった。今のところどのような形で参加するか未定であるが従来の方針と大幅な変更はない予定である。ただ最近、中橋所長の所見が朝日新聞に報道されていたので、現在の奇形ザル問題を位置づけるため、以下に掲載しておいた。

最後に七月の研修旅行では、日本モンキーセンターの広瀬鎮氏はじめ三戸幸久氏、水野礼子氏にお世話になり、また京大霊長類研究所では浅野俊夫助教授、松沢哲郎助手の先生方に御指導いただき感謝致しております。「野生ニホンザルについて」の転載は日本モンキーセンター学芸部より許可をいただきました。

野生ニホンザルについて

（1985.7.20.作成）

群れ生活

群れというもの

ニホンザルは群れて生活する動物です。彼らは食べ物を求めて森の中の一定の地域（遊動域）を歩き回わるという生活をしています。これを遊動生活といいます。

彼らが遊動する地域の中には、うまい木の葉や、実などサルたちの食べ物がたくさんあり、採食するのに適した採食地や、冬は暖かく、夏はすずしいといった、のんびりとすることができる休息地、そして夜、安心して眠ることができる泊り場といった場所がいくつかあります。野猿公苑という場所は、彼らにとっては特殊な採食地の一つということができるでしょう。

群れの頭数は、野生の群れでは２０から５０頭ぐらいが多く、まれに１００頭ぐらいの群れがあります。しかし、野猿公苑の中には頭数が多いところもあり、時には１０００頭もの群れがいる公苑もあります（高崎山Ａ群1200頭1979年時点）。群れにはアカンボウから年とったサルまでいます。彼らが日々どんな生活をしているのか群れの中を見てみましょう。

季節による群れのようす

ニホンザルは季節によって特徴的な生活のパターンがあります。

春は出産の季節です。アカンボウたちが次々に生まれ、母親の育児行動、群れ全体のアカンボウに対する保護行動が見られます。そして冬毛から夏毛へと毛がわりが始まります。

春から夏にかけてアカンボウがだんだんと成長し、他のアカンボウとの間であそびやけんかをするようになり、社会的な発達もよく見られるようになります。

実りの秋は採食活動を観察してください。

そして秋から冬にかけては交尾のシーズンです。オスとメスの関係や群れに近づいてくるハナレザルなどの動きなどに注目してみてください。

冬はニホンザルたちにとって我慢の季節です。どのような冬ごしの生活をしているか観察して見ましょう。

また、春夏秋冬と、森の様子が変化していくにつれて、サルたちの食べ物もどんどん替わっていきます。一年間の食べ物のメニューを調べてみるのは楽しいことです。

強いサル、弱いサル

これまでニホンザルの社会はおもしろさが求められたこともあって、擬人的傾向の強い解説がされていました。例えば、群れにはきちんとした序列があって、一番強いボスザルが会社の社長か暴力団の親分のように権力を集中的に持ち、そのボスザルの統率の下、みはり役、斥候役など軍隊のような組織があるかのように思っている人がまだかなりいます。たしかに、二頭のサルの間にミカンを置くと強い方のサルがミカンを取るということがみられます。こうしたミカンテストなどを行なってみると強い順にサルを順位づけることができますが、これは鳥や他の動物でもみられる現象で、ニホンザルだけに限ったことではありません。ちょっと自分の目で観察すれば、彼らの世界が権力などというもので成り立っている社会ではないということがわかるでしょう。自分の目で良く見て擬人的解釈にばかり影響されないよう気をつけることが必要です。

野猿公苑のように限られた空間に限られた餌が与えられると、自然に一番強いものがその場を占め、弱いものが遠慮するということなのです。そのようなことを十分考慮して観察すれば、強い弱いという関係が、群れの他の場面で、どのような現われ方をしているかなども調べることもできるでしょう。餌づけされていない野生の状態のニホンザルの場合は、食べ物が偏在していることが少ないので野猿公苑の餌場でみられるような食べ物によるトラブルはほとんど観察されません。

また、尻尾を立てているのが一番強いサル（ボスと呼ばれている）だといわれていますが、野猿公苑という餌場では、もっとも活動的なオスがいつも緊張している割合が多いため、よく尾を立てているのだということになるという解釈もできるでしょう。大きなオトナのオスの尾の立て方も、背中の方まで尾を反り返らせている場合がみられます。

毛づくろい

昔からノミを取っているとか、塩を摂取しているのだと解釈されて来たおなじみの行動です。グルーミング（Ｇｒｏｏｍｉｎｇ）と言われているこの行動は、お互いの毛についたゴミやフケなどを取り合い、毛をきれいにし合う行動です。こうして毛はいつも保温、防水という大切な機能を果たしているようです。

また、毛づくろいはお互いの信頼関係や友好関係を確認したり、深めたりするのに役立っているようで、特に親子関係や、兄弟姉妹関係、交尾期のオス、メスの間でよくおこなわれます。一方がひとしきり毛づくろいすると今度は相手の前にごろんと横になり、毛づくろいを要求し、それを受けて相手はお返しに毛づくろいをしてやっている光景がよく見られます。

あそび

群れのそこかしこでコドモたちの集団が見られます。アカンボウ時代を終えたコドモたちは一日のほとんどを、行動を共にして遊びます。生まれ

て数か月は、母親の胸の中が恋しいのか遊びも本格的ではありませんが、ひとりで歩けたり、少し物が食べられるようになると、だんだんとその年生まれの仲間やおねえさん、おにいさんと遊ぶようになります。上になったり下になったり、くんずほぐれつのレスリングやおっかけっこ、木のぼりっこと、さまざまな遊びをしています。少し大きくなるとオスとメスの遊びがだんだん違ってくるようで、オスの子は荒っぽい遊び、メスの子は隣のアカチャンを抱いたりして、やさしい遊びが多くなる傾向があるようです。こうして体力をつけ、力の出し方やお互いの力関係、アカンボウの育て方、ニホンザル社会のルール、木の実などが実る時期や場所といった食べものの知識や生活の知恵などを身に付けていくのだと考えられています。

<u>けんか</u>

野猿公苑の、特に餌場では、どうしてもその餌をめぐってのけんかがよく発生します。ニホンザルは騒々しい動物だと思われている原因はこんなところにあるのかもしれません。

餌場でのサルのけんかは餌をめぐって始まる場合が多く、はじめはギャーギャーと悲鳴を上げてお互いに不満を言い合い、高じてくると手が出て組みついたり噛みついたりします。たいていは自然におさまっていきます。よく観察すると、けんかがどんな原因で、どのように起こるのかを知ることができます。けんかが起こっている時に近くにいると、そのとばっちりを受けるときがありますので注意しましょう。

<u>木ゆすり</u>

コドモたちが木の枝に乗って、枝をゆさぶりその反動を楽しむといったあそびがみられますが、一般に言われる木ゆすりとは、大きいなオスなどが木に上っていって、体全体で反動をつけてその木をゆさぶる行動です。大変緊張が高まったときに起こり、「ガッ、ガッ、ガッ」という声を伴うことがあります。仲間に注意を促したり、接近者を威嚇し、脅かすときなどに多くみられます。

<u>馬のり（マウンティング）</u>

交尾の姿勢をいいますが、ここでは主にオス同士がおこなう交尾姿勢に似た行動をいいます。一頭のサルがもう一頭のお尻の上に後ろから乗ります。両手は相手の腰のあたりを上から押さえ、両足は相手の両足のふくらはぎの上あたりをしっかりとつかみます。主に両者間に緊張が高まったりしたときに起こるようです。だいたい弱いものが自発的に強いものにお尻を向けて馬乗り行動が行なわれるといわれていますが、馬のりが始まる前、そして終わった後どのような行動が二頭の間で見られるか、観察して見てください。

表情と動き

ニホンザルの顔の表情は大変豊かです。しかし、その表情は人の表情の意味するものと必ずしも同一ではありません。怒っているとき、悲鳴をあげているとき、平穏なとき、甘えているときなどさまざまな表情があります。表情と行動と併せて観察するとその意味が分かるときがあります。

音声

ニホンザルの音声は研究者たちによって３０種類にも５０種類にも分類され、意味づけされています。微妙な状況によって変化する音声のいろあいは状況が存在する数だけ音声の数があるといってよいでしょう。ここでは「ガッ　ガッ　ガッ」、あるいは「ゴッ、ゴッ、ゴッ」といった威嚇の時の声、「ホィー　ホィー」という呼び交わしの時の声、「ギャー　ギャー」とか「キャー　キャー」あるいは「キャッ」という悲鳴を上げる時の声、そして「クワン」とか「ワン」といった注意を促したり、警戒する時の声などがよく聞かれます。しかし、これらの声は、実際にその場で聞いてみないといくら人から説明を受けても分からないものです。表情、行動と音声をセットにして観察してみてください。

また、山や森の中で野生のニホンザルの声を探す場合には、ニホンザルの声というものをよく知っておかねばなりませんが、その意味でも野猿公苑での音声の観察は大変有効といえるでしょう。

母子関係について

母親とコドモの関係は多くの研究者によって調査研究されてきたテーマです。生まれそして母親に保護され、群れ全体からも保護される。そしてその時期が過ぎ、乳離れが終わり成長していきます。オスならば５～６才でオトナの仲間入りをし、多くのものは群れを離れて行きます。メスは4～5才になるとこどもを産みはじめます。オスと違い群れにとどまり、母親との関係を中心にその母系家族の一員として終生続いていきます。

性行動について

ニホンザルでは秋にはいると交尾のシーズン（交尾期）が始まり、日本各地の野猿公苑で交尾がみられるようになります。長野県地獄谷では１０月ごろから、九州高崎山や幸島では１１月末ごろからはじまるなど地域によって交尾のシーズンが少しづつ異なっています。このシーズンになるとオトナのオスもメスも顔とお尻が真っ赤な紅しょうが色になります。

まず発情に合わせてオスとメスのカップルができます。そうしてオスとメスは数日間、交尾関係を続けます。この間、交尾行動の他に毛づくろいなどの行動がよくみられます。このカップルの関係は長いもので１か月も続いたり、またあるカップルでは１回の交尾で終わってしまうのもあります。カップルのできかたは個体による好みが強くみられるようです。

この他に、この交尾期にはさまざまな性行動がみられます。メスの恋なきと言われるラブコールや、オスのメスに対する追い回わし、噛みつきな

どが群れによっては見られます。
この時期には群れの外からも立派な体格をしたハナレザルがよく群れに近づき、群れのメスと交尾したりします。群れの主だったオスはハナレザルにたいしてライバル意識をもっているのかハナレザルを牽制し、時には命にかかわる争いが起こることがあります。このシーズンはだいたい冬の中ごろに、遅い所では春の訪れと共に終り、元の静かな群れになります。

ニホンザルとの共存をめざして

ニホンザルのすむ森や林を守りましょう

数少なくなったといわれているニホンザルの姿を森のなかで見つけるとき、私たちはその森に豊かさを感じます。そして、また彼らの群れ生活の中身を知れば知るほどこのニホンザルの群れの生活を支えているその森の力を尊ばずにはおられません。また、野生ニホンザルの世界に触れ、その純朴な生き様に接した者ならば誰でも、ニホンザルたちが自由に、野生のままの姿で生きていける環境を守らなければならないと思うに違いありません。
ニホンザルにすみかを与え、食べ物を与えるこのような自然の森や林は、現在、日本じゅうから次々に姿を消していっています。
昭和３０年代から日本全国で森林の大面積皆伐が始まり、４０年代には列島改造による自然の破壊がすすみました。全国の古い年令を持つブナの原生林などをはじめとした自然の森や雑木林が、経済的に価値があるとされているスギやヒノキの造林地に、あるいは自動車道路に、ゴルフ場に、別荘地に、宅地に、そして果樹園に、田畑にと姿を変えていったのでした。こうしてニホンザルのすんでいる森が次々と消滅していくと、サルたちは、奥山から追い出され、里山からも追い出されて、とうとう田畑や果樹園を荒らしたり、植林地のスギやヒノキをいためたり、あるいは人に危害を加えたりという、いわゆる猿害が各地で出始めたのです。そこでサルたちは、つぎつぎに捕獲されたり、射殺されていきました。そして、現在でも、こうして日本の各地でニホンザルの「駆除」がおこなわれています。（1983年度、国の駆除実施報告では2500余頭といわれています。実際に駆除された頭数はその３倍に近いと推定されます。）

ニホンザルは本来、山の中の一定の地域を遊動して生活をしています。その生活の舞台である自然の森や林がなくなってしまえば、サルたちはよそへ移っていかざるをえません。移ったところが畑だったというわけです。こうして地元の人々の生活が大事か、サルが大事かの二者択一論争がはじまり、ほとんどが人間の側の勝利に終りだいたい捕獲され、その地から姿を消してしまうのです。

山野が林業や農業などのために利用されるのは、一面、当然のことではありますが、しかし、ニホンザルがすめる自然の森林いうものの価値を、こうした生産活動のための経済上の価値だけに限って評価していいものでしょうか。自然の森は洪水や山崩れなど自然災害を防ぎ、水源を確保し、人間の生活環境を守る上でも大きな役目をはたしています。

一方的に自然を利用、消費するのでなく、自然を大事に守りながら、利用する方法はないのか、ニホンザルをはじめとした自然との共存はないのか、野生のニホンザルの住む森を守ることが、ひいては私たち人間の生活を守り、将来幾世代にも渡って日本列島に住み続ける人々の生活環境を守ることにつながっているのではないのか、ということをモンキーウォッチングをとおしてじっくりと考えてみたいものです。

「ニホンザルの観察（ 1985.6.三戸、井口）」を一部抜粋
作成　日本モンキーセンター学芸部

チンパンジー人工言語との関係

甲南大学　文学部　三回生　房安　雄司

最近チンパンジーに言語の習得が可能かどうかという研究が進められており、かなりの成果をあげているらしい。そこでこのレポートでは、人間の言語構造の基本を考察することにより、この研究の理解の助けにしようと思う。

1．コードとコンテクスト

人間のコミュニケーションは、伝達内容をその発信者と受信者の間の共通の了解、いわゆる、「コード」に従いメッセージ化し、解読するという形式によって成り立つ。このコードには、記号と意味（辞書に相当）、そして結合の仕方（文法に相当）の二つの規定がある。正確なコミュニケーションを成り立たせるためには、このコードに強い拘束力が必要となり、コードから逸脱した表現を含むメッセージは、ただそれだけの理由で受け容れを拒絶される。また、コードに規定されていない対象は、伝達不可能となる。そこで受信者が主体的に解釈コードを設定する「コンテクスト」という働きにより、コードを越えようとする使用者とその使用者を拘束しようとするコードとの両者の対立する緊張関係を破綻に至らぬようにする。コンテクストの働きにより、推論や比ゆ表現などが可能となる。人間のコミュニケーションは、このコードとコンテクストとの相補的な関係により成り立つ。

2．意味作用

(1)記号表現

人間のコミュニケーションを支えるコードとコンテクストを成り立たせる根底には、対象から記号内容をくみ取り、記号表現を付与する記号機能がある。記号機能における記号表現と記号内容との間には、どちらか一方が欠けても成り立たない相互依存の関係がある。さて、人間の言語における記号表現の場合、ひとつのメッセージを構成する基本的な単位として「文」というものがある。文はそれ自体ひとつのまとまりであると同時に、より小さな「語」という単位から成り立つ（第一分節）。そして、語はそれ自体ひとつのまとまりであると同時に「音」という単位から成り立つ（第二分節）。人間は聴覚によって識別可能な言語音の組み合わせにより、多数の記号の使用を可能にし、他方では、それらの処理を間違いなく、かつ能率的に行なうことを可能にする。記号表現と記号化される対象との間には、その記号表現が適用されるべき何らかの特別な関連性、つまり「いわれ」（「動機づけ」）があるとする「有契的」な関係がなく、両者の関係は、原則として何らそのいわれがない「無契的」な関係である。しかし、擬声語や擬

態語のように、ある程度の有契性を認めることができる場合もあるが、有契的か無契的かという判断は多く主観的な要因が関与している。

(2)記号内容

記号内容は記号表現と異なり、必ずしも知覚可能なものであるとは限らないため、様々な問題がある。代表的なものに、記号内容は指示物（記号表現が適用されている特定の対象）なのか、意味（指示物を満たしているべき条件ということに解する）なのかということがある。つまり、ひとつの対象に異なる記号表現が付与される場合、それらの記号表現が指示するものは同じであるが、意味は全く異なるわけである。

(3)文節作用

対象をいかなる記号内容として捉えるかという「意味作用」には、記号現象における重要な働きがある。というのは記号現象において、同じ状況で同じ対象というものは、厳密に言えば、ありえないことであり、記号表現と記号内容は完全な自己同一の条件を満たしていなくてもよく、その方が普通である。よって様々な対象の中から同じ意味を持つものを選び出しまとめる働きが記号機能には必要となる。これを「分節作用」という。この働きは対象の「等質性」を強調する一方、「差異性」を強調する方向にも働く。差異性を生み出す働きは記号の持つ本質的機能でもある。

3．統辞規則

統辞規則とは、いわゆる記号の組み合わせであり、その基本を「基底部規則」と言い、その派生として「変形規則」がある。例えば、*1*・*2*・*3*のクラスからなる記号統辞規則と九つの記号内容とそれぞれに対応した九つの記号表現があるとする。この三つのクラスからそれぞれ一つづつを選択することによりメッセージを構成するわけであるが、クラス内においては、どの項を選んでも同じという「等価性」を持つが、同時に一つを選べば他は完全に排除される「対立性」を持つ。この等価性と対立性からなる関係を「範列的」と呼ぶ。さて、記号現象には必然的に何らかの形で外界との関連を持たざるをえないため、話し言葉はその統辞が時間の流れに沿って記号が一列に並べられる「線条性」を持つ。メッセージを構成する各項は線条的に相互に隣接する近接の関係にあり、このような線条的な近接性によって特徴づけられる関係を「統辞的」と呼ぶ。

4．人間とチンパンジーとの言語比較（結びにかえて）

人間の言語は二重分節を持つ代表的な言語だが、その最も小さな記号表現の単位は対象との間に有契性が認められない。このことは先ほど触れたが、チンパンジーの図形言語の場合も同じことが言える。ただ後者の場合、ある記号内容を表現するのに特定の記号要素を含むことがコード化されている。（ラナの図形言語

による）記号の統辞規則に関して見ても、チンパンジーの図形言語には時制に関する明確なコード化がなく、人間とコミュニケーションが可能なのは、人間がその際にコンテクストを用いることによるからである。さて記号表現が可能だということは裏を返せば、意味を見い出す能力があることを示す。意味を作る問題は認識の問題と大きく関わり、言語の問題を問う場合には必ず付随してくる。故に人間とチンパンジーとの認識能力の限界の違いについて明確に規定することは必要であると思う。しかし、主体の認識の問題に関して言えば、チンパンジーの認識範囲はその種に必要な環境によれば良いことであり、そもそも認識の「限界」という言葉を用いるのは人間を規準にした言い方でもある。人間とどこまで同じことができるのかという通俗的で興味本位な観点からの実験ならともかくとしてチンパンジーの認識能力がどのようなものかということに関しての実験なら、チンパンジーに人間の認識範囲を越えた認識能力を持つ場合も理論的に想定できるので、単に人間の設定した人工言語だけから推測するのは不可能と言える。

チンパンジーにはチンパンジー社会あるいは環境に適した認識があるように、それぞれの種には適した環境を必要とする。チンパンジーの認識の問題は、ひいては種それぞれにいかなる環境が望ましいかという問題にまでさかのぼり、いかなる環境が人間と共存する生物にとって望ましいかということを問う必要がある。この実験がそうした問題に還元されることを望むものである。

モンキーセンターを見学して

甲南大学　文学部　四回生　小竹　代里子

今回のゼミ旅行に私が参加したのは、初日の日本モンキーセンターだけです。着いた日の名古屋は曇空で、とても暑い日でした。

日本モンキーセンターのモンキーアパートは巡ってみると、パンフレットで見た感じよりも規模の小さいものでしたが、サルの種類は驚くほどありました。印象に残っているのは、ニホンザル、オランウータンとゴリラです。ニホンザルは、これといって特徴はありませんでしたが、河合雅雄氏の「ニホンザルの生態」を思い出し、いろいろなサルを見た中で、見慣れているせいか、ホッとして印象的でした。オランウータンは、顔がどこにあるのかわからない、あの重そうな、ホッペタが･･･。ゴリラのオリでは、メスがオスに場所を譲るという、優位差が見られ興味深く思いました。中でも一番印象に残っているのは、人工飼育のチンパンジーの赤ちゃんです。ガラスに、大口を開けて歯をこすりつける様子は、初め

はかわいらしく思えましたが、だんだん見づらくなりました。(私が、この時感じた思いも、所せん、人間から見た自分勝手な思いなのですが)かわいそうに思えてきたのです。親といっしょにいる子ザルは、私達が見ていても、私達に対して無関心であるか、せいぜい、一瞬見るだけです。ところが、人工飼育の子ザルは、私には、一生懸命に私達の気を引こうとしているかの様に見えました。それは私達に対する反応であったと思います。たった一匹で、授乳時以外は、タオルのスキンシップだけ‥。これでは無理もない様に思いました。(単に母親が子育てをできないためなのか、野性との比較のためなのか)どういう意図による人工飼育かを質問すれば良かったと思っています。

「ニホンザルの生態」、そしてモンキーアパート見学後の説明で、おもしろかったことは、サルの文化です。それぞれの地域に食べ物の特色があり、又、「イモ洗い」などの食べ方があり、そして、「イモ洗い」などが(教えるという能力がないにもかかわらず)子ザルや他のサルに広がっていくというのです。又、ヒトリザルが群れに入った場合、ヒトリザルになる前の群れの文化が、次の群れの文化に何らかの影響をもたらすことがある、ということも知りました。「ニホンザルの生態」には、次の様な話が載っていました。「ある群れをえづけていた時のこと。群れの抵抗は大きく、えづけは困難だった。ところが、この群れの中に、以前に別の群れでかわいがっていたサルがいた。呼んでみると、そのサルはやって来て、人間の手からエサをとり、なつかしそうに横に座った。そのサルの行動が導火線となって、えづけは容易になされた。」(p213)
そして、もうひとつ興味深かったことは、遺伝子の交流のことです。動物園のサルは、必ず絶滅しますが、野生のサルはヒトリザルによる遺伝子の交流があるため、生息し続けると聞きました。ところが、人間が自然林を伐採していくため、群れの孤立化が進み、野生のサルといっても置かれる状態は動物園のサルと同じになりつつあるといいます。私達人間は、生活を便利にしているつもりで、目に見えないオリ(気付いた時は自分も入っている)を作り続けているのでしょうか…。

初日のみの参加でしたから、私にとっては物足りない合宿となり、上高地や京都大学霊長類研究所へ行けなかったことは、本当に残念です。

最後になりましたが、この場をお借りして、谷口先生、幹事の方、参加された皆様にお詫びと御礼申し上げます。

「言語と社会行動」～ゼミナール研修旅行に参加して～

甲南大学　経済学部　四回生　黒川　禎三

人間は他の人と対話をする時に様々な方法を使う。言語、身振り、視線等、様々な方法で自分の意志を相手に伝え、又、相手の意志を読みとろうとするのである。しかし言語によって疎通を計るには、「人間の気持ち」＝「心理」というものが重要な要素となる。その心理を研究する事こそ「心理学」の目的に他ならない。人間の心理について研究してゆくにはその前に人間の祖先である動物（ダーウインの進化論に従うなら）の心理を研究する必要が出てくる。私達は今回のゼミ旅行で、動物の言語（特にチンパンジーの言語）について観察する機会を得た。最初は単純に人間の使う単純な単語をチンパンジーに教えるのだと思っていたが、そうではなく言葉を単純な記号にして、それを繰返して学習させたり、色の判別などを学習させていた。つまりチンパンジーにはチンパンジー独特の意志を伝えるシステムがありそれを解明していく事によって動物の生得的でない言語システムを明らかにできるだろうし、ひいては人間のコミュニケーションの中での意識の問題についても何らかのヒントが得られると想像される。

チンパンジーは自然界では集団として行動し、エサをとらえたりするためのグループを形成している。同じ様にニホンザルも大きな集団を形成しながら生活している。しかし、チンパンジーに言葉を教えられてもニホンザルには教えられないのは何故であろうか。それは、チンパンジーがニホンザルよりも高等であり（もちろん人間側から言い表わしたものだが）、ニホンザルに比べて図形認識力などの発達過程のスピードが早いというためである。しかし、チンパンジー以外の動物でも集団で行動し、その集団内での独自のコミュニケーションを行なっているのであるから集団内でのコミュニケーションの方法、そしてそれを用いる際の動物の「心理」を調べると、その応用として人間の社会生活に於けるコミュニケーションの方法及び問題点がはっきりと浮び上ってくるのではないか。特に集団に対する個人の行動、そして個人に対する集団の行動がある程度まで解明できるのではないかと思った。

人間が生まれてきた子供を育てる事と、チンパンジーが子供を育てる事とは、私には、大きな相違があるとは思わない。唯一決定的な違いを求めるとするならば、子供と親との間で音声器官を媒介した言語的「声」による意志伝達方法が人間にはあり、チンパンジーにはないという事であろう。しかし「声」による伝達は乳児（人間の）にはとうてい理解できない複雑なものであるから、人間の子供

も最初はチンパンジーの子供の様に、親の顔つき、肌のぬくもりなどで親の心理を判断しているのではないか。すなわちこれが動物（我々を含めたホ乳類全般を指して）にとって最も基本的であるが、同時に最も重要なコミュニケーションの方法ではないかと思った。

この様な見方からすれば、私は今の人間のコミュニケーションの方法が大きく変化していっているのではないかと思う。テレビやラジオその他の多くの種類の伝達手段が飛躍的、革新的に変化している今日、人間は、今後も言語的コミュニケーションの面でも大きく発達していくであろうが、その様な技術発展が進めば進むほど、ホ乳動物としての人間に絶対に必要な「心のコミュニケーション」がなくなってくるのではないだろうか。親に抱かれ、愛情を言葉ではなく身体全体で受けとる機会がどんどん減少していくにつれて、人間は社会という「集団の中での一個人」としてしか行動できず、そのために単に没個性的な個としてのみ行動する様になってきているのではないか。今、問題となっている「いじめ」等の社会病理の原因はここに存すると思う。無関心、無感動な人は、どうやって自己を表現すればよいのか。心の中の気持を外へ向かって示す方法がわからないのではないかと思った。

今回のゼミ旅行でチンパンジーに言葉を教えるという事を観察する機会があったが、反対にチンパンジーのコミュニケーションの中から現代人に欠けているものを研究し、解明していく事も重要だと思った。

心の存在の否定から　かすかなる肯定へ

甲南大学　理学部　二回生　小林　究

精神、心、魂。僕はこの三つの言葉がこの順序だとイメージする。すなわち、その存在が、より不確かなものへ･･･という訳である。

心を論ずるのに、他の二語を持ち出したのは言うまでもない。心という言葉がそれらのニュアンスを含み、時には同義と見なして使われるからである。一般には、魂寄りに使われているように思えるが、僕としてはその概念が表わすものの存在は全く否定し、単なる精神活動の現れであると考える方を好むのである。（もっとも精神の活動というものさえ既に不可思議ではある。）この好みは大方の科学者の一般的な好みと考えられ、その実証の為の試みは無数に行われてきたことだろう。サルを使った実験、観察は、その最たるものと言える。

最近読んだ本の中に「チンパンジーの知能（岡野恒也著）」がある。この本自

体は、心に関しては一切触れていないし、純粋に知能についてのものであるが、心について考えるきっかけを幾らか含んでいる。

その内容にざっと触れてみよう。初期の心理学では知能を「問題を解決する力」と考え、まず「迷路」の実験が行われた。しかしこれは、エサが見えない（＝問題が与えられていない）ので、たとえエサにたどり着いたとしても問題を解決した事にはならないと批判され、そして金網ごしにエサの見える「回り道」の実験が行われるようになった。前者はソーンダイクが刺激と反応の結合より成るとした「学習」のテストであり、後者はケーラーが目的と手段との関係の発見であると言った「洞察」のテストである。

「学習」と「洞察」。この二つをつなぐヒントとして「学習の構え（learning set）」があった。これは、アカゲザルが学習の仕方を学習したというものである。すなわち、多数の弁別学習の課題を次々に与えていくと、学習に要する試行数が減っていったという次第である。これは「学習」に「洞察」を使ったという事である。結論を言ってしまえば、この二つは相補的なものだという事ができる。両者は別個にそれ自体なら互いに全く必要としない。なぜなら、「学習」とは情報のストックを作る事であり、目的を持たず、したがって消極的である。偶然印象が強く残ればそれが「学習」なのである。一方「洞察」とは、情報をつなげようとする姿勢であり、その本質は積極性である。だから洞察時に得られる情報のみで解ける低レベル問題には、学習は必要ない。しかし前述のように、洞察によって偶然を意図的に変えることで、学習は能率を上げるし、学習によって情報を増やせば、洞察はより高度な問題を解けるようになるという訳である。

さて重要な事は、「洞察」がサルにできてネズミにできない、すなわち進化上、比較的後に生じてきたように見える点である。ここで少々勝手な事を言わせてもらえるなら以下の通りである。すなわち、洞察とは、主に視覚を経て脳内で行われる「瞬間的な（短時間の）」モデル作りではないか？それは計算と言ってもよい。本来動物は、飛び降りたりする時、視覚から高さを自動的に計算し、着地時の衝撃を予測する。この小さなモデル作りが発達したものが洞察ではないだろうか。つまりモデル作りの有効性ゆえに計算から洞察へと‥。そしてさらに洞察の有効性に無意識ながらも気付いて「行動する前にモデルを作る」のを意識的に行う「思考」が生まれたのではないだろうか。ところで、この変遷が端的に一個体に起きなかったのは、一世代が短いせいもあろうが、やはり身体的構造上、変わってきたのだろう。この辺にも精神の発達と身体の進化の強いつながりをあらためて感じる。

さてこの本では、知能に対するアプローチとして、言語も取りあげている。まず、音声言語についてだが、これはやはり、構造上、人間固有のものである事が

分った。しかしその構造も、そして言語を司るウェルニケ中枢も約三百万年前、すなわち類人猿の頃、既に備わっていた事が化石から明らかである。その証拠に音声言語はダメでも、記号言語ならある程度分るワシューというチンパンジーの存在がある。（彼の使うヤーキース語のシステムは、客観性重視の科学者にはかなり満足のいくものである。）

ところで、興味深い話が一つある。それは、人間の障害児が、プレマック方式（記号言語）をマスターすると、声を出し始めたというのである。これはやはりコミュニケーション言語としては、音声言語が最も自然なものであることを示しているのではないだろうか。

この本にはこの他、教育に関っていくだろう「マザー・ラブ」や「常同行動」の話も載っているが、それについては又の機会にするとして、この本のおかげで生じた課題がある。それは、心、意識、無意識、思考、言語、教育、自己同一性、性格、洞察、学習などの関係がどうなっているかを進化に照らして考える事だ。

最後に、アリストテレスは、心とは形態や形の関数であると言ったそうだが、これには賛成したい。我々の体を構成する物質は、日々入れ換わる。にも関らず、我々は自己であり続ける。自分とはどこに保存されているのだろう。それは物質ではない。原子や分子は考えたりはしない。それらが作る無限の「関係」が思考という明らかなものを生むのである。無から有へ。それを可能にしている「関係」というものに心の存在の期待をかけたい。

類人猿とヒトの間

立命館大学　文学部　三回生　佐保田　圭吾

類人猿は、発声器官の構造上、人間と同じように音声を発することはできず、その発声は威嚇や警戒音といった短い叫び声のようなものに限られる。類人猿と人間の知能を比較し、特にその言語能力について考えてみるとき、このことは重要であるように思える。

この夏のゼミ旅行において、犬山市の京大霊長類研究所を訪れ、長い間その具体的な実験を見たいと思っていたチンパンジーの図形言語の学習を見学させていただくことができた。ユニークな心理学実験に多くの興味をもたされ、学ぶところも多かった。例えば、色の識別学習についてである。研究所においては最高十一色を識別する成果を挙げたチンパンジーがいるとのことであったが、残念ながらその時見学できたのは、まだ若い、おそらく三才くらいの「ポポ」というチン

パンジーで、十分に学習が進んでいないということであった。ところで、色の識別は、例えば赤色なら次のようにして学習される。まず、コンピューターと連動したディスプレイ（画面）上の中央に5×10㎝くらいの赤色の長方形と、左右のどちらかに同色が、そして残り一方に、他の色が表示される。チンパンジーは中央の赤と同色を選択して、画面上の図形を直接指で押さえ、正解ならエサが出る。そして、誤認した場合にはブザーが鳴る。そして、二日間連続90％以上の正解と成った時、チンパンジーは赤色を識別することができるようになったということになる。

だが、ここで疑問に思ったのは果してチンパンジーが正しくその色の概念をもち、色を識別しているのかという点である。色というものは定義し得ないものの一つであり、人間が色について語り得るのは、ある色と特定の「言葉」「文字」を対応させているからである。

この実験において、チンパンジーはある色とある色を区別しているが、果してそのことが、ある色を正しく識別する能力をもったといえるのであろうか。つまり、チンパンジーが、他のチンパンジー、あるいは人間と「この色を赤と名づけよう。」と、何らかの方法で相互にコミュニケーションし確認することができなければ、正しく概念化した段階で色を識別しているといえないのではなかろうか。

別にそこまでする必要は無いという意見もあろうが、そのあたりの厳密さがなければ、数や色あるいは図形の言語化といった学習の意味が、抽象的言語の段階に到っているかどうかについて知ることはできないだろうし、実験そのものが極端にいえば低次元にとどまっているようにも思える。

最初に書いたように、類人猿は生理解剖的に音声言語をもたないためにこれらの実験に幾分のあいまいさを残すのは、やむをえないかもしれない。しかし、チンパンジーの学習のレベルがこれらの段階を越え得ないから、そこから人間の学習行動あるいは文化といった高次なものにまで対応させ普遍化させていくことは限界があるのかもしれない。

人間が人間であるということが、言語や文化によってであることをあらためて類人猿とヒトの間にあるものの中に見たような気がした。

残念なのは、これらのことを質問できる時間的余裕がなかったことである。ここに述べたことは単なる主観的疑問の域をでないのである。

最後に、この旅行を企画運営された甲南大学の谷口先生、並びにゼミの皆さん、犬山モンキーセンター、京大霊長類研究所の方々に深く感謝いたします。

チンパンジーの知能について

甲南大学　経済学部　四回生　菅野　晃弘

人間が契約によって社会を形成しているといわれる様にサル社会も群れという集団組織がある以上、それはやはりある種の契約によって成立しているものとみなしてよいかもしれない。このことはサル(特に限定してチンパンジーとする)がただ本能だけでなく、生活上の便利を求めるための行動を示しており、それゆえ知性をうかがわせるものがある。もちろん群れというものはサル以外の動物にも存在するものではあるが、サル社会ほど組織的な社会ではない。そこでまず、野生のチンパンジーの生活からみてみよう。

野生のチンパンジーは昼は主に地上で生活し、夜は木の上で寝る。その巣は葉でつくられたハンモックの様なものである。これは学習を意味するものであるといえよう。また、チンパンジーは娯楽として二種類の「釣り」をする。アリ釣りとシロアリ釣りである。その行為には小枝がつかわれる。巣の穴に棒をつっ込みアリもしくはシロアリが上ってくるのを待ち構え引っぱり出すのである。しかもアリ釣りには長い棒、シロアリ釣りには短い棒と二種類を使い分ける。このことから、チンパンジーは自然の中でも道具の使いかたを知っており、またその用途についても認識しているとみなしてよいのではなかろうか。

次に野生のチンパンジーの言語について考えてみる。そもそもチンパンジーに言語があるのであろうか。鳴き声に関していえば今のところ意志の疎通を表現しているのではなく、単に情緒的な状態を示すだけというのが一般的な見解のようである。ところが人に飼われたチンパンジーはある程度区別をつける能力がありあいさつの仕方、すなわち接触の仕方によって相手を区別したり感情を表現したりする。このような区別は野生のチンパンジーがものを与えるといった行為の中にも見い出されはするが････。また、このものを与えるといった行為自体他の野生動物に関しては親が子に与えるといった行為以外は常に本能的で無意識なものであるが、チンパンジーがこの行為をする以上、このことはおそらく自覚を伴った意識的な行為であるといえよう。

そこで以上のことから人に飼われたチンパンジーは個々の区別をつける能力を身につけており、またその意味をもある程度認識しているといえるのではなかろうか。ただそのようなチンパンジーが個々の区別をつけることができても、集合名詞や抽象名詞すなわち“人間一般”とか“サル”とかいった種類の名詞を理解できるかどうか疑問が残るのではあるが。

今までは野生のチンパンジーと人に飼われたチンパンジーを比較して述べてきたが、次に人為的な言語学習をうけたチンパンジーはどこまでの知能を持つよう

になるのであろうかを考察したい。

現在チンパンジーの「単語」の解釈によくつかわれるのは、記号言語と呼ばれるものである。一つの“もの”あるいは“こと”を記号化し、覚え込ませ、さらにその組み合せによっていろいろなものを表現するという方法である。その判断テストには同様に記号化された等式がよく使われる。これによりチンパンジーは確かに基本的な単語を覚えていくのではあるが、問題はその単語のもつ意味を正確に把握しているかどうかというところにある。例えば、“ベッド”という単語をとってみるとチンパンジーはそれを“ベッド”という言葉をそれは寝るところであるという意味解釈にしかとらない。その言語として特徴的な多義的意味を覚えこませるには、ベッドの上に座らせたり、ベッドの下に滑り込ませたりすることにより、ベッドというものの多角的で一般的な意味を理解させることができるものと思われる。

このようにチンパンジーが単語を一義的な意味にしかとらないにしても理解させることはできた。次に「文」についてはどうであろうか。チンパンジーは比較的容易に単語を組み合わせることによって意志を表現できる。しかし実験の初期においてこの単語を組み合わせるということは文法的には脈絡がなく、文といえる程のものではなかった。そこで、チンパンジーに文法を教え込ませるために記号化したカードに磁石をつけたりしてチンパンジーの興味をおこさせ、文をつくらせることに成功した。

この様にしてチンパンジーの知性に対する教育はここまで進んでいる。しかしその教育はチンパンジーの持つ本能(食欲など)を条件反射的に刺激することにより行なわれることが多い。もしチンパンジーがさらに発展した知性を身につけるとするとそれはチンパンジー自身の好奇心の増大によるものであろうと思う。

チンパンジーの人工言語修得の状況

甲南大学　経済学部　四回生　大野　康

我々は、このゼミナールにおいて哲学を中心とした学問に触れ、その成果として深い思弁、考察を得た。また、古典を熟読することを学び、議論を重ねてきた。そして実践的な部分を補うために今回の様なゼミ旅行は、私にとって重要なものであった。

一昨年、淡路島のモンキーセンターを訪れ奇形ザル発生の比率の高さに大きなショックを受けた。近い将来の姿がまぎれもなくそれであろうといった科学に頼りすぎた現在の社会への不安がわいてきた。昨年はその不安を解決すべく、自然状態にいかにして歩みよるかという問題への一つの方法を実践しておられる自然農法家の福岡正信氏を訪れた。そして本年度の主題は、サルの言語使用についての実験の観察及びその考察である。

最初は、「チンパンジーが言語を使用する。」と聞いてサーカスのショウのようなものを思いついてしまいがちであった。しかし人間とサルの違いを考察することにおいて様々な共通の事柄がわかる方法の一つであるのではないかと思うようになった。生物の進化及び異化、言語、認識などの諸問題を考えれば、人間がサルから進化し始めた頃の昔のことから、生命科学のような最先端の学問までの様々な手がかりを解明する事が可能になるのではないだろうか。

出発前の予備知識としてVTR による資料を見た。それによると、最初はチンパンジーに人間の言語を発音させようという試みから始まった。やはり動物を飼っている人ならドリトル先生の様に自由にその動物と語り合えたらと一度は思うものであろう。しかし、その実験においては、“Ma Ma”というようなごく簡単な発音をいくつか覚えただけであった。やはり、口、声帯の出来方が解剖学的に言語の発音に向かないという結論を出すに終わった。ここから代わりに他の言語体系を使用する方法によっての研究が続けられた。身振り言語、手話、図形言語といったものである。

今年度のゼミ旅行では京都大学霊長類研究所を訪れた。そこでは図形言語を使用しており、チンパンジーに覚えさせることや、他の仲間に伝達させることについての研究が行なわれていた。

実験が行なわれている部屋には、さらに小さな部屋があり、その中にコンピューターの画面が光っていた。我々が見せていただいたチンパンジーは実験を始めてあまり間もないという事で比較的簡単な問題を行なっていた。内容は画面に三つの図形が現われ、真ん中の図形と同じ色の図形を左右から見つけ出して指で触

れるといった問題である。正解であれば、チャイム音と同時にほうびが出てくる。誤りの場合はブザーがなるという装置であった。

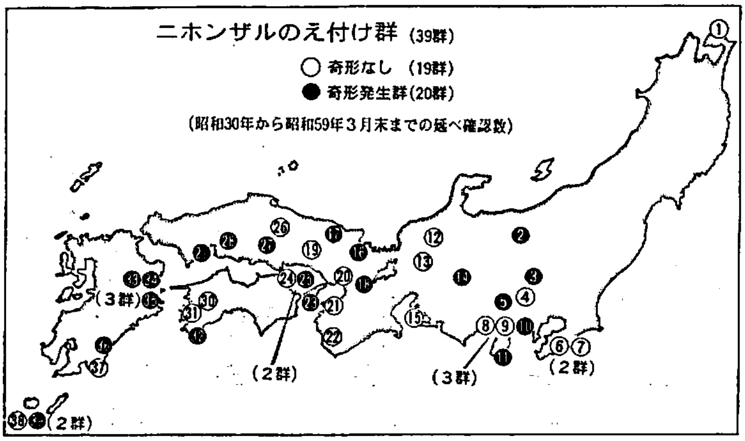
部屋に入ったチンパンジーは、見知らぬ人間が多くいるのでおびえた様子であった。最初のうちはただならぬ様子におどろいたのか、誤って数回ブザーを鳴らした。しかし、しばらくすると、不安がなくなったのであろうか、次々と正解を重ねるようになった。あまりに楽々と解答しており、エサももらえるというのでサーカスの曲芸のように思えた。しかし、答えが二つの内一つであり、選択という事、色という概念、同じと違うという認識がなければ正解は得られないようであって、とても高度なことが要求されているのである。これを積み重ねることにより、このチンパンジーは、将来、言語体系を持ち得るかもしれないであろうし、私もそう願いたいと思った。

奇形ザル問題

朝日夕刊（月）
1986（S61）.2/24

環境汚染、サルの警告

え付けをしている全国各地の「野猿公園」で、奇形ザルの誕生が続いている。大分県・高崎山で昭和三十年に初めて確認されて以来、行政による本格的な調査や原因究明はほとんどなく、研究者の個人的な努力に頼っているのが現状だが、当初予想された遺伝要因よりも、最近では環境要因説が有力になりつつある。とすれば、人間とのかかわりも当然考えられるとして、昨秋、全国から医師、牧師、学者、消費者団体代表らが参加し、兵庫県洲本市で設立されたのが「淡路島自然史博物館協会」である。島には、奇形ザルの発生率が全国で最も高い淡路島モンキーセンターがあり、これが組織づくりのきっかけになった。研究者を支援し、原因解明をめざすという。この問題のこれまでの経過、研究の今後など、「住民運動」誕生えの周辺を探ってみた。（福田　純也記者）



①下北（青森）②志賀（長野）③長瀞（埼玉）④高尾山（東京）⑤河口湖（山梨）⑥⑦房総（千葉）⑧⑨⑩箱根（神奈川）⑪波勝崎（静岡）⑫白山（石川）⑬霊仙山（滋賀）⑭大平山（愛知）⑮沖ノ島（愛知）⑯音海（福井）⑰竹野（兵庫）⑱嵐山（京都）⑲船越山（兵庫）⑳箕面（大阪）㉑友ケ島（和歌山）㉒椿（和歌山）㉓淡路島（兵庫）㉔㉕小豆島（香川）㉖勝山（岡山）㉗臥牛山（岡山）㉘河内（広島）㉙宮島（広島）㉚滑床（愛媛）㉛鹿島（愛媛）㉜大堂山（高知）㉝㉞㉟高崎山（大分）㊱幸島（宮崎）㊲都井岬（宮崎）㊳㊴屋久島（鹿児島）

ひとごとではない奇形誕生

"民活"頼りの究明
悩み　やはり研究費不足

両手足のない重度の奇形ザル「コータ」を抱き、原因究明を訴える中橋実さん＝兵庫県洲本市の淡路島モンキーセンターで

京大霊長類研究所（愛知県犬山市）などによると、長瀞（埼玉）、河口湖（山梨）、大平山（愛知）、嵐山（京都）、臥牛山（岡山）、幸島（宮崎）、屋久島（鹿児島）など全国の野猿公園三十二カ所で、え付けをしている三十九群を調べたところ、五十九年三月までに十八カ所二十群で、生まれた時から手足がない、目が見えないなどの障害を持つサルが約四百匹確認された。

四十二年にオープンした淡路島モンキーセンターの場合、所長の中橋実さん（ ）がえ付けを始めて二年後の四十四年に生まれた十三匹のうち七匹が障害を持っていた。以後、昨年までに生まれた三百二十匹のうち七十匹に異常があった。発生率は二二％になる。

コータ。五歳半の雄ザル。生まれたときから両手足がない。身動きができず、山中で死にかけていたのを中橋さんが見つけ、育てている。野生ザルに与えるえさは小麦、大豆、落花生、ミカン、リンゴなど人間の食べ物と同じだ。その結果、これだけ多くの障害ザルが生まれる。

日本獣医畜産大の和（にぎ）秀雄助教授らのグループが五十三年から六年間、文部省科学研究費の助成（計二千百万円）を受けて総合調査を進めてきた。

その結果、奇形ザルに染色体異常がない▽三十九群のうち二十群に出るなど発生に広域性がある▽奇形ザル同士から健常なサルが生まれている▽発生に性差がない――などから、単純な遺伝要因からだけでは説明がつかないことがわかってきた。つまり、環境要因が有力になってきたのだ。

和・助教授らのグループは、淡路島モンキーセンターなど奇形発生率の高い野猿公園四カ所を選び、死亡した奇形、健常ザル計三十体を集め、肝臓とじん臓内の残留農薬量比較もした。

その結果、すべての奇形ザルの内臓から発がん性、催奇性などが高く、現在農薬として使用が禁止されている「ヘプタクロル」「ディルドリン」などの有機塩素系農薬が検出された。肝臓から検出されたヘプタクロルは健常群の平均七・四倍、じん臓で五・九倍。最高値は淡路島奇形ザルの肝臓から検出された二〇・二ppmで、健常群平均の約三十倍だった。また、同じ健常群のサルでも奇形の子を産んだメスからは、他のメスの二倍の残留量が確認された。

ところが、同じえさを食べたサルの中に健常なサルがいるので、個体差があるとしても奇形発生の決め手というわけにはいかない。ここでいま研究者らが取り組んでいるのが、隔離実験だ。隔離したサルに、疑わしいとされる物質を含んだえさを与え、奇形症状が出るかどうかを調べている。

ほかにも、この問題に取り組んでいる学者がいる。好広眞一・龍谷大助教授（生態学）らが中心になって五十一年に奇形問題研究会を組織し、奇形ザルの全国的な分布、出産、死亡率などの実態調査を続けている。

こうした研究で、最も頭の痛いのが研究費不足。和・助教授は「サル一匹買うのも苦しい。五十八年度で文部省の助成が打ち切られ、五十九、六十年は申請したがダメ。新年度も申請しているがどうなるやら。行政は人間との関係がはっきりしないから出せないというが、それを明確にするための研究なのです。人間も危険だ、とわかってからでは遅い」と嘆く。

昨秋旗揚げの「協会」
世論づくりも目指す

淡路島自然史博物館協会は、こうした現状を背景に「生命をもう一度問い直す共同体を淡路の一隅につくろう」と、岩村昇・神戸大医学部国際交流センター教授の呼びかけで結成された。地元の医師・三原一乗氏を理事長に、十六人の理事で構成している。

具体的行動はまだ起こしていないが、基本方針として奇形ザルの原因究明とその解決、淡路島の自然保護のために同モンキーセンターを中心にした自然教室・学習会・講演会などの開催などを打ち出している。

"住民運動"的な方針を持っている会のこれからに期待したい。

今走れ！　今生きる！ ――信じられない頃に――

甲南大学　文学部　三回生　合志　由美子

――何故生きるかを知っている者はほとんど
あらゆる如何に生きるかにたえるのだ――　（ニーチエ）

朝、太陽よりも早く起き出し、まだ人通りの少ない道をいそいそと出かける
いったい何のために？

私が、アルバイトで古くなったケーキを、パンの端くれを、腐らせてしまった果物を捨て、防腐剤や添加物の入った危険な食品を製造して、たった五百円稼ぐ間に、世界で、実に千五百人もの子供が餓死しているという。いったい何をしているのだ！？と思いながらもお金のために働いている自分がしばしば哀しくなります。

このような個人の延長上にある日本の国は、そしてエコノミックアニマルと呼ばれる私たち日本人は、高度経済成長のスピードに足踏みをさせるものは全て省くという、目的価値行動をとってきたために、多くの一番大切なものを見失ってしまったのではないか？

日本は食料の九割を輸入にたよっているというのに、輸入する食料の安全性に関する規制がほとんどないそうだ。国内で規制されている農薬でも、外国で大量にまかれて、それらの残留している穀物が何のチエックもなしに国内に、そして我々の口の中に入る。そしてその危険を示すように人間と同じものを食べているエづけされたサルたちに四肢の奇形が現れ始めた。

原因は果してそのエサがどうかは解かっていないが、もしそうなら、毎日同じものを食べている人間にもそういった障害が現れないともかぎらない。手足の不自由な、あるいは全く手足の無いサルたちを見て、そんな危機感を感じて当然だと思う。それなのに、奇形ザルの公的研究費が近々打ち切られるとは、どういうことなのだろうか？そんなことをしている間に、少しでも利益を上げるための研究をせよとでも言うのだろうか。

利益とは、利潤とはいったい何だろう。あらゆる食品の見映えを良くするために、色を付け、形を整え、人を欺いてまで得なくてはならないものとは…。

私は、自分のまわりの小さな社会に、“日本”の縮図を見る。「食べるのは私じゃないもの。」「自分が食べなければいい。」こう言って、目の前の現実を黙認する。全ての人が、それと同じ考えをもったら、とても恐ろしいことになると考えることもあえて避ける。考えていたら仕事にならないから、その日のノルマ

が果せないから、そして利益につながらないから･･･! そして消費者はついさっき自分の言っていたことを忘れ、何も知らないふりをして食べる。

事実を知らない方が幸せなのだろうか。しかし、何も知らずに現状に満足しきって、今の状態があたりまえだと思い込んでいるうちに、ふと気が付けば、とり返しのつかないことになってしまっているのではないか？

VTRで見た裂手をもつサル「モズ」の子供「モミジ」がちゃんと五本指のそろった自分の両手をひらいたりとじたりして見ている姿が、まるで自然の恵に感謝しているように見えたのが印象的であったことを付け加えておきたい。私たちの指がまだ健全であるうちに、見直そう。誰のためでもない、私たち自身の問題なのである。

「奇形ザル」（奇形ザル問題研究会）を読んで

甲南大学　理学部　二回生　小谷　英子

文明化された人間と対立した立場で、自然の中に生きてきた日本ザルは、害獣対策、観光資源、動物学、医学における実験、観察という混然一体とした目的のもとに、1952年強制的に人間の保護監視下に置かれることになった。こうして行われたえづけ後約三年で先天性四肢奇形ザルは各地に現れたのである。ある野ザル公苑では多いときには70%以上もの奇形ザルが出産される群さえ出現するといった異常事態がおこり、えづけ群の奇形率は、野生群の奇形率0.4%という数字を大きく上回っていった。奇形ザルの原因はいったい何であるのか。ウイルス感染、隔離された群の中での近親交配、有害物質の摂取──？　近年環境問題が頻繁に取り上げられ、奇形ザル問題も注目されることになった。1975年に行われた日本モンキーセンター奇形ザル研究班による総合的な調査の結果ウイルス、遺伝による可能性は否定され残留農薬による線が濃くなってきた。多くの生物の中で、最も私たち人類と近縁関係にあるサル。小麦・大豆・リンゴ・サツマイモ・ミカン等、私たちが口にしている物と少しも違わない物を与えられ、人間の手に支配された野ザル公苑で暮している彼らに起こったこの出来事は、私たちにとってとても深い意味をもっている。

在りのままの自然の厳しさから逃れるように、楽園として長い年月をかけて作られてきた文明社会。それによって生み出された怪物たちは人間の手を離れ、ど

んどん大きくなって、私たちを攻撃する。飽食の時代といわれ何もかもが満たされすぎている現在、過剰なものは腐敗し、毒素は浸透し、私たちは内側から少しずつ溶かされていき、麻痺した感覚はもはや危険を知らせはしない。精神も肉体も気づかないまま損われていく。精神が死に到ったとき、自然の系は再生不可能となり破滅へと加速度は増して堕ちていくだろう。コストが合わず穀物の国内生産は減少され、国内規制基準の何十倍もの残留農薬を含んだ国外産物への過度な依存を引き起こした政策。見てくれ主義の無知な消費者と、それに迎合して有害化学物質に浸かった作物を作りだす生産者。私たちはそれぞれの立場で犯している罪の大きさに気づかなくてはならない。自然の構成要素の一員として、大切な事を見失わないように感性を研ぎすまし、一人一人できることを探し求めていくことが私たちの使命であると思う。

奇形ザル問題を考える

甲南大学　文学部　四回生　村松　伊津子

ゼミでは、昨年、淡路島のモンキーセンターを訪れた。そして今年、京都大学霊長類研究所・日本モンキーセンターを見学した。私は、あいにく、どちらにも参加出来なかったが、今年六月、教育実習の際、奇形ザル問題を取り上げることになり、再び深く考えることになった。二週間という短い期間だったが、取り組む前と後で、私の考えは、深まったというより、変っていった。

奇形ザルを見て、かわいそうだと思う。どうして、こんなになってしまったんだろう。コータの写真を見て、こう思わない人はないだろう。誰もが、実習の授業で何度同じスライドを見ても、奇形ザルたちに対して、あわれみを感じてしまう。生徒たちも、顔をしかめる。言葉が出てこない。が、奇形ザルたちは、明るく無邪気にサル社会の一員として、障害に負けることなく、生活し、人間の罪深さ、自然への人間の思い上がりを訴える。「人間も自然の生態系の一部であり、その生態系を人工的にくずすことによって、人間にもそのしっぺ返しが必ずやってくるんだ。だから、そのためにも、私たちは、もっと、自然に対して、謙虚にならなくてはいけないのでは･･･」と私はくり返した。

しかし、何度か授業をするうちに、私は、私自身の中に、うそっぽいもの、偽善っぽいものを感じるようになった。何度か、コータを見るうち、あわれみでは

ない別の感情がこみ上げてきて、私を無言にさせた。かわいそうなんて思ってほしくない。冷静にありのままのコータを見てほしい。彼らに対して、人間は悪いことをしてしまった。ゴメンナサイなんて態度で見てほしくない。同情やあわれみを除いたその感情を見つめて、もっと深く考えてほしい。切実にそう思った。

奇形ザル問題は、すなわち環境汚染・破壊という点から私達の問題である。人間の赤ちゃん障害児出生率が、年々高くなってきているようである。そして、障害児に対する私達の接し方にも、差別をしない、あたりまえの迎え入れ方を示す淡路島のサルたちを見習う必要があろう。

しかしながら、もっと前向きに考えねばならないことは、現代社会における奇形ザル問題の位置づけであろう。ここに、奇形ザルについてのシンポジウムの報告書がある。これを読んで、私は少し奇形ザル問題の本質を見たような気がした。今までの私が、感傷者に過ぎないことを実感した。奇形ザル問題は、サルの問題に留まらず、高度資本主義国、日本が現在抱える諸問題に共通するものをはらんでいると考えられるのである。

砂上の楼閣

――サルも虫も雑草も無視しないで！――

甲南大学　理学部　二回生　高木　敏宏

奇形ザルは何を意味しているのだろうか？

奇形ザルを見て不安に思うのはなぜだろうか？

相手はサルだけど、何か私たちと同じ生き物だということを感じているのかもしれない。サルたちをとりまいている自然は、彼らの母体もしくは、分身だと言うことができる。それは、自然にあるものを吸収し体をつくっているからである。一方人間はどうなのだろうか？もちろん同じはずである。ということは、人間およびサルたちが生きてゆくには健全な自然を維持していかなければならない。

人間はもちろん健康でいたいのだが、実は少しわがままで、ヒトとニホンザルの関係がしっかり解らなければ奇形ザルを自分自身の問題としてなかなか受け容れようとしない。よってこの問題を考える意義をはっきりさせたい。

我々の母なる自然に異常があれば必ずサルに影響があるわけだ。だから、サルに異常が見られたら、人間にも何らかの影響はあると予測できる。とすれば、もしそのことを真剣に受けとめるなら、その危険性を回避、解消でき、快適な生活

が回復できよう。

サルとヒトとの関係をもう少し詳しく説明すれば、ダーウイニズム、さらに補強のために解剖学的または遺伝学的証拠を用いて近い関係につなげることができるだろう。特に日本人とニホンザルは、同じ環境、すなわち気候とか地形を有する日本列島の同居者であるから、互いにさらに近い存在だろう。

今回の研修では、この関係を裏付けるものがあったように思う。京大霊長類研究所のチンパンジー「アイ」は物の名前十四個、色を十一種、数を六つまで記号におきかえて認識できた。また別の学習では、百近い図形言語を認識するチンパンジーも現われるようになった。しかしながら、これらの結果から、物事をある程度抽象化・記憶しはするが、単語を組み立てて新しいメッセージをつくることはできない。物を分析するために感覚を用いているが創造性のある文章を組み立てる帰納的な分析能力をもたない。したがってそれらのチンパンジーはちょうど乳児ぐらいの段階に位置している。つまり、言語の進化においてもヒトに到達する途中の段階にあり、そこから人のように、二足歩行、手の使用、脳の発達、他の運動分野の発達とその促進、舌・口の筋肉の発達、多様な発声、複雑な言語の使用へと進んでいく可能性は少ないように思われる。

ところで日本列島がむしばまれたら、ニホンザルと日本人はどうなるのだろうか。おそらく生存の危険にさらされることになるだろう。生物圏では諸物質は閉じられ、循環している。そこで生物は限界を迎えつつある。そして不幸なことに日本は食糧自給率が低く、大部分の食糧を外国に依存し、国内での生産性を高めるため、化学肥料・農薬を多量に用いて効率をあげようとしている。だがそれは我々生物体がマキシマムに限りなく近い状態で、生命の基礎である土壌に違った組成のもの(窒素が多くなる)を埋めこみ、悪影響を及ぼす植物・動物の侵入を許し、バランスの整った循環を乱し、日本人・ニホンザルのなじんだ基礎(土壌・植物)を変性させた。その結果、内・外因的変異を起こさせている。

実際、直接の影響としてあらわれたのが奇形ザル問題であろう。数は少なくなってきているが、ゼロでない。ひどい奇形がまだある。淡路島がその具体例である。筆頭に出されるのがコータだ。しかし小さい奇形ザルも続いて生まれている。これらのことは非常にショッキングなこととして取り上げられるが、残念ながら我々現代の日本人はこれが他にどう関係あるのか考えようとしない傾向がある。その行きつく答は、気がついたときには人間にもすでに害が及んでいるということだ。おそらく障害児の発現がその一つではないだろうか。この因果関係は、はっきりしておらず、今、厚生省が原因究明に対策を講じつつあるようである。

一体これから障害児は増加するのだろうか。今の食生活を見てみると全て害がないとは言いきれない。このように外的要因はじゅうぶんある。それに対し内的要因は全体の1%にすぎない。これらの事実からすると当然障害児は増加するのではないかと思う。

今、ここに二つの予測資料がある。一つは障害児は増える。もう一つは減る。この両者は実は同じものであって、「一方は人間は自然のピラミッドの一片で他の一片を失えば、各片は不安定になり崩れていく。そして他方のものは、そこからラーのアシ舟で逃げ出し、自分はそれがアポロだと思って安心しているうちに、知らずに太平洋でいつのまにか遭難している。」という具合だろうか。

現代人は、地球をメソポタミヤやエジプトの砂上の楼閣のようにしないよう努めなければならない。

今、“サル”から学ぶ事

甲南大学　経済学部　四回生　高井　賢一

サルは、ずっと以前より、姿や形が人間に近く高等な動物であることがよく知られている。アジアに分布するオランウータンは現地の言葉で「森の人」という意味があるぐらいである。しかし、動物の中に「心」を認めることなどできるはずがないことから、人間と他の動物は判然と区別されていた。この人間と動物の間にあった堅い壁を破ったのが、ダーウインの進化論である。進化という考え方はダーウイン以前にもあって、１７００年代から１８００年代にかけて論争がなされていたが、決定的な事件は１８５９年にダーウインによって書かれた「種の起源」の刊行である。人間と動物の間の壁を取り去るという、考え方の重大な転換は、当時大変な反響を呼び、特に教会側から強い反対をうけたが、１９世紀の終わりにはおおむね定説として一般に受け容れられるようになる。そして今、サルについてのいくつかの資料―奇形ザルのＶＴＲや「チンパンジーの知能」などにより以下二点のことを学んだ。それは、人間の生活にとって最も重要なものの一つである“食する”ということに関しての食品添加物の問題と、人間の心つまり意識に関しての知能の問題である。そこで以下には、この二点について述べていきたいと思う。

我々にとって“食する”ということは必然でありその総量は非常に大きくなる。

それゆえに食品は絶対に安全な物でなければならない。商品としての経済性のために仕方がないのではなく、ダメなものはダメ、危険な物は危険と教え、知ることが大切である。サルのコータを見て欲しい。コータを見てショックを受けない人がいるだろうか。あれが事実なのである。目をそらさないで真実を見つめてもらいたい。“可哀想”という言葉だけで終わらせてもらいたくない。コータは、我々人間に警告しているのだ。訴えているのである。コータは人間が作った食べ物によってあのようになったのである。私は、VTRを見ている時にコータがサルではなく人間のかわりをしているように思えた。輸入大豆にかかっているマラソンやスミチオンなどの農薬にすべての非があるとはいわない。事実を知らない人々自身にこそ非があるのだと思う。コータは、他のサルに比べて長生きするとは思えないが、彼が一日でも長く生きることで我々人間に対して警告し、訴え続けることであろうと思う。

次に知能の問題について述べることにする。知能という言葉がごく一般的に使われてきているが、では知能は何かと問われてみるとはっきりした解答を得ることは困難であろう。しかしそうでありながら一方では知能検査なるものがつくられ、たいていの子供はこの知能検査を受けている。それで普通かそれ以上の成績をとった子供は何ということもないが、もし悪い成績をとるとたちまちその子供は、“知恵おくれ”とか“精神薄弱”だとレッテルをはられてしまう。知能検査の成績がよくなくとも、絵の上手な子がいたり、記憶力のすぐれた子もいる。いったい知能がおくれているとはどういうことなのか。なまじ知能検査がつくられたために、知能の本質に関することがわからなくなっているのではないか。そこで動物の中でもいわゆる知能の高いチンパンジーの「サチコ」の行動を観察して知能というものの本質が少しでもわかるのではないか。

色々な実験によりチンパンジーの知能は、おそらく人間でいえば三、四才の知能であることがわかった。今日までにチンパンジーのサチコに音声言語、ワシューへの身振り言語やサラ，ラナへ図形言語と人工言語の訓練をおこなってきた。（しかし、その訓練において人間からの一方的なアプローチでチンパンジーにとってどれだけ共有する場があったかはわからない。）もちろんこれを利用し、知恵おくれの人や精神薄弱の人とコミュニケーションを持てるようになるかもしれない。もっと彼らを知り、わかり合うことができるかも知れない。そうすることにより彼らの持つ知能を知り、変なレッテルを取り除くことになるであろう。しかしここには新たに言語の概念が問題になってくるであろう。

今日の人間の作り上げた社会は加速度的に色々な面において進歩しつづけている。その結果、生活も向上しているように思える。しかし本当にこれで人間にとって好ましい状態なのであろうか。一見、ささいな事に見えるものの中でも本当に大切な事を見落としてはいないか。私には人間が自分自身の力を盲信しているように思える。人間とは愚かで小さい動物であるということを自覚し、謙虚な姿勢をとるべきであると思う。そして現代のように加速度的に変遷していく社会においては確固として「自分」というものを内面に有し、自己の感性を研くことが現代の我々の選択すべき道であると私は思う。

環境問題と人間の良識

甲南大学　経済学部　四回生　桜井　智晴

最近、私が見たテレビで、南米・アマゾンの熱帯雨林がすさまじい勢いで伐採されておりそのため土が流れ、森林が破壊されていくというものがあった。アマゾン流域に開拓が進み、その開拓地が、まるでアリの巣のように広がり森林をむしばんでいるのである。このままでいくと世界最大の熱帯雨林もやがては消滅してしまうそうだ。また、世界各地の砂漠が少しずつ、外へ外へと広がっている。これには、文明国が砂漠に井戸をほったためそれまで適度の家畜を飼ってくらしていた遊牧民が、井戸の囲りに集まり、一層多くの家蓄を飼い始めたため、エサである草木が必要以上に食いあらされ砂漠のまわりのステップが砂漠になってしまうらしい。そのほかの問題として、野菜などの食品に対する農薬、食品に対する添加物――見栄えを良くするために着色や保存などを行う――などがある。

以上が、私の知っている環境破壊、環境汚染の問題であるが、それでは一体なぜこのようなことがおこるのか、私なりに考えてみたい。一言で言えば、「もうかる、便利である」からだと思う。アマゾンの例でも、あの広大で肥沃な土地を眠らせておく手はない、コーヒー畑、チップ工場などをつくれば、利益があるだろうと考えるからだと思う。また野菜などに、たとえ人体に良くないとわかっていても人工的に色をつけ、見栄えを良くするのも、外観の良いものは悪いものよりも、数段高く売れるからである。一般にこれらは、経済の利益市場主義、効率主義などに原因があると思われるし、現在の経済機構もそれを軸にして動いている。

しかしながら私は経済機構がどうこうというより、根本的な問題は人間の良識などといったものにあるのではないかとも思う。人間にはさまざまの欲望がある。征服欲、功名心、など数え上げればきりがない。これらを否定することは出来ないと思う。なぜならこのような欲望は、良きにしろ悪しきにしろ、今の社会をつくり上げてきた原動力の一部であったと思えるからである。もし欲望をあからさまにして、利を追いもとめたりすると、今まで述べたようなこと、いや、もっとひどいことをしでかさないとも限らないと思う。また人間は勝手なもので、我が身にふりかからねば現実に行動しないと思える。

ところで森林の破壊、砂漠化、食品添加物による人体汚染なども、かなりの状態まできているようであるが、それでも我々の世代、その次の世代ぐらいまではそれほどの問題を引きおこさないと一般には思われるので、その後の心配までしていられない、といった考えが大勢を占めているのではないであろうか。（これはまるで日本の財政のようです。）さらに人間は目先の利益などに非常に弱く、それが、「便利だ、もうかった」につながっていっていると思われる。

しかしながら反面、人間は、すばらしい自然を見たとき、これを後世まで伝えたいと考えたり、美しいとさえ言えるような思いやりある良識を持つこともできる。このように人間の心は、本当に色々な異なったものを内包していると思えるのである。そこで私は、「もうけよう、便利だ」ということばかりに心を奪われず、その何分の一かの心でもいいから、良識的に自然の美しさ、過去から続いてきた人体の大切さについて考えることが出来れば、そして欲望を上手にコントロールしていくことができれば、地球をすり減らしたり、先祖から伝えられた肉体を汚染したりすることをくいとめるか、今よりはそのスピードを減速できると考えるのである。そして、このような意識を持って行動する人が増えれば、もうけ一本やりの経済も、人間にとって有益な経済へと変わっていくであろう。以上のように、人間の自然などに対する良識的な心の持ちかたが環境問題解決のカギだと私は思います。

サルについての私の考え

甲南大学　文学部　四回生　吉田　秀樹

この一年間ゼミの学習以外に、京都大学霊長類研究所および日本モンキーセンターにおけるゼミナール旅行を中心として、少しではあるがサルについて勉強して来た。ここでまず私が取り上げたいのは、奇形ザルの問題である。奇形ザルの発生する原因については、これまでいろいろと考えられてきたが、その直接の原因は、サル達の食べているエサに含まれている食品添加物、防腐剤などの化学物質にあるとされており、それらは、人が日常食べているものにも当然含まれているのである。またそのために、人間の間でも障害をもつ子供が生まれる率がどんどん増えているそうでもある。これらのことは、政府がしっかりとした安全基準を設ければ良いことなのであるが、多くの食物を輸入にたよっている我が国において、輸入品に高い安全基準を設けることは、貿易上大変難しいことであり、そのために化学物質の多く含まれた食物が世に出回ってしまうのだと考えられる。また、この問題は、日本だけのことではなく、全世界が真剣に考えなければならない共通の問題であるから、輸入食物に対する安全基準を考える以前に、根本的に考え直さなければならない何かがあるのではないであろうか。(ここで例として、輸入小麦中の農薬検出最高数値をマラソンとスミチオンについて挙げてみると、アメリカ産小麦では100g中マラソンが4.59 ppm、また、オーストラリア産小麦ではマラソンが3.64 ppm スミチオンが6.41 ppm であり、日本産の米に対する規制基準であるマラソン0.1 ppm スミチオン0.2 ppm を大幅に上回っていることがわかる。)

人の障害発生率とサルの奇形発生率を比較してみても始まらないが、人類の将来を考えるならば、今のうちにどうにかしなければならない問題ではないだろうか。

サルに関することで次に私が取り上げたいのは、チンパンジーあるいはゴリラの身振り言語または図形言語のことである。我々は京都大学霊長類研究所において、実際に十四の物体・十一の色・六までの数の区別ができるというチンパンジーに会ってきた。そして誤解されてはならないことは、チンパンジーの言語習得能力がその程度でしかないというわけではないということに注意したい。つまり、今までの実験方法で以上のことが伝達可能になったわけであり、また、ひょっとすると他の実験（違った伝達方法）では、もっとすごい能力を発揮できるかもしれない。実際サル同志の伝達方法においては、もっと違ったことも伝達できるわ

けである。例えば彼らは、人間にはまったくわからない方法で、エサのある場所を仲間に伝達することができるのである。ここで興味深いニュースがテレビであったので紹介すると、海外での出来事なのであるが、身振り言語を話すことのできるあるゴリラがおり、彼はあるかわいいネコをペットにしていた。ある日そのネコが死んだのだが、そのことを、彼はネコが sleepしている、つまり眠っていると表現したそうである。そして新しいネコを与えてくれとまで表現したそうである。私が興味深いと思ったのは、ゴリラが「死」を「sleep」と表現したことである。

ところで、テレビでは、新しいネコと楽しそうに遊んでいるゴリラが映っていたが、それを見る限りでは、彼には、死んでしまったネコがかわいそうだという気持ちはなさそうであった。彼にとってネコは、おもちゃの一つであるのかもしれない。もし、こうではなく人間の人工言語を習得した動物が感情表現を伝達できれば、すばらしいと思うのだが・・・。

以上、私がこの一年間、サルについて学び、あるいは考えたことであるが、動物について学ぶことは、広くは人について学ぶことであるという結論を得た。

奇形ザルについて

甲南大学　文学部　三回生　鈴木　路子

私の家は箕面の滝に近い池田にあります。小学校のころよく遠足で箕面に行きました。又、親類が遊びに来た時など家族といっしょに、箕面のサルやもみじを見学しました。その時サルは、遠足の子供を襲ったり、食物を観光客からもらい自動車のボンネットで暴れまわる、狡猾で狂暴なイメージしか私にはありませんでした。しかしこの間ゼミの時間に見た「奇形ザルは警告する」というVTRの中でのサルは、私の今までのイメージとは全く違ったものでした。後肢のない生後数ケ月のサルは、おむつをしてもらい、愛らしく、自分が奇形であるとは知らないのか、純真無垢な赤ん坊のようでした。

この二つの相反するサル、狡猾狂暴――純真無垢というイメージを結びつけるものが、私の読んだ「奇形ザル」(汐文社)という本の中にありました。その中でも興味深く思ったのは、「奇形ザル問題」のカギとなる、研究者たちのとったエ

づけという方法です。この「エづけ」には個体の識別や生態観察、また過剰なサルを実験動物の供給するなど色々と利点がある半面、他方で観光資源の開発の手段にも使われるようになってしまいました。このことは人間の商業主義のために自然に手を加え生態系を狂わすという悪癖の現われではないでしょうか。この本は奇形の原因は群内婚や遺伝ではなく、エづけの大豆などの残留農薬がニホンザルの体内で生物濃縮されておこるとしめくくられていますがサルの奇形の原因である農薬にはダイオキシンなどに似た催奇性の物質が含まれていたとも書いてあります。ダイオキシンとはベトナム戦争でアメリカ軍が使用した枯葉剤にも含まれていたそうで、障害児が生まれるほどの猛毒があり、それを示すショッキングな写真が取りあげられるのをしばしば見たことがあります。これが全世界への警鐘であるとすれば、この日本各地でおこった奇形ザル問題は日本人への警鐘と言ってもさしつかえないのではないかと思います。

ライオンは百獣の王と呼ばれ他の動物を襲い殺す猛獣のようですが、必要以上に殺生することはないといいます。これは生まれながら自然界のバランスを知りその内で生きようとしているからでしょう。恐しいことは、人間が自然界のバランスなどには関係なく思うままに生き、自分達が自然界の一員である事を遠い過去に忘れてしまい、自分たちがそのバランスを破壊していることを認識していないということではないでしょうか。現在我々にそう言う自然の生態系についての意識が残っているとすれば、自然の緑を見れば気持ちがおちついたり、生命が活性化されるわけであるが、残念ながら、それはかすかな潜在的なものでしかないような気がします。したがって人間は自分たちが自然界の一員であるということを自覚するように文明が発達したために後退して潜在的な意識の中に入りこんでいる「人間的自然」＝「人間本性」を呼びもどし、それを認識しなければならないところまできている――いや、そのタイムリミットが目前に迫ってきている状態なのではないのでしょうか。

サルの勉強を通して

甲南大学　文学部　三回生　紋谷　陽子

この半年間、奇形ザルのスライドや環境破壊についての本などを読んだ上で、ゼミ旅行で実際にサルを見て、私としてはいろいろと考えさせられることが多かった。今回のゼミ旅行では日本モンキーセンターを訪れ珍しい世界のサル達を見ることができた。残念ながら京都大学霊長類研究所へは行けなかったがチンパンジーを使った図形言語の実験はおもしろいと思う。あるチンパンジーは十四の物体、十一の色、六までの数を区別できるそうであるが、チンパンジーの本当の能力はまだまだそんなものではないような気がする。ただ、キーボードを押すというやり方において、それだけの能力を発揮したのであり、他のバリエーションにおいては、また違った能力を発揮できると思う。またチンパンジー同士における伝達能力は、もっとすぐれているのであるから、図形言語や、あるいは外国で行われているような身振り言語に執着する必要はないと思う。チンパンジーの持っている能力を殺してしまうことになるからだ。これからはもっともっと時間をかけて研究してもらいたいと思う。とにかくサルの研究は大変むずかしく根気のいる仕事だ。しかしサルと人間が自由にコミュニケーションできる時が来るかもしれないと思うと、この研究は非常に興味深いものだ。機会があれば一度訪れたいと思う。

また今回訪れた日本モンキーセンターでは見られなかった「奇形ザル」だが、この奇形ザルによって人間と食物という問題について改めて考えさせられた。サルの奇形の原因はいろいろあげられるが、与えられている餌にあることは言うまでもない。あるデーターでは輸入小麦中に高い値の農薬が検出されているのがわかる。この輸入小麦を食べたサルから奇形ザルが生まれた。しかしこんなことをいくら調べてもきりがないのではないか。ほとんどの食品にはなんらかの形で毒物が含まれている。農薬や食品添加物を含んでいないと言ってもいいだろう。私たちは毎日必ず少しずつそういったものを食べ体の中に蓄積していっているのである。人間に最も近い動物と言われるサルに奇形が出現し、そのサルが食べているものを私たち人間も同じように食べているのである。サルにとどまらず海の魚にも奇形が多く存在している。私たちが食べるのはその奇形魚ではないにしろ、その要因を含んでいるのはまちがいない。人間への影響、つまり恐ろしいことだが、サルとか魚に現れている現象が人間にも起こる可能性を多大に含んでいるのは見逃すことのできない事実である。この点において、

まだまだ政府や企業は国民の安全を第一に考えておらず、いまだ利潤や効率だけを求めている。私たちは人間として一番大切なことを見失っているのではないだろうか。奇形ザルはそういったあまりにも傲慢な人間への警告なのだと思う。

日本ザルに感じて

甲南大学　理学部　二回生　川上　義雄

頭の中がどうにかなってしまったようだ。

この地球上でもっとも進化した生物——人間、確かに道具を使い火を使う。言葉を話す。文明を持つ。そして、欲も深い。

今、日本の自然は決して日本ザルの住みよいものではない。否、日本ザルだけではない。あらゆる動物・植物にとってもそうである。人間は、文化的な暮しを営むために山や森を切り開き自然を破壊してきた。そのため食べものがなくなったサルたちは畑や果樹園を荒した。これは猿害ではなく人害ではないのか。観光のために、今度はサルをえづけした。そのため何と多くの人間どもがサルの社会を踏み荒したか。そして、えづけされたサルの群れに奇形がひじょうに多く発生している、という事実は何を物語っているのだろう。日本ザルの社会に何が起ったというのか。

日本ザル(学名：Macaca Fuscata)は日本特産の動物で世界のサル類の中で最も北に生息している。(日本ザルは一種類であるが屋久島産は亜種とされ少々タイプが違う。そして最近わかってきたことだそうだがその最北限のサル、下北のサルはそれ以上に違っているということだ。）幸島においての“イモ洗い”行動の「学習」といったことからもわかるようにその知能は高く「模倣行動」をする。調査によると、日本ザルの音声コミュケーションにつかわれるそれは、人間を除く動物の中で最も多いという。群れをつくりその社会行動は複雑で血縁関係が強い。日本においての霊長類の研究は世界の最先端をいっていると言っても過言ではないが（下北のサルについてのこと然り）まだまだ多くの問題がある。

日本ザルは日本に生息している動物の中で最も人間に近いといえるだろう。その日本ザルの中に奇形が発生した。えづけザルに。その要因は何か。まず、遺伝的要因が挙げられるが、現在これはほとんど否定されている。というのは、奇形ザル同士の交配実験の結果、全てそれらの子は正常であったという事実によるも

のが大きい。それでは何か。食べものという点を考えてみよう。サルには特別変ったものを与えているわけではない。私たちが普段食べているものと同じである。それでは食べものではない･･･とはいえないのである。死体解剖の結果、劇毒性農薬の残留が検証されたのである。そして、飼料である輸入小麦や大豆からカビ毒を検出、そして日本の規制基準をはるかに上まわるスミチオン・マラソン（視力低下、発ガン性）が検出されたのだ。現在奇形ザルは減ってきているが、これは輸入小麦・大豆を与えなくなったということが大きく影響していると考えられる。しかし、食べものだけかというとそうではないようだ。同じものを与えていても奇形発生がないところもあるのだ。地域的なものによる影響か、現在のところ食べものなど環境的要因が非常に大きいということは確かであろう。まだまだわからないことが数多くあるのだ。私たちはどうすればいいのか。

現在私たちの食べているものは多くが輸入によるものである。小麦などは90％が輸入に頼っている。先にも挙げたが、奇形ザルが減ってきたのはエサをかえたという事実、それにもうひとつ、奇形を産み易いサルの死亡という事実がある。そのサルたちは1960年代に生まれたものが多いという。人間では現在15才～25才という年令にあたる。私たちは幼い頃薬づけの食べものを食べていたのだ。人間の先天性肢体障害の臨床像がサルの奇形と非常によく似ている、染色体の異常が両者に認められないという学会の発表、この問題はまだまだ解決しない。それどころか解決しようとする姿勢がほとんどみられない。否、まったくといってもいいほどだ。輸入食品の検査官は二人しかいない。その規準がないのも同じという事実、政府の利益追求という方針からであろうか。目をつぶっていればすむことではない。水俣病では猫が狂い死にした途端に人間の方がおかしくなった。今度は猫ではない、もっともっと人間に近いサルに奇形が現われたのだ。

自分を守るのは自分である。

サルたちは身をもって私たちに警告している。言葉にならない叫びでもって･･。

犬山モンキーセンター訪問

甲南大学　理学部　二回生　岩田　哲郎

今回のゼミ旅行は、犬山モンキーセンターである。そこを訪れる前に僕は、淡路島モンキーセンターと同様に、かなりの奇形ザルがいるのではないかと思っていた。しかしこの想像とはうらはらに、犬山モンキーセンターには奇形ザルは一匹もおらず、オリの中から手を出したりして愛敬をふるまっている色々な種類のサルたちでいっぱいであった。実際、モンキーセンターの人も奇形ザルが一匹もいないし、その理由もわからないとおっしゃっていた。エサも人間が食べるものと同じなので、当然、農薬がたっぷりかかっているものに違いない。

ここで淡路島モンキーセンターと犬山モンキーセンターを比較すると、地理的条件（島と本土）以外は条件はほぼ同じである。ということは、食物だけが直接、奇形の発生につながっているのではないような気がする。例えば、近親交配等が淡路島モンキーセンターでは多いのではないだろうか。しかしここで、詳しい知識を持たないものが、簡単に答えを出せる程、問題はたやすいものではない。慎重に答えを出さなくてはならないし、人間に絶対に関係がないと言い切れる問題ではない。

最後に、個人的都合で今回のゼミ旅行で京大霊長類研究所には行けなかったので残念であるが、犬山モンキーセンターに奇形ザルが一匹もいないという事実から、いずれは淡路島等の奇形ザルのいるモンキーセンターからも奇形ザルがいなくなるのではないかという明るい希望が持てるのではないだろうか。

以上、楽観的な意見を述べはしたが、奇形ザルが実際にいる以上は、人間に何かを警告しているのであり、人間はそれを無視せず、それを認識しなくてはいずれは人間にも大きな災いがふりかかるのではないかとも思う。

ゼミ研修旅行とその周辺

甲南大学　理学部　二回生　藤田　清士

谷口ゼミナールでは先生を初めとして上級生の方々が、長年、熱心に奇形ザルの問題を扱われて来たので、私も夏のゼミナール旅行では、その端緒をつかむ様に心掛けました。また、後日ゼミ同級生の川上・高木両君と訪れた淡路島モンキーセンターからも、題材を得ました。

まず、日本モンキーセンターでは、奇形ザルのサンプルが少なかったのが残念でしたが、見学の後の質疑の時に答えて下さった学芸員の方は、様々なフィールドワークを行なわれており、現実の状況（各地の奇形ザルの生態）を良く把握されていた様でした。しかし、時間も少なく、その所感については下北半島の日本ザルの生態を中心に述べられたので、私自身は奇形ザルの問題については、次回のテーマとして残しておきました。フイールドワークの話の中で、普通のサルの社会だけでなく、奇形ザルに見られる個体群動態を観察する事によって、両者の社会の比較行動学が生まれる気がしました。具体的に言うと、個々のサルの生活とそれを取り巻く社会様式にどのような相関性があるのか、また、全く独立したものであるのかを研究する事です。さらに、この正常一異常というカテゴリーの問題に関しては、人間社会の行動学と絡めて再考する事も必要だと反省させられました。

次に京大霊長類研究所ですが、ここは九部門を持つ国公私立大の共同利用施設ですが、心理学・生理学等を総合的に捉らえる組織はすばらしく、うらやましい感じがしました。その他、私達が扱うテーマと関連して変異研究部門の血液中物質の解析や生活史研究部門の野外調査を奇形ザルに応用できないかなどの想像が浮かんで来ました。私達が見る事ができた心理研究部門のチンパンジーによる文・絵などの学習は、人間の幼児期からの発達と対照して（単純比較はできないが）、どの位可能であるか興味深いものがありました。ここでも、奇形ザルが普通のサル（サル社会で奇形ザルを特別視する思考が誤り？）と、どの様に違う発達段階を経るのかを研究できるのではないかという応用も思い浮かびました。

さて最後に淡路島モンキーセンターですが、今まで奇形ザル問題は、問題提起だけで、系統的に取り組めませんでした。しかし今回は具体的な考え方や感情を持つ様になりました。まず、VTR 等で見たコータと言うサルですが、もう生後約5年（1985年12月現在）経て立派に成長しています。手も足もないサルはどうやって動くのかという疑問でも、簡単に、ころがると答えていた私も、実際自分自

身の目で見て、おさえ様のない感情にかられましたし、奇形発生の資料の中で、日本の高度経済成長期に育った我々の世代を実見すると、昭和58年の夏ゼミで、ここに来られた上級生の方々の気持ちが、良く理解できました。それから、コータとは別の屋外で集団生活をしているサル達の中にも、奇形ザルがいましたが、特に手がなく鳥の様に足で飛び跳ねている子ザルが印象的でした。このサルを見ながら、私自身、この半年の間に奇形ザル問題のテーマの方向付けをしないまま流れいく事を意識し、彼らの社会から学ぶべき事を、再考しようと思い始めました。

ゼミ旅行に参加して

甲南大学　理学部　二回生　岡　千秋

哲学の一般講義で淡路島モンキーセンターのサルの奇形について、昨年いろいろな話を聞いて、今回初めてモンキーセンターという所を訪れました。

この犬山にある日本モンキーセンターは、動物園といった感じで動物図鑑に出ているものはほとんどいたのではないかと思いました。奇形問題を念頭においてサルを観察していかなければならないのに、正直言ってついつい動物園気分でサルたちの無邪気な行動に目をひかれて、単におもしろいとか、かわいいとか考えがちでした。そう考えるのは、講義で聞いた淡路島のサルのようなショッキングな様子のものがいなかったからということなのですが、それにしてもいろんな種類のサルがいるものだと思いました。サルたちの行動には、いかにも男性優位であるかのようなオスのメスに対する態度や、隣りのサルとさくごしに見つめ合っているものや、何か考えているようにジーっとしているものや、変にイライラしているものなど、人間と同じような表情を狭いおりの中でしているのです。こうした私たちに一番近い動物のサルに、他の地方では遺伝的にではなく、環境が影響して奇形が存在するということは、安心してはいられないということです。エサは地域によって差が見られますが、それらに使われる農薬の使用率は、ここの所、急増していることが統計から見うけられます。

ビジターセンターでは、ニホンザルについていろいろとお話をしていただきましたが、今までニホンザルというと、まず第一に頭に浮かぶのは、群れがリーダーに率いられ、統制された社会生活を送っているということです。強いもの弱いものというのは、どんな動物にもあるのであってニホンザルに限ったことではありません。これは、えづけがなされることによって目立って見られる故であるというのです。このようにえづけは、ある意味ではトラブルのもとであり、そして

奇形を招く大きな問題を握っているのです。犬山には奇形ザルはいないそうで、他の地域でも存在しない所はあるにしろ、やはり明らかに奇形が見られる地域もあるのです。

最近では、ワインの不凍液混入ということもあり、農薬や添加物などの問題だけではなくて利潤追求に重きをおいている人間の貪欲な姿がまざまざと見られるようです。農産物に限らず輸入自由化問題は、大きくなりながらも、輸入を強く呼びかけている今日なのです。

人間はこうして自ら大切なものを失っていきつつあるのでしょう。

生命の危機

甲南大学　文学部　三回生　山田　美紀

「人間はひとくきのアシにすぎない。自然の中でもっとも弱いものである。だが、それは考えるアシである。彼をおしつぶすために宇宙全体が武装するには及ばない。蒸気や一滴の水でも彼を殺すのに十分である。だが、たとえ宇宙が彼をおしつぶしても、人間は彼を殺すものより尊いだろう。」（パスカル「パンセ」）

パスカルがいうように、自然の中での我々の人間の身体はきわめてもろく弱い存在で、無限の宇宙からすれば、それこそ一つの点にも及ばない。まちがえて蒸留水を注射して死亡するということもあるし、まして劇薬を含んだ水なら、文字どうり一滴で死にいたってしまう。宇宙の中での人間の身体はそれほど微々たる存在だが、それに反して思考によっては宇宙をもつつみこむと考えられる。つまり一本のアシのように弱い人間でも「考える」ことができる点で偉大なのである。だが、フイーリングを重視する現代社会において、今や考えることさえも脅かされつつあるのではないだろうか。

話を食品添加物および汚染の問題に移そう。現代の日本の食料は、ほとんど輸入に頼っているのであるが、例えばその中でも小麦は８０％以上も輸入に頼っているのである。実は、奇形ザルの発生原因は、その輸入小麦についている農薬にあると推測されるのである。そして、我々人間も、その小麦からつくられるパンやうどんといった食品を日常、何気なしに食べているのである。これは、日本では、栽培する際に農薬の安全規準がわりと厳しく設けられているが、外国では、基準がゆるく、事実、そのような汚染の度合が大きい小麦がフリーパスではいってきているためである。

だが、我々は、公に責任転嫁し、敢えて危険性を考慮しないで大丈夫であろうという楽観的な考えで許されるのであろうか。今や、奇形ザル問題について人間は感覚が麻痺しているだけでなく、考えようとさえしなくなってきている。一見、何の関係もないように見える動物、人間、そして、自然の間にも精緻なつながりがあるのである。自然状態においては、食物連鎖によって一つの輪ができており、秩序ある統一された調和をまもっている。だから、一つでもバランスがくずれれば、全体にのしかかってくるのである。水俣病などもその一例であろう。そして、現代、高等動物であるサルが傷つけられているということは、我々にも、いずれ及ぶということはいうまでもない。どんなに科学技術が発達しても、人間が物質的な繁栄を求めるのに夢中になればその結果は自然を破壊し、公害を発生させ、生存と社会生活を危機に陥れることになる。人間は自然から自らを疎外し、自然を忘れると同時に、人間性からも自からを疎外し、自己を忘れることになる。自然を征服しようとする優越感は、もはや、神、仏、天というような絶対的、永遠なものを見失わせ、自然界を閉ざされた世界とする。自然と人間は、それらの間を結びつける統一力を失なって二元的に分裂し、存在そのものを脅かす。我々は、人間を生かしている大きな自然の力、人間と自然界の万物とを一つに結びつけている根本的な力に触れ、自然に帰らなければならない。そして、人間の原点にもどるべきだ。

「天地われと同根、万物われと一体」「梵我一如」「依正不二」とあるように、宇宙、自然のうちにも生命があると考え、それらは互いに影響しあい、融合しつつ一体となって律動する、と仏法では考える。肉体が保てるのも、精神が活動力をもつのも、宇宙森羅万象の助けをかりているからであり、人間生命は万物の営みによってささえられているのである。

人間の心が愛に満ち、その脈動が生命体としての自然を創造するか、また、貪欲や愚かさによって大自然を破壊し、地球が死と暗黒の惑星に姿をかえ、個々の生命をも断ち切るか、我々の選択は自由である。人間は、考えるアシである。我々は、人間生命に内在する自然、そして宇宙を、生の創造に向かわしめるよう努めるべきではないだろうか。

ゼミ研修旅行運営後記

甲南大学　理学部　三回生　脇田　博代

今回の夏のゼミ旅行は今までの研修旅行と一味違い、名古屋での二つの研修、その間に上高地へ観光に行こうという計画でした。

たった三日間なのに、ハプニングが続出しました。近鉄難波発の特急に乗り損ねる者、特急券を落として血眼で探し回る者、皆がお昼ごはんを食べ終えたにも拘わらず、もう一人注文して電車に乗り遅れそうになる者、松本行きの特急（しなの19号）の中で夕ごはんを食べるために、買い出しに行った一人が出発時間直前まで帰って来ず、あわや切符をキャンセル？の事態になりそうになったことなど初日だけでもこんなにハラハラさせられました。

日本モンキーセンターへはモノレールで行くのですが、団体切符を作ってもらう時に、モノレールの出発時間になっているのに駅員さんがのんびりしゃべりながら切符を作ってくれています。「あの、早くしてほしいのですが。」と言うと、「今書いてるだがや。」とたいそうのんびり言われました。結局、何分間か発車を止めてしまったようです。30名程が無賃乗車しているのですから、当然かもしれませんが、田舎らしい対応で、少しほのぼの致しました。他のお客様ごめんなさい。

日本モンキーセンターでは、皆、まるで動物園に来た時のようにはしゃいでいました。特にユニークなゴリラやおとぼけチンパンジーに人気があったようです。中でも一番話題を博したのは人工飼育のチンパンジーの赤ちゃんでしょう。生えかけの歯がかゆいのか、ガラスに歯を押しつけている様子はまるで私達に「イーダ！」なんてしているかのようです。さて、お楽しみの後はビジターセンターで学芸員の三戸幸久氏のお話を伺い、質疑応答の討論会をおこないました。私達は以前から淡路島のモンキーセンターを訪れたりして、“奇形ザル”の出現に対して問題意識を持っていたのですが、原因を生理学的に研究なさっている和秀雄先生がいらっしゃらなかったということと、ここでは未だそのようなサルの出現が見られないということで、あまり詳しくはお話を伺えなかったのが残念でした。しかし生態学としてのアプローチから見ると大変興味深いお話を得ることができ、特に事前に私達のために資料をタイプ打ちして配布して下さいまして三戸氏にはとても感謝しております。また広瀬鎮部長さんをはじめ、お世話になった学芸員の方々に、紙面を借りましてお礼申し上げます。

さて、初日のみで帰る人達と別れ、次は信州に向って出発です。前述の買い出しに行った者も無事もどり、何とか“しなの19号”に駆け込みました。空席が多く、まるで貸切列車のようです。そこで私達は買って来てもらったおかずやおにぎりをパクつき、ようやく笑い声が飛び出しました。楽しく電車に揺られ、松本に着きました。繁華街らしき所を通って、旅館へ行く途中、私がよっぱらいのおじさんにからまれたところを、我がゼミの用心棒のY君に助けられ、お互いに事なきを得たのも楽しい語り草の一つです。この日の夜は卒論の中間発表でした。発表者も聞く者もコメンテーターの谷口先生も、夕食のビールで真赤な顔をしながら神妙に座っている雰囲気は何となくこっけいでもありました。

翌朝はタクシーで上高地へ。そこは人もあまり多くなく、川の流れが涼し気で、とても気持ちのよい所でした。大輪の鮮やかな紫色のあざみの花が、今も目に焼きついています。川で石投げをしたり童心に帰ったように遊んでいると激しい夕立に襲われ、皆ドブネズミのようになりました。

旅館での夕食は、神戸の人間にはとても珍しい「馬さし」をごちそうになり、皆、大はしゃぎです。またコンパでは異様なまでの盛り上がりを見せ、“じゃんけん一気”、“ゲテモノ一気”などまで登場し、明け方5時頃にやっと寝静まりました。翌朝、数名は6時起床で寝ぼけ眼の松本城見学、大暴れして迷惑をかけたにも拘わらず、親切にして下さった旅館の方にお礼を述べ、再び名古屋へ向かいます。

京大霊長類研究所を訪問しました。ところが夕べはしゃぎすぎたため、二日酔で悩む者一名。「医務室はありますか？」すると「サルを見る医者ならおりますが、まあ人間でも見れるでしょう。」…… どうも御迷惑をおかけしました。ここではチンパンジーにことばを教える研究を見せて頂きました。ハナコという名のチンパンジーの気嫌が悪く、ポポというまだ訓練したての若いチンパンジーでしたが、たいへん興味深く見学致しました。心理学部門助教授の浅野俊夫先生には、研究所の仕組から部門ごとの機能までとても詳しく説明して下さいましてお礼申上げます。しかし、帰りの電車の時間が迫っており、こちらの側からの質問の時間がとれず討論できなかった上に、追いたてるように帰ってしまったことをおわび致します。機会があれば、もう一度訪問できれば幸いです。

このようにして、何とか無事、3日間の旅行も終えました。1日1日の楽しいことばかりを思い出して見たのですが、運営にあたって多くの方に協力して頂きました。また谷口先生にもいろいろな面で御指導頂きまして、深く感謝しております。

運営委員：高井賢一　脇田博代　川上義雄

Ⅳ．授業の一風景

「ウイ　ラブ　裕さん――ガンを明るく――」のビデオを見て

甲南大学　理学部　二回生　北詰　由美

このビデオを見て、一番印象に残っているのは、主役の友人で、やはりガンに冒されている出口さんが死んだ時に裕さんが言った、「死にざまやのうて、すばらしい生きざまを見せてもろうた」という言葉だ。ものは見ようである。死を見つめて生きている裕さんの姿から、私は「ゲド戦記」（A.C.ル＝グイン）の「エアの創造」を思いうかべた。

「ことばは沈黙に
　光は闇に
　生は死の中にこそあるものなれ
　飛翔せるタカの
　虚空にこそ輝ける如くに」

三行目の「生は死の中にある」という言葉が実感できた。

人はいろいろなものに捉われて生きている。人の命はいつかは終わるものと、誰でもが判っている事なのだが、生に固執して死にたくないと思ったりする。日常を生きている人間は、時というものは未来から過去への無限の流れだと錯覚してしまっている。しかし、実際、私たちが生きていることができるのは現在だけであって、未来へも過去へも行くことはできない。それなのに、時間は連続してあると思い込み、死を目の前にして前方に時間が見えなくなると、じたばたもがいたり苦しんだりするのが人間の常だ。

それと比較して、ガンで死ぬことを言いわたされている裕さんの明るさ、あせりのない生きる姿勢が美しいと思った。死を見ている人が現在を生きることができて、なぜ元気な者が時に流されて現在を生きることができないのか。裕さんの日常は、時間を超越している。相対的な時の連続（物理的時間）である日常において、絶対的な時間を獲得している者の姿である。日常ではあまりにも加速度的に時が流れている。それに押し流されることなく、個人が絶対的な時、緩やかな時を得るには、時の不可逆性を破らなければならないだろう。

ではどのようにすれば、相対的な時から抜け出すことができるだろうか。手っ取り早い、日常から脱出する方法なら、旅であろう。旅の中では日常とは違った時間が流れている。だから旅人は、時を自由に反復できる。しかし、例えば「モモ」(ミヒャエル＝エンデ)に

「けれど、時間とはすなわち生活なのです。そして生活とは、人間の心の
　中にあるものなのです。」

とあるように、日常生活の中で絶対的な時間を獲得することが大切である。決して現実逃避になってはいけない。

裕さんの場合、時間を超越していながらも日常から離れてはいない。そこに裕さんの生き方のすばらしさがある。

ここで裕さんが言った、「僕は病気ではなくて病身なんだなあ」という言葉を考えてみる。裕さんは、自分がガンであることを知って初めから明るく生きていたのではない。荒れたこともあった。けれど、心は病んでいないと気付いた時、相対的な時間を絶対的な時間に昇化することができたのだと思う。しかしまた、絶対的時間内に安住することなく、しっかりと自分の生（または死）を見つめ生きていこうとする、しかも力んでいない姿には、心身二元論を超えた、またそのアンチテーゼとしての一元論ではなくて現実と価値、日常と絶対が一体化した、根本的な一つの方向が見える。裕さんの日常が時間を超越しているように感じるのはこの為だろう。

大切なのは、限られた生の時間をむりに伸ばそうともがくのではなく、緩やかに、ゆっくりと時を捕えること、そしてそのような一回的な「時の瞬間」の永遠性を反復することだ。再び「モモ」の中の一文を引用する。

「人間が時間を節約すればするほど、生活はやせほそって、なくなってしまうのです。」

私は限られた時間を豊かに生きたい。人は、有限な時を無限な時として捕えることは可能だと思う。

一年間、ゼミに参加したが、内容が難しく先輩の発表をただ聞いているだけだった。しかし基本的な考え方や哲学的な用語など、耳学問になったと思う。現実と価値を区別して考えることや、目的と手段を混同しないことなど、日常の生活においても気を付けていきたいと思う。

身心二元から物心一元へ
──「ウイ　ラブ　裕さん」(VTR)より──

甲南大学　文学部　四回生　石田　智子

「生けるものは知らず、死せるものは語らず。」死は、他人はもとより、自分についてさえ、いよいよ死に当面した時でなければ語り得ない最後の体験である。裕さんにとって死とは、抽象的、客観的な、第三者の死ではなく、まさに我が身の死にゆく「死」であった。

人は、自ら死すべき運命のものであることを知っている。死を、踏み出す先のない涯淵と考える傾向があるように思われる。その一点への道のりが、暗く閉ざされるようである。病気となれば、痛みがはしり、気は重くなる。さらに苦しみ、その果てに死がくる。苦の極点が死だと思ってしまう。

裕さんは言う。「病気は、病身であって病心ではない。その単純なことに気づいたとき、なぜだか軽くなった。」彼のように、死に瀕した人のこの言葉の意味を、ここに明らかにしておきたい。

文明の進歩は、生活水準を上げ、医療にめざましく貢献した。それが物質面に偏るとき、技術先行の開発や公害等の諸問題が起きた。このことは、人間性を損い、人類の存在さえ脅かすことにもなりかねない。その原因は、科学の客観性重視と、人間の精神との不調和にあるように思われる。

ところが、20世紀に入って、「科学もまた、人間が作るものであるかぎり、純粋客観に徹し得ない。」という、科学観そのものに新しい展開が起こり、「意識の拡大」が目指されるようになった。(注１)

医学についていえば、傷つき病んだ器官への機械的な部分修繕に偏り、心の存在を忘れ、その病んだ人をおろそかにしたこともあろう。人体の諸器官の研究は、細分化され深く進んだが、器官相互の疾患や身体と精神にかかわる病は、どうあつかわれただろうか。研究機関の統合に、その行きすぎを、総合的に研究していこうとする姿勢がみえる。

裕さんの場合、同じがん患者との交流や、淀川キリスト教病院等の医療スタッフの尽力もあって、家族に囲まれて、病いを心に入れることを避けることができた。事実を受けとめ、生きる方へ向かった。心と身体をふたつに。そして、科学

と人とを一つにして生きようとしたのであったろう。

人は、自分の時間の上で、いつか死を迎えなければならない。生の一点として、その一点以降として死がある。死が生を含むのではない。ここに気づけば、死は、絶対的には、わずかとなってしまった時間を生きる問題となる。その死の時までの一瞬一瞬の自己を形成する自主性、環境へのかかわりあいの問題となる。さらに言うなら、現実存在の否定としての死をのりこえるものを求めることも、生きる糧となるだろう。(注2)

現実に病気となった場合、主として、薬や手術の効果を期待するわけだが、心におくべきことは、(1)人間に本来備わっている治癒力への信頼、(2)治すものと治されるものとの信頼関係、(3)治療における愛や希望のもつ力、であろう。

自分がおかれている状態を考えるなら、環境、すなわち、家族、親しい人々、医療スタッフとの調和を失なわないようにする努力が必要である。さらには、今の自分にできること——裕さんの場合、主治医だけでなく、広く医学者、医学生、一般の人々に対し、自分が死線をさまよいながら悟った貴重な体験を、話して聞かせて、その体験が聞く人の中で生きつづけ、なんらかの医療を助けるという形で残ること、——を考え、行うことが生の支えになったと思われる。

以上のことから、裕さんの軌跡とも重なるであろう、人間回復の心理学(ヒューマニスティック・サイコロジー)について述べる。この運動の特徴として次の点があげられている。

(1) 人は人間としての全体的な統合性をもっており、単なる部分の和ではない。人間を部分的にとらえて「・・・にすぎない」と見なす還元主義に反対する

(2) 人間は自分の意志をもち、自ら選択することができ、したがって、自分自身に責任がある。外からの刺激に反応して生きてゆくにすぎないという決定論(たとえば、幼時のある環境条件によって性格が決定してしまうといった考え)に反対する。

(3) 人間は気ずくことができる。気ずきは今ここで行なわれ、知的理解を通してよりも、体験的、直接的に把握される。この気づきを無視した、頭による心理学は人間にとって一番大切なものを見失って抽象的になりやすい。

(4) 人間は、身体と感情をもっている。自分の感情(否定的な感情であっても)に気ずいて、それらに対決する必要がある。そのためには、考え

るだけでは不充分で、感情と深く結ばれている身体への気づきを深める必要がある。

(5)　人間は、一人では充実した生活はできない。互いに主体性と自己責任を尊びながら、他者との真実な関わり合いをもつことなしには、「本当の自分」を把握することができない。関係的存在としての人間を強調する。

多くを望む人間は結果を言うが、彼は経過の一瞬に喜びを見いだす。その単純なことに気づいた彼は心の目で物事を見るようになった。ひとりでは生きられない人間だから、再び、生活の場にもどった。そして、人間が信じられるようになった。

ここにおいて、医療と自主性は相乗的にはたらき、身体的にも精神的にも効果をもたらし、健全な状態であるといえるのではないか。ひとりの人間の中で。

生まれた瞬間から、人間は死に向かって歩きだす。死すべき運命にあるならば、死に対して覚悟をきめることは、自然なあり方であろう。この上で、今、ここにある自分の日常への責任を負う。過去は、今ある自分を作ったものとして、未来は、今ある自分が作るものとして受けながら。

今、自分を厳しく見つめることが、永遠の今に生きることになろう。

(注1)　「セルフ・コントロールの医学」　池見　酉次郎著　NHKブックス

(注2)　それは、子供であったり芸術であったりするであろう。(注1)同著

KoCoCorn 文庫

甲南大学生協
書評誌

創刊準備号

『人間の大地』

犬養道子 著
（中央公論社 一三〇〇円）

飢餓や環境汚染・破壊の問題が叫ばれて久しいが、事態はあまり改善されているとは思えない。この書物が出版された時（昭和58年）一気に読了し、発展途上国の悲惨な状況を知り衝撃を受けたのであるが、すでにある程度御存じの方も改めて熟読して頂きたいと思う。

ボートピープルや難民についての具体的状況、その原因を知るための経済政治の機構等については、本文に譲るとして、感銘的な箇所をひとつ挙げておきたい。流動食も薬も受けつけず、医者も匙を投げ、ただ衰弱して死を待つのみの子がいた。その子をあるヴォランティアの青年が二日二晩抱き続け、頬を撫で接吻し耳もとで子守歌を歌い、用に立つまも惜しんで介抱した。三日目に初めてその子は青年の眼をじっと見つめ、笑った。「自分を愛してくれる人がいた。自分をだいじに思ってくれる人がいた。自分はだれにとってもどうでもいい存在ではなかった」という意識と認識が、その子を「生への意欲」へと駆り立て、その時から食事も薬も受けつけるようになった。まさに「愛は食に優る、愛は薬に優る」のである。愛こそは人間存在の不可欠の糧であり、心の支えなのである。

現代日本の皮相的な飽食（内実は添加物防腐剤、農薬汚染等で危険に満ちた食糧による飽食）の社会、愛の欠如した過酷な競争社会について反省する契機を与えてくれる好著である。

文学部助教授　谷口文章

JAPAN JUNG CLUB NEWSLETTER

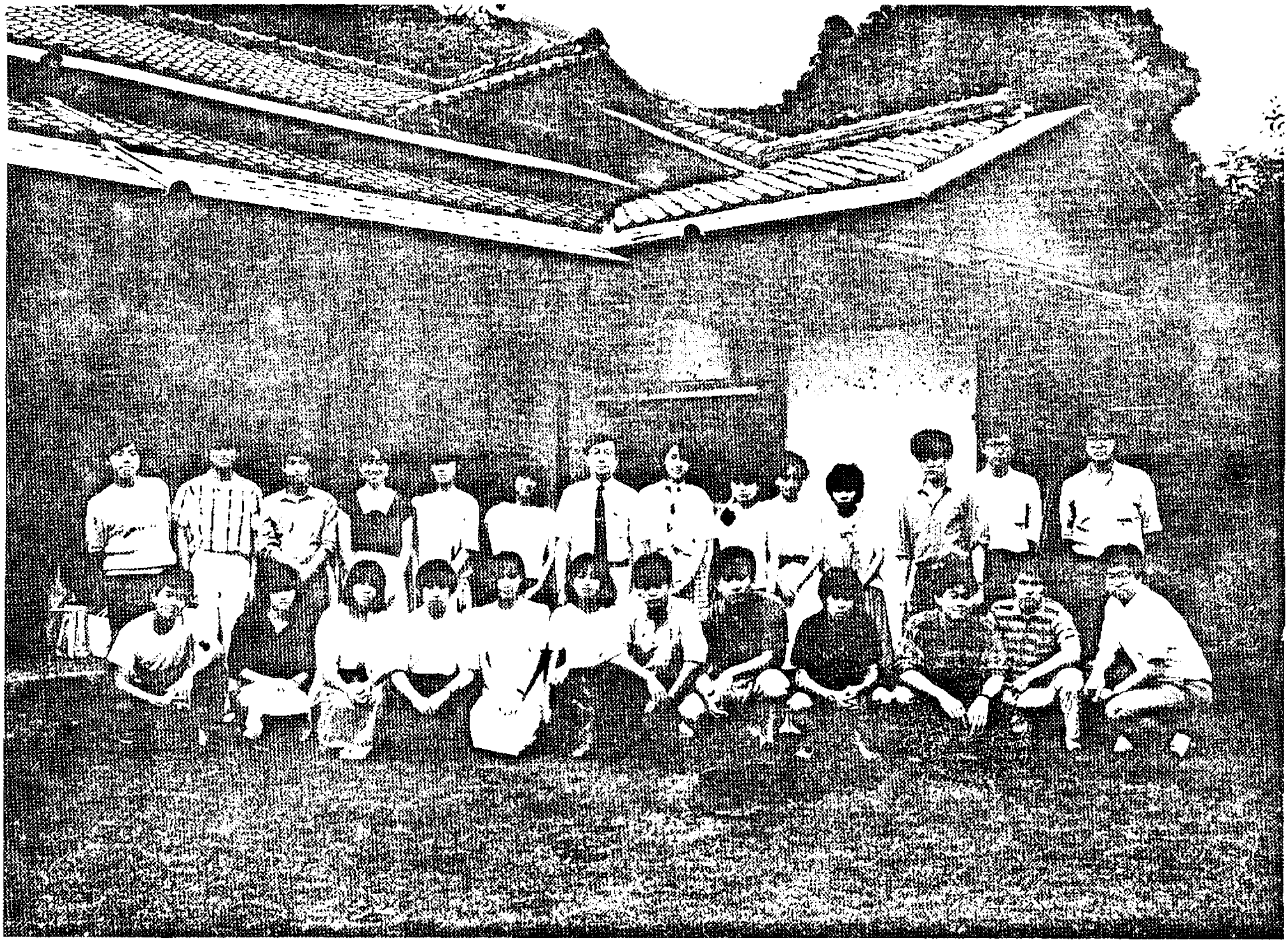
SPRING

深層心理学研究会

私たちの研究会は、昨年（昭和60年）の4月より始められています。当初、河合隼雄先生の『ユング心理学入門』と『影の現象学』を読み始めたのがきっかけとなり、ユング心理学に興味をもつ者が自然と集まってきました。全員日本ユングクラブの会員ですが、真にユングを理解するためには、やはり深層心理学の原点に立ち戻る必要が感じられ、フロイトの『夢判断』を改めて読了し、現在樋口和彦先生の『ユング心理学の世界』とフロイトの『性欲論』を輪読しています。さらに並行して箱庭療法、絵画療法、自律訓練法等を実習しております。

会員は学生が中心で、甲南大学、京都府立医科大学、立命館大学、竜谷大学、ＯＢ等15名の構成で、月平均２回のわりあいで会合をもっております。今のところオープンの研究会ではありませんが、この４月以降は甲南大学の岡田康伸・森茂起の両先生に講演かアドバイスをお願いする予定です。その際には、ユングクラブの会員の皆様の御参加を期待しております。

・連絡先：〒621 亀岡市篠町見晴2-3-11
電話 07712(3)9464
谷口文章（甲南大学助教授・哲学・研究会世話役）



昭和60年度　ゼミ構成員

―甲南大学　18号館にて―

V. 卒業論文・ゼミナール論文要旨

卒業論文

哲学の視点からみた禅

文学部　4回生　小竹　代里子

〔目次〕

序
I　鈴木大拙の説を通して
1　悟り
2　その神秘性
II　「善の研究」を中心に
1　純粋経験
2　一心と我
III　日本文化の視点から
1　弓道
2　ヘリゲルの体験
結び
註

序

中国、唐の僧、臨済義玄禅師の一代言行を記録した「臨済録」に「赤肉団上に一無位の真人有り。常に汝等諸人の面門より出入す。未だ証拠せざる者は看よ看よ。」という一節がある。これは「我々の生身の身体に位置づけることのできないあらゆる差別を超越した大自由大自在の人（無位の真人）がいて、常にお前達の感覚器官を出たり入ったりしている。まだこの真人を見届けていない者は、さあ看よ看よ。」というような意味である。

この「真人」とは何か。また、臨済は「看よ」と言うがどの様にして見るのか。

「禅」は、普通には、神秘的体験として、ある特定の人間だけが悟り得ると考えられ易い。

しかし、「真人」を先ず最初の手掛かりとし、哲学的視点から「禅」について述べることによって、「全ての人間が悟る可能性を持つ。」ということを明らかにしたい。

しかし、「真人」を手掛かりとするにしてもそれだけで「禅」について述べるのは、あまりにも漠然としている。そのため「臨済録」の他に、西田幾多郎（以下、西田とする）の「善の研究」そして日本文化を以って述べていきたい。

この論文は三つの章から成る。

先ず、Iでは「臨済録」の「真人」を手掛かりに、その他の言葉も引用し、鈴木大拙（以下、鈴木とする）の説を通して「禅」が何故神秘主義的なものと受け取られるのかを明らかにしたい。

次に、IIではIとの拘りのもとに、西田の「禅の研究」をまとめることによって、「禅」の神秘性を拭い去り、「全ての人間が悟る可能性を持つ。」ことを明らかにしたい。

そして、IIIでは、具体例として日本文化を採り挙げ、その修得によって得られる境地についてのべることにする。

I

臨済は、「禅」において普通に考えられている様に「彼岸的な実在を求めることによって合理性を超え出よ。」とは言っていない。逆に単に「看よ。」と言う。この「看」るべきものなる「真人」が「我」を生きとし生けるものとするところの「一心」であることは明らかとなった。

しかし、「元々『一心』なるものいを二つに分けているのだから『我』を滅ぼせば『一心』が現れる。」と言われても、凡夫にとっては、人間性の限界を認め「殺せ」即ち「我を滅せよ」という限りは、やはり神秘主義的なのである。

このことから、「一心」より「我」がどの様にして生じるのか、「一心」と「我」との関係を明らかにすれば、「禅」の神秘性は拭い去ることができると考える。

II

西田は、「我らの意識を離れて物そのものを直覚することは到底不可能である」とし、実在とはただ我々の「純粋経験」の事実あるのみと述べる。「純粋経験」とは毫も思慮分別を加えない、直ちに経験そのままの未だ主もなく客もない、知識とその対象とが全く合一している」状態である。

「意識においてはすべてが性質的であって、潜在的一者が己自身を発展する」と言うことができる。

・・・略・・・

以上のことから、「一心より我を生ずる」というのは「子供の時は我々の精神は自然的であるが成長するに従って統一作用が進み、客観的自然から区別された個人的意識が成立する」ということで、そして、「我を滅する」と「客観的自然から区別された個人的意識を滅する」ことになり、そこには実在の根底たる「一の生きた精神」が現れるのである。

III

ここでは、私のある試合での経験を述べようと思う。弓道とはいえ、試合では的中を他人と競うことになる。しかし、結局は自分をどれ程忘れ去れるかが問題となる。試合ともなると、勝ちたい

という欲・的中するだろうかという不安・大勢の人々が見ていることに対する緊張などの気持ちが後から後から涌いてくるものである。しかし、そのときの私は、それらの感情からは全く自由だった。ただ「自分はこう引くべき」という引き方を信じて、弓を引き絞り、後は的を見ていたと思う。練習中、狙っていると微妙に動く的が微動だにしなかったことは覚えている。引き終えた時、急に回りのざわめきが聞こえてきて、頭の中にあったのは的の残像だけであった。

以下は、ヘリゲルが彼自身の到り得た境地について述べたものである。

「現世および自己から訣別ができ、無に帰し、しかもそのためにかえって無限に満たされる〔略〕死をも、また意識しながら死んでいくことをも〔略〕少しも恐れない〔略〕人間の生存がただ数瞬にして取り消されるものにせよ、あるいは持続するものにせよ、いずれにしてもそれは非有の中の有の実現に移されることに変わりはない。」

結び

先ず始めに断っておかねばならないことがある。この論文は「体験の論理化」ではないということである。

鈴木は「禅は元来体験で思弁でないといわれるが、只体験というだけでは禅は成りたたぬ。」とし禅の禅たる所以は「自覚の意識に外ならぬ」ということから「禅」を「禅体験」と「禅意識」に分ける。そして「禅体験と禅意識とは双方扶けて働くもの」であって、一方の働きを欠くなら、もう一方も働かず、また「只感じただけでは力がない、力がないというのは感じがないのと同じ事」であるとする。つまり、自覚がなければ禅体験も体験しないのと同じことなのである。

第三章で述べた私の体験は、確かに禅体験であったと思う。しかし、私は自覚し得なかったのである。であるから、この論文は「論理の体験」でしかない。

この論文において為そうとしたことは既に述べた通り、「禅」の神秘性を拭い去り、「全ての人間が悟る可能性を持つ」ということを明らかにすることである。しかし、本来なら（次ぎの言葉で言い表せるならば）「一心」が存在するから人間は（それが人間にとって神秘的であるにせよないにせよ）悟るわけである。つまり「禅」はその「一心」から出たもの、言いかえれば、その必然性のはずである。そして、西田は純粋経験によって、すべてを説明するために「善の研究」を著したのであって、この論文においてした「純粋経験」によって、どの様にして「一心」から「我」が生じるかを説明することで、「禅」の神秘性を拭い去ろうとすることは、逆の方向からの「禅」への接し方である。決して、「禅」の本質を言い得たのではなく、ある一説によって、説明し得たということにすぎない。

この論文においては、「禅」を全ての人間に対して、「理」的に、言い替えれば客観的・抽象的・知的に解決しようとしていた。しかし、本来なら「禅」は「事」的に、言い替えると主体的・具体的・行的に、「今」「ここ」における「私自身」の問題として捉えられねばならないのである、として結論にかえたい。

《参考文献》
○「臨済録」　（岩波文庫）
○西田幾太郎「善の研究」　（岩波文庫）
○オイゲン・ヘリゲル「日本の弓術」　（岩波文庫）
○鈴木大拙「鈴木大拙選集　第四巻　盤珪の不生禅」　（春秋社）
○鈴木大拙「鈴木大拙選集　第八巻　禅とは何か」　（春秋社）
○鈴木大拙「鈴木大拙選集　第九巻　禅と日本文化」　（春秋社）
○鈴木大拙「鈴木大拙選集　第十巻　無心ということ」　（春秋社）
○「般若心経・金剛般若経」　（岩波文庫）
○秋月龍珉「鈴木哲学と西田哲学」　（春秋社）
○下村寅太郎「西田幾太郎―人と思想―」　（東海大学出版会）

ジャン・ジャック・ルソー：自己愛からの出発
………市民と人間………

文学部　４回生　村松　伊津子

＜卒論要旨＞

I

ルソーは、われわれは、理性によって、動かされるのではない、感情によってつき上げられ行動するとくり返す。この感情とは、すべての情念の源である「自己愛」（ａｍｏｕｒｄｅｓｏｉ）から派生したものであることは言うまでもない。この自己愛から、ルソーは、良心を導き出し、理性の光を当てることによって、道徳的価値を付加した。この「社会化された良心」にこそ、人間の活動性の唯一の原動力を求めることができるのである。それ故、全ての基礎は、ここに置かれなければならないのだが、長い間、人々はこのことに気付かず、「理性」（ｒｅａｓｏｎ）に余りにも信頼を置き過ぎた。人々は、「あるがままの自分」（自己愛）と「そうしなければならない自分」（理性）とに矛盾を感じ、その矛盾をどうすることも出来なくなる。

ここにルソーの根本問題は存する。つまり、自然状態の中で、「あるがままの自分」に従っていればよかった人々が、自然的偶然によって社会状態に移行し、「そうしなければならない自分」に直面した時、「個人としての自分」と「市民としての自分」に矛盾を感じる。この矛盾は、“社会状態の中での自然人”であるためには、いかにあるべきかルソーの「エミール」によって解決される。

自然状態にあって人間はそのままで自由であり、何の矛盾も感じることなく幸福であった。しかし、社会状態に入ると人間は、自然状態で生きてきたようにはいかない。社会関係が発生するにつれ、自己愛は堕落し、「利己心」へと変化する。それを防ぐために道徳が必要となるのだ。ルソーは、人間の自然的性向である自己愛を義務の次元までひきあげ苦痛を感じることなく義務を果たすことによって幸福になるようにエミールを教育する。

では、ルソーは、どのように自己愛を道徳性をもつまでにしたのであろうか。自己愛から派生し、社会化されることによって道徳性を持つに到る良心について掘り下げてみる。

II

善を愛する感情としての良心。だが、この良心のみでは、我々は、道徳的存在になることはない。良心は、ひとつの傾向性であって判断力ではない。ルソーが述べているように良心はもろい一面をもつものである。いつ利己心へ姿を変えるかもしれない。そこで我々は理性に助けを求める。理性の働きによって獲得される認識なしに、どうして、我々は、良心の対象を知ることが出来るのか。というのは、理性が善を知らしめて良心は善に向かう衝動となるからである。

理性のこの媒介によって初めて、良心は、道徳的価値を持ちえるのである。そして、この良心と理性とによって、自らの情念を支配する時、彼は有徳の人となり得る。しかし、徳の実践はむずかしい。それは、自己の幸福と両立し難いからだ。自己の情念を抑制し、義務を果たすために、おのれのもっとも自然な欲望と闘っておのが心を引き裂かねばならないとしてもやはり、有徳たりえるのだろうか。ルソーは、疑わしいとする。そこで、彼は有徳の人であるよりも、善良で素朴の人である方が容易であり、実行しやすいと言う。つまり、良心を絶えず、善の方へ向けておくことで十分であるとする。しかし、この人間の善への傾向は、必ずしも確固たるものではない。良心も堕落しやすい。そこでルソーは、信仰によって、それを防ごうとする。神を瞑想することによってのみ、その健全さ守ることができるのである。

III

ここまでみてくると我々は、ルソーが合理的に論理を進めてはいるが、結局は、信仰としか言いようのない飛躍を成したことに気が付く。最後の解決を彼は神に託すわけであるが、これは最初に彼が、良心の理論を打ち立てた時、すでに予想されたことなのである。良心の存在は、理性によって論理的には証明できない。信ずる以外にないのである。良心の存在は良心の声によって確かめるしかない。「わたしの限られた理性は限界のないものを全然考えることができない。無限と呼ばれるものはすべてわたしにはとらえられないのだ。」とするように理性によつては、神に届くことはない。

しかし、ルソーは言う。「神についてのもっとも重要な観念は理性によってのみわたしたちにあたえられる。（ｐ184中）」と。　一体、これはどういうことなのか。　ルソーの信仰は、理性によるものとは異質のものでありながら、良心の声に服従する理性を手段として成立する、と考えられる．つまり、「神は全く理解できない超越（ｐ235）」者であるが、それを、理性によって、理性の及ぶ範囲で、理解する、ということである．ルソーは言う、「神がわたしの精神にあたえる光によって神につかえるのが、すなわち、神がわたしの心に感じさせる感情によって神につかえるのが、なぜ悪いのか。・・・・・そんな教説によらなくても、わたしは、自分の能力を正しくもちいることによって、それら（神の教え）をひきだせるのではないか。」と。

人間は、自分をとりまく世界を理解するために理性しか、持ち合わせていないのだから、それによって、良心に光を与えなければ、神に近づくことはできないのである。

この意味において、ドゥラテは、ルソーを合理主義者と呼ぶ。

Ⅳ

確かに、ルソーの合理主義的傾向は認められる。しかし、ルソーの信仰は何よりもまず「感情」にその基礎を置き、良心を中心とするものと言わねばならない。しかし、理性がまったく無用というのではない。彼は、その証拠に、理性によってのみ神は認識されるとしている。「神がわたしの精神にあたえる光によって神につかえる、又、神がわたしの心に感じさせる感情によって神につかえる」と。

神は、我々に理性と良心を与えたのである。理性で神を認識するのだが、それを導き手として善を行なわせるのは良心なのである。このことを忘れると、我々は、ルソーを単なる合理主義者として、理解してしまう。この理性と良心との不断の相互補完的努力のうちに、ルソーの最も重要な概念が含まれるのである。

故にわれわれは、ルソーを合理主義者と言い切ってしまうのには疑問を感じる。なぜなら、彼を合理主義者であるか、主情主義者であるかということを論理的に解明してみても、彼の思想は、伝わってこない。彼の思想は、自己自身に即したものであるが故に、合理主義性を乗り越えて、良心に裏打ちされた生きた哲学として迫ってくるからである。

このようにして個人と市民との矛盾は和解されるのである。

詩人における感覚の問題

………中原中也論………

文学部　4回生　石田　智子

〔目次〕

序

Ⅰ　黎明期

Ⅱ　駄の理論

Ⅲ　叙事詩先行説

Ⅳ　名辞以前

Ⅴ　神的存在

終わりに

序

懐いのとうりの言葉で語れただろうか。懐いのまま汲んでくれただろうか。生まれた詩について何がいえよう。

ここでは中原中也の詩観を辿り、詩人における感覚について述べようと思う。

I　黎明期（ダダイズムを中心に）

ダダは、あらゆる伝統の価値、合理主義的な思考、芸術の既成形式を否定する強烈な主我主義である。そこでは全て善悪の序列は廃される。先入見のない状態にあって事象を取り込むことは、形式上の整斉美や洗練された言語の駆使による言葉の美をそこなうことになるかもしれないが、そのイメージは活性化される。

II　皺の理論

生きることは老の皺を呼ぶことになると同一の理で想ふことは想ふこととしての皺を作す。想ふことを想ふことは出来ないが想ったので出来た皺に就いては想ふことが出来る。

（「小詩論、小林秀雄に」より）

人は感覚が何によってもたらされたかを探るが、凡そ何かを探すのが精一杯である。「その凡そだ、詩（うた）を退屈にするのは。その凡そを持たないためには一心不乱に生きるばかりの人である必要がある。」（同上）

また、人は対象に接して言葉を使う。それが当然だと思っている。言語的に共通する語によって個人の意志を伝えているが、個人的な言葉を使ってはいない。社交的圏を相手に話す。つまり言葉は専ら、比較によって成り立つ各人の人格が前提となって選ばれて使われる。

III　叙事詩先行説

詩人における芸術について述べる。一つには、精神の実質的動機、ひいては芸術的欲求の起源である直観が問題となる。また、「見ることを見ることが不可能な限り自己の叫びの当の対象をこれと指示することはできない。」（同上）。考えられるのは夢想的過程をとることである。そのままでは表象の羅列だが、「純粋にエステティクに言って、デスクリプションよりも進んだものとは言へる」（同上）のである。ここに象徴の叙事に対する優越をみとめることができる。

しかし、人はこのどちらにも徹しきれずにその歌の動機を説明してしまう。何によって感動したかと。歌おうとしないで、歌うにはどうすべきかという方法論を言いだしたところに失敗があった。すべては、人が叫ぶところからはじまる。それは叫ぶ人・主体の問題に続く。

詩人に求められるのは事象の説明ではない。また、人は、彼がそれまで出逢ったものの全ての一部分である。生まれ育って詩を書くに到るまでを経歴として辿ることはできるが、その情意一つ一

つを完全にとらえるにはその人の生を生きねばならない。その上、情意を詩にすればそこに言葉が介在する。原型をとどめているとは言い難い。だからより摩擦の少ない叙事に期待するのである。既に原型をとどめていないであろう表現に再び想いを働かせるより詩人と魂の近い人の感性にこれを希う。

Ⅳ　名辞以前

「これが手だ」と、「手」といふ名辞を口にする前に感じてゐる手、その手が深く感じられてゐればよい。（「芸術論覚え書」）

言葉にしてしまえば轍をふむ。そこで中原は、歌うことは「認識以前」、「名辞以前」とした。認識とは知る作用及び成果をいう。

「一つのメルヘン」を読む。ここには視、聴、触覚によって感得された感覚以上の世界を感じる。時が生まれた頃から未来への円環。よぎる生命。あるものを見つめながら変化があったならばそこにどれほどの時間があろう。これはアリストテレスのいう「共通感覚」、すなわち人間の五覚を相渉りつつそれらを統合して働く全体的感覚である。この感受性は世界を現前させる。「一つのメルヘン」には、いわゆる絶対時間があらわれたのである。

中原は、「人間のあの、最後の円転性、個にして全てなる無意識に持続する欣怡の情」のある人を人間詩人という。

Ⅴ　神的存在

（略）

終わりに

雪の白さより白いもの。これを表現することを考える。それはおのずから完成していなければならない。「雪のようにと言えば、名辞界に属する。まさに言い得て妙であるきわみに初めて現れよう。「Ａ－Ａ＝沈黙」とするならば、沈黙の近似値がもとめられればそれだけＡとＡ’はイコールに近づく。

白くなく限りなく白く。

《参考文献》

○大岡昇平、中村稔、吉田凞生編「中原中也全集　全六巻」　（角川書店）
○中村雄二郎「共通感覚論」　（岩波書店）

光合成細菌 <u>Rhodospirillum</u> <u>rubrum</u>の非紅色変異菌（non-purple mutant）についての研究

甲南大学理学部生物学科（分子生物学研究室）
指導教官　　中村　運　教授
報告者　　４回生　植木　通博
共同実験者　修士１年　柚木　幹弘

１．序論

光合成細菌は、文字通り光合成を行なう細菌である。細菌は、一般に、細胞内の機能分化が進んでいないが、光合成細菌では、光合成のための原始的な膜系が発達している。また、光合成細菌の一種である<u>R.rubrum</u>には、主染色体ＤＮＡの他に、プラスミドと呼ばれる小型のＤＮＡが存在しており、このプラスミドＤＮＡは、光合成能力に関する遺伝に関与していることが、明らかになりつつある。

本研究の最終的な目標は、光合成細菌の光合成を、主染色体ＤＮＡとプラスミドＤＮＡとがどのように調整しながら支配しているかということを明らかにし、その機構を高等植物における遺伝子支配と比較することにある。そのような研究目標の一環として、本実験は、<u>R.rubrum</u> からプラスミドを取り除いた突然変異菌を得て、その変異菌と野性株を比較することから、プラスミド上にある遺伝子を予測することを目的とする。

２．本実験の背景

生物は、基本的構造によって２つに分類できる。１つは、細胞に核と呼ばれる構造があり、遺伝子がそのなかにしまいこまれている「真核生物」である。我々のまわりの動物も植物も、ほとんど真核生物である。もう１つは、細菌のように核を持たず遺伝子が細胞質中にむきだしで存在する「原核生物」である。真核生物には、核の他にも、細胞の機能を分担する器官が分化している。葉緑体は、その一例である。これに対して、原核生物には、そのような分化はほとんどみられない。生命は、まず原核生物として誕生し、その後、真核生物に進化した。しかし、どのようにして、原核生物へ進化したかは、よくわかっていない。現在主流となっているのは、「共生説」と呼ばれている。この考え方によると、核や葉緑体は、もともと別々の独立した生物でそれが、互いに共同生活するようになり、ついに、一つの生物となってしまったのが、真核生物なのである。この共生説の支持者たちは、これは、共生するようになる以前の独立生活の痕跡であると主張している。

これに対して、原核生物は連続的に変化して真核生物に進化した、と主張する人々もある。光合成細菌において、主染色体とプラスミドＤＮＡの間に光合成についての役割分担が高等植物と同じようにあることが示せれば、原核生物と真核生物の連続性を示すこととなり、共生説との反論となる。

本実験は、このような生物の初期進化が連続的か断続的であるかという論争が背景にあるのである。

３．本論

実験には光合成細菌である<u>R.rubrum</u>を用いた。この細菌は、光合成の他に呼吸も発酵も行なうことができる。そして、嫌気的条件下で、光合成色素を合成し深い紅色を呈する。

プラスミドを除去するために、以下の手順で、<u>R.rubrum</u>にアクリフラビンを作用させた。

①前培養として、野生株を４日間生長させた。

②アクリフラビンを０～８μg/mlの濃度になるように加えた培地に、前培養した菌液を加えて、６０分間振とう培養した。

③これを固体培地上に移し、コロニーを形成させた。

野性株の生長したコロニーは、深い紅色となるが、<図１>に示した頻度で、野性株以外の色をしたコロニーが出現した。グラフの横軸は、アクリフラビン濃度、縦軸は、非紅色のコロニーの出現率を示してある。ほぼ、アクリフラビンの濃度に比例して、出現率は高まっている。

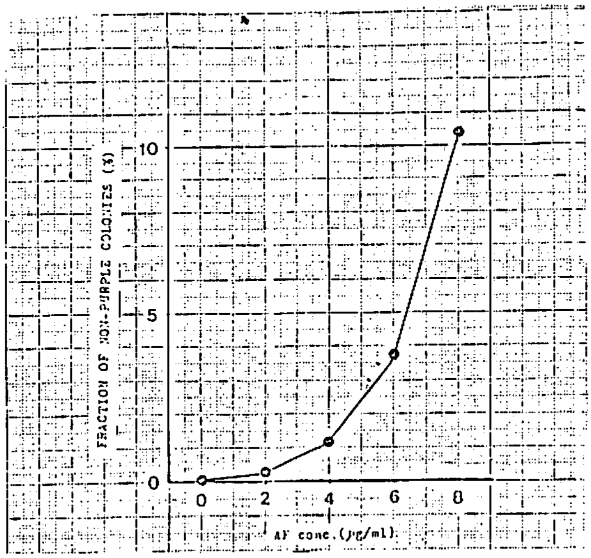
変異株５９株を分離培養し、さらに調べたところこのうち１３株は、明らかに光合成色素が異常な変異菌であった。これらの菌は、白色、オレンジ色、はだ色、黄色を呈したものがあった。

このうち３株について、アクリフラビンの感受性を野性株と比較した。その結果が、<図２>である。横軸は、アクリフラビン濃度、縦軸は、対照区（濃度０μg/ml)に対する生存数の比率を対数で表示した。左側が野性株である。黄色の変異体は、野性株と同じ程度の感受性であったのに対して、オレンジ色の２株は、いずれも、野性株より約１００倍の耐性をしめした。さらにアクリフラビンに対して耐性の認められた変異株について、細胞壁の合成阻害の作用のある抗生物質であるシクロセリンの感受性を野性株と比較したのが、<図３>である。横軸は、シクロセリン濃度、縦軸は生存率を対数軸で示してある。野性株（KR202)は、５μg/mlの濃度下で完全に生長できないのに対して、変異菌（K302)は、まったくの耐性を示した。得られた変異株全体について検討を加えたわけではないが、これらのデーターから、プラスミドＤＮＡ上に、これらの薬剤に関する遺伝子が存在することが示唆された。

今後、変異株から、ＤＮＡを分離して、プラスミドＤＮＡが除去されていることを明確に示さねばならないだろう。

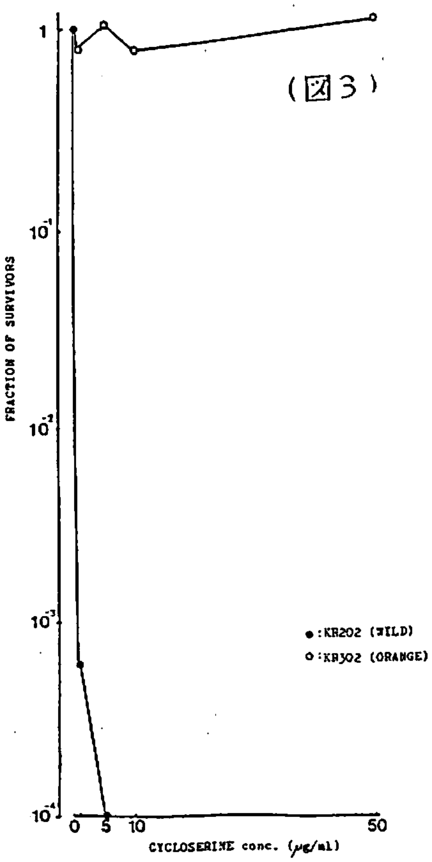
また、プラスミドＤＮＡの機能をより直接的に解析するために、遺伝子組み換え技術を用いることを検討している。この技術を用い、抽出したプラスミドＤＮＡを、プラスミドを持たない光合成細菌や大腸菌に組み込むことによって、遺伝子産物を直接固定することができる。

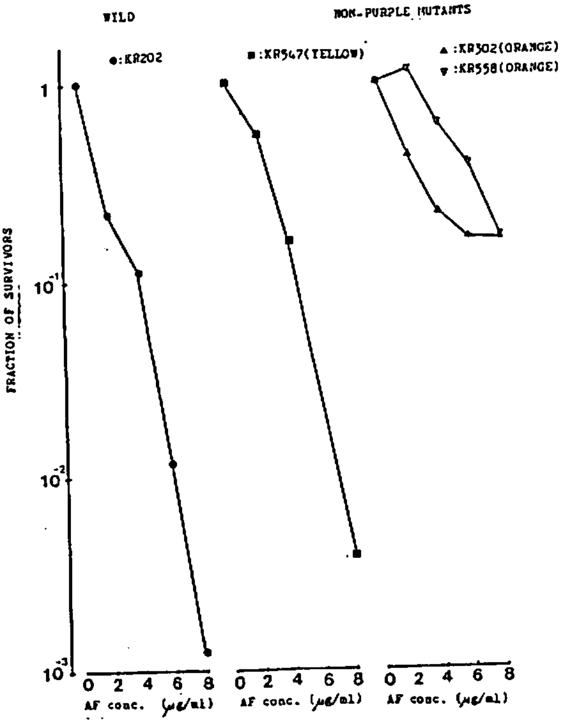
今回、予備的実験として、大腸菌から得たプラスミドＤＮＡを、大腸菌と同様の手法で光合成細菌へ形質転換した。用いたプラスミドＤＮＡを、大腸菌と同様の手法で光合成細菌へ形質転換した。用いたプラスミドＤＮＡには、ある抗生物質の分解酵素の遺伝子が存在している。このプラスミドＤＮＡを含む組み換え体は、その抗生物質を含んだ培地上で生育ができるので、識別できる。実験結果を<表１>に示す。光合成細菌では、５×１０の頻度で組み換え体を得ることができた。



（図1）　アクリフラビン（ＡＦ）による非紅色変異株の誘発率

野生株（KR202）と変異株のアクリフラビン（図2），シクロヤリン（図3）に対する抵抗性の比較





（表１）　大腸菌（E.coli）と光合成細菌（R.rubrum）の組み換え体形成率の比較

STRAIN	PLASMID	NUMBER OF CELLS/ml ON SELECTIVE MED.	ON CONTROL MED.	RATIO
H43 (E.coli)	pBR322	7.6×10^{1}	8.6×10^{6}	8.8×10^{-6}
KR202(R.rubrum)	pBR322	2.7×10^{2}	5.36×10^{7}	5.0×10^{-6}

４．結論

光合成細菌Rhodospirillum rubrumに、プラスミドＤＮＡ除去剤を作用させることにより、光合成能力に異常株を得た。変異株は、シクロセリン、アクリフラビンという薬剤に対する抵抗性が変化していた。このことから、プラスミドＤＮＡの上に、光合成や、これらの薬剤の抵抗性を支配する遺伝子があることが示唆された。

〈 最後に 〉

理学部の学生として、一年間にわたって、実験を行なってきたが、結局、ごくあいまいな結論しか導き出せなかった。客観性のあるデーターを得て、確実なことをつみあげてゆくことの難しさを痛感した。

一方、谷口ゼミの一員として、文系の人々が、文献などを通じて、どのようにして問題意識を形成させ、議論しながら深めてゆくかを知った。特に、自分の考えを、論文にまとめあげてゆく過程は、興味深かった。また、ゼミ旅行での見学を通じて、科学と人間の関係について、問題意識をもつことができた。

科学技術の影響がますます増大しつつある今日、私たちは、理科系的な確実性を追及しがちであるが、同時に、問題を深くとらえる努力をしつづけてゆかねばならないと感じた。

研究生論文

研究生論文
ルソー『エミール』における教育の意義
…………透明な心を探して…………
文学部社会学科研究生　川崎　幸千代

I　自己愛から良心へ

「理性だけが私たちに善悪を知ることを教える。」（『エミール』以下Eと省略　E．P８１）と述べるときルソーは、理性に救いを求めているかのようだが、果たしてそうなのであろうか。

人間が生まれるとともに生まれて、決してなくならないただ一つの感情が「自己愛」である。これは、それ自身は善悪に無差別だが社会において一たび、想像力が働きだすと、善にも悪にもなり得るのである。

この自己愛は、想像力により、他者と自己を比較し他人の「不幸」を知ることに心の満足を得たり、他人を傷つけようという明白な意思、毒のある憎悪、羨望、腹黒さ、裏切り、詐欺などへと人間を堕落させる感情に転化し得る。この様な社会の生んだ派生的な感情は、確かに、本来の有徳心とは全く関わりをもたないであろう。

しかし、自然状態で、同胞が滅び、又苦しむのを見ることに対して、自然の嫌悪を我々に起こさせる感情がある。これらの感情は、「あわれみ」の感情である。ルソーのこの言葉は、自分の苦しみを他人の中に見出すことを意味しており、あくまでも、相手との対等意識に裏づけられている。そして、想像力の働きによって、自分の苦しみ、怒り、怖れといったことへの嫌悪を相手（他者）に写し出し、相手と一体化することを意味する。従って、この感情は上述の社会による派生的な感情とは異なり、純粋に内的なしかも、善なるものと言えよう。

ところで、それ自身善悪に無差別な生得の感情即ち「自己愛」を善なる方向へ導くものは、「良心」という中核をなす感情である。すなわち、社会の様々な関係の中で、人間が有徳に生きるためには、そして正義の戒律が死んだ文字にとどまらないためには、それは人間の心にとって自然な感情の上に基礎をおいていなければならない。この自然な感情が「良心」である。ルソーは、述べる。「良心は決してだますようなことはしない。良心こそ人間の本当の案内者だ。魂に対して良心は肉体に対する本能と同じようなものだ。良心に従う者は自然に従い、決して道に迷う必要はない。」（E．中P１６４）この様に、善なる方向へ、徳へと、人間を高めていくのは、決して欺くことのない「良心」である。しかし、社会状態で生きていない自然人や子供には「良心」は潜在的にしかなく、あるにしてもいまだ目覚めておらず、自然的感情としての「自己愛」である。

以上のことから、人間を有徳たらしめるのは、理性以前の感情、つまり、その中核にある「良心」であるといえる。しかし、「良心」は潜在的能力のままでは、社会状態においてうまく働かない。それは傾向性に終わるからである。そのためには、理性の光によって何が善であるかが示されなければならない。

そこで、ルソーは『エミール』において、人間の根本の生得感情＝「自己愛」を、発達段階に応じた「理性教育」によって「良心」へと導こうとするのであるといえる。

Ⅱ　良心・理性・自由

善悪を知るのが理性であり、善を行なうのが良心であり、それを可能にするのが自由である。

（略）

Ⅲ　『エミール』における教育の意義

『エミール』はエミールという仮定された一人の少年を中心にして特殊な具体的教育を描きながら、それを通してルソーは人間や教育の本質を浮き彫りにしている。そして、ルソーの問題の中心は「人間性の回復（自我への復帰）」である。では、一体、ルソーは如何なる「教育」により、「人間性の回復」を行なおうとするのだろうか。特に、子供の時代の「教育」は「純粋に消極的でなければならない。それは美徳や真理を教えるのではなく、心を不徳から、精神を誤謬から守ってやることにある。」（Ｅ．Ｐ１３２）とルソーが述べるようなやり方でなければならない。この様な自然の発達に従った「教育」がルソーの考える「消極教育」であり、その意義は、究極には、人間の有徳心の発達という点にあるのではないか、と私は考える。

Ⅳ　結び

ルソーの「教育」の意義を探ることと同時に、人間が社会の中で「自我」を喪失しかけながらも、立ちかえることができるのは、自分の感情であるということも気づくことができたようだ。我々の「心」のヴェールを取り除くのは我々の感情なのである。「良心」は、我々を善なる方向へ導く。また、自然を美しく思う心は、何か不思議に我々の心のヴェールを取り除いてくれる。親を思う心は、何故か悪い行為をさけるようにさせる。様々な感じ方しだいで我々は幸福に生きられるように生まれているのではないか。生まれた時に、透明な心をもった魂として社会に生まれたのだから。

《参考文献》

○ルソー「エミール　上・中・下」（岩波文庫）
○桑原武夫「ルソー論集」（岩波書店）
○中川定久「甦るルソー」（岩波書店）
○三輪正「議論と価値」（法律文化社）
○中村雄二郎「感性の覚醒」（岩波書店）

ゼミナール論文

ゼミナール論文「楽園を求める心
—顕教四方仏・弥勒—」

文学部　四回生　吉内　信子

（目次）

一，宗教について——仏教の「救い」——
二，顕教四方仏
三，弥勒信仰と弥勒の世
四，むすびにかえて

一，宗教について——仏教の「救い」——

いかに科学が発達し、人々の意識が変化しようとも、私達人間には解くことのできない問い、かなえられることのない望みが多く存在する。例えば、「死」は昔から生きとし生けるものにとっては必至の事実であり、故に最大の恐怖であった。

（略）

宗教とは、その様な合理的には解決し得ない問いに悩む人々を温かく包み、そして楽園を——せめて今よりよい世界を、と求める人々に希望を与える、救いの光りである。

（略）

死の恐怖は、自分がこの世から去っていかなければならない悲しみ・苦しみと、自分がこの世から去ってもこの世は変化なく進んでいく、といった孤独感・不安感から生まれるとすれば、仏は浄土への往生とそこでの縁ある人々との再会を約束している。

（略）

二，顕教四方仏

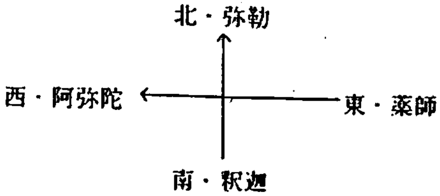
仏教の世界観は、二つに分けて考えられる。すなわち、「世」観——時間的なひろがりと、「界」観——空間的なひろがりである。

輪廻転生の思想をもつバラモン教の要素を受け継ぎ発展させた仏教では、他の宗教に見られる様な「創世紀」や「終末思想」にあたる伝承はない。個々の人間の命の歴史こそが仏教における絶対的な歴史であり、この世に於いての過去—現在—未来の世は繰り返されるものと考えられてきた。

個々の人間の過去から未来への流れと、相対的なこの世における時間の流れ、という二つの歴史

それぞれの過去と現在、未来を守る如来の信仰、それが顕教においての四方仏への信仰である。

顕教四方仏においては、東に薬師、西に阿弥陀、南に釈迦、北に弥勒の各如来が配される。個々の人間の歴史として絶対的な過去から未来への流れを表すものが、東西のラインにおける薬師如来と阿弥陀如来であり、時間の流れという相対的なそれを表すものが、南北のラインにおける釈迦如来と弥勒如来である。



（略）

三、弥勒信仰と弥勒の世

弥勒は、釈迦の入滅に先立ち、一度死んで天上の兜率天に生まれ、現に説法を続けている。兜率天は弥勒の浄土であり、人間界より上生してくる人々は、さまざまな快楽をうける。釈迦入滅五十六億万年が過ぎると、弥勒は人間界に下生する。世の苦悩を見て出家したのち仏陀となった弥勒は、竜華樹の下で三会の説法を繰り返し、人々を阿羅漢とする。弥勒は第二の釈迦、“補処の菩薩”と仰がれていた。

（略）

（下生信仰の経典には、）物質的に恵まれ、さらにインドのカースト制度や儒教的規範などの現実の法秩序の体系と対立する「差別のない幻想のコミューン」（安永寿延氏）が描かれている。

（略）

ここに楽園は完成する。「将来久遠」という時間の長い経過後、弥勒が下生して人民を救済するという、仏教的メシアニズムが、東洋的終末論が成立する。

（略）

日本において、弥勒信仰は大化改新以前に遡ることができる古い歴史を持っている。律令社会に必要な儒教的「礼」が、兜率天に上生するにあたり必要とされる厳しい「戒」に通ずるとして、社会の基礎を整える時期にあたり、まず上生信仰が隆盛期をむかえた。

しかしその後、信仰は変化した。

（略）

弥勒は人々の願いによって現在に呼び出される。時の経過と人々の努力によって造られた理想の国土に現れるべき弥勒は、他力信仰的な約束の神として、人々の願いをかなえ、救いを求める声にこたえるために、現在のこの世に下生する。現在を楽園と化すために、遠い未来、終末における楽園への渇望は消える。「弥勒の世」の観念の変化、これは十世紀以降の日本での弥勒信仰の姿である。

（略）

四，むすびにかえて

古代の歴史を学習していて感じること、それは、古代人の素朴さであり、反対にその恐ろしいま

での執念深さである。現代人は彼らを見くびり、傲満ともいえる態度で彼らに接している。古代の人々を見習うことができるならば、この世の人々の心全てに少しでも純粋さが増すならば…夜星を見て、楽園への想いを純粋に抱けるならば、ストレスや、渇きがちな心も少しは潤い、楽しい時を過ごせるのではないか。

《主参考文献》

宮田　登編『弥勒信仰』民衆宗教史叢書８　雄山閣出版

佐伯　快勝『仏像を読む』　大和書房

ひろさちや『仏の世界と輪廻の世界』　大法輪閣

渡辺照宏『現代人の宗教８　弥勒経』　筑摩書房

田村圓澄『半跏像の道』　学生社

ひろさちや『仏の世界と輪廻の世界』　大法輪閣

渡辺照宏『現代人の宗教８　弥勒経』　筑摩書房

田村圓澄『半跏像の道』　学生社

日本人の意識構造
～現代社会の意識形成における宗教の位置づけ～

経済学部　４回生　黒川　禎三

序章

日本は戦後４０年の間に、数多くの問題を克服し、世界有数の経済大国となった。この成功の秘密は何処に存するのかを明らかにするのが、小論のテーマである。

日本経済の成功は、すぐれた経済政策や、ミクロ的に考えると日本独特のマネジメント（日本的経営）に依るところが大きいが、私はその経済政策、経営方式の根底となるもの～つまり日本人の行動を裏付けるもの～をこれから観てゆきたいと思う。そこで第一に、日本人と欧米人の職業倫理の源泉を考察する事にする。次に日本人の職業倫理がどの様に形成されてきたのかを考えてゆき、最後に日本人の職業倫理の今後の問題点を論じてゆく。

１．

日本は高度経済成長を達成したが、諸外国から「エコノミック・アニマル」、「働き中毒」と多くの中傷が与えられてきた。ここからわかる様に、諸外国と日本では、労働に対する価値観、又は位置付けが全く異なっている事である。ここで諸外国の労働に対する価値観について述べてみよう。

労働の概念が生まれたのは、はるか昔の事であるが、それが成熟化したのは、西欧では中世末期の事であった。当時はカトリックの勢力が強大であり、商業は卑俗なものとされていた。その中世の宗教観念に新風を吹き込んだのが、マルチン・ルターであり、カルビンであった。両者の宗教革命によって、人は信仰を心のよりどころとし、日々の労働を勤勉に行なう事こそ真の祈りであると共に、労働によって獲得した報酬は、神の恩寵の現れであるという考えが人々に浸透していった。この考えが、資本主義段階の基礎になったと主張したのがマックス・ウェーバー（Max.Weber)であった。ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の要旨を紹介する。ウェー

バーは、富の追求を邪悪の極致とは考えず、職業労働の結果としての富の獲得を、最上の禁欲的手段、信仰の真なる証明であるとし、これが（プロテスタンティズムによる禁欲的節約強制）が資本形成を結果としてうみだし、資本主義の基礎を作る重要な要素となったとしている。

これがウェーバーの主張であるが、資本主義段階以前と比べて、資本主義発達段階における人間の労働に対するキリスト教（新教）に対する価値観が激変した事を示すものであろう。端的に言えば、欧米社会に於いては、宗教と人間の行動が密接にあり、人々の倫理観も宗教と切りはなせず、加えて倫理観に立脚した人々の価値観一たとえば、個人主義という考え一も現在にまで受け継がれ人間の行動が規制されている。

それに対して、何が一体日本人の価値観を形成し、又保証しているのであろうか。次ぎにそれについて考察したい。

2．

現代の日本人に決定的に影響を与えたのは、江戸幕藩体制であろう。理由として、約三百年間の諸外国とのコミュニケーションを完全に絶たれた鎖国政策がある。その制度の中で異質の文化と全く接触しない日本人の行動の対する価値観は、同質的かつ集団的傾向を帯びてきたのである。加えて江戸体制における儒教が日本人の価値観を影響を与えた。それ以前に存在した仏教、神道思想と相まって藩における主従関係を明確に規定し、「御恩と奉公」を最上とする考えが日本人に植えつけられ、今の会社と人間という考えにも、この価値観が一貫して流れているように思える。そして、明治維新を経験した日本人によって行動が裏付けられ儒教等によって規定された価値観すなわち「主従」と、諸外国と鎖国解除後、外交関係を結ぶ事になった日本人は、外からの異文化や異質な価値観に対する自己防衛のため、ますます、日本人間での一体化、同質化、集団化への傾向を強めていった。さらに儒教のみでなく、仏教、神道も日本人の行動に影響をもたらす事になった。例えば神道で見られる自然信仰（アニミズム）や、共同体規制の中に自我を封じ込める行き方などは、日本人の集団化の基礎付けを行なったと考えられるし、他方、仏教では、俗信を捨て、自我を消して信仰に没頭するという考えがあるが、これも日本人の企業への忠誠心にも通じるものがあるのではなかろうか。これが現在の日本人の社会に対する帰属意識と「集団の中の個人」という考えにも受け継がれていったといえるのではないか。

結論

日本人は、仏教・神道・儒教思想等によって、どのような影響を受けたのであろうか。日本人の行動様式は宗教思想の影響をどの様な形で受けたか。

私は、日本人は輸入宗教の外的な社会規範としての教義のみをとりだして、それを自分たちの生活に利用するために形を変えて、日本人の行動原理にとりこんでいった様に思う。すなわち、宗教の持つ内的自己規制の概念よりも、社会的で外的規範などを宗教から抽出し生活に適合させていると思う。そのため、日本人の集団拘束力は非常に強力であるが、内的自己規制の面では脆弱な部分がかなり多くある。自己規制の原理の欠如は、現在の多くの社会病理（家庭内暴力、校内暴力、いじめ等）の原因と言えるのではないか。日本人の社会的な外的規範の拘束力は強力であり、そのため経済力の面で成功したと言えるが、他方自己を抑制する内面の意識の弱さが欠点と言えよう。したがって集団化の解消が進む今日の社会において、新たなる日本人の意識構造を模索する必要性が一層強まっていると思う。

Ｊ．Ｓ．ミルの停止状態論にみる環境問題

経済学部　４回生　菅原　宏樹

はじめに

現在、我々が直面している社会的問題の一つに、公害・環境破壊問題が挙げられよう。この環境問題というものは、価値中立的な自然科学や社会科学の限界による、社会の中の歪みといえよう。このような問題に直面した我々は、今、価値中立的なものとなってしまった科学に対して倫理的立場からのサポートを必要としている。そして、それは経済学という一つの社会科学に対しても同様のことがいえるであろう。

私は、ゼミ論の主題をこの環境問題におき、経済思想の立場からアプローチしたい。過去の経済学者、中でもJ.S.ミル(J.S.Mill)の「停止状態論」を中心として、彼の環境問題に対する姿勢や考え方を見ていきたい。そして、それらを通して、今このような問題を抱えた我々は、どのようにして未来社会を迎えるべきなのかを考えてみようと思う。

１、自然と人間

公害に対する批判の根本には、人間と自然との調和という観念が大きく横たわっている。それは、明らかに大切な観念であろう。産業革命の時代以来、科学や技術の発展の過程で外なる自然、即ち環境としての自然から様々な資源を採り出し、様々な廃棄物を投げ返すという仕事を続けていくうちに、人間は自分自身が環境としての自然と同様、一個の自然の創造物であることを忘れかけるようになった。そして今、我々が資源の枯渇に気づき、公害に悩まされる時、初めてその単純な真実が思い出されようとしているのだ。本来、自然の一部である人間は一定の環境の内部でしか生きられない生物である。環境としての外なる自然は、単に人間が征服すべき客体ではなく、人間が和解すべき相手なのではなかろうか。

ところで我々は自然を征服することによって文化を築いてきたのであるが、この外なる自然の征服としての技術文明は今日極めて大きな成果をあげているものの、それは同時に内なる自然としての道徳的な在り方と釣り合わぬほど異常に成長してしまった。そこに今日の技術文明の様々な疎外的状況が生まれているのである。人間は自然から離れることをもって文明化とみなしてきたのだが、自然を破壊し、征服することによって、かえって人間は自然から手ひどい仕返しを受けている。我我は自然を自分の外なるものとしてそれを破壊して文化を創ってきたのだが、そうしている我々人間もまた、自然であることを忘れているところに今日の精神の混乱が内在しているのではないか。外なる自然に対して人間自身は内なる自然なのだから、外なる自然を破壊することは、自分自身の自然を崩壊させているのだということに我々は気づかないでいるように思う。

２．Ｊ．Ｓ．ミルの「停止状態論」と現代

アダム・スミスの手によって生み出された経済学は、その当初、理論的には人間の経済生活は無際限的に良い方へと向かって行くという進歩の原則に則った、楽観的なものであった。しかしながら、スミスの古典派経済学を受け継いだ、リカードやマルサスらの理論から来る見通しは極めて悲観的なものであり、将来において人口や土地などの要因から、人間は再び貧困に悩まされるであろうというものへと移り変わっていった。

一方、思想的には、その当時の産業革命の世相を背景とした、いわば産業第一主義ともいうべき、富の増加を人間の幸福のための絶対的な価値とみなす、「進歩への信仰」ともいうべきものが貫かれてきた。

しかしながら、この古典派経済学を統括したといわれるJ.S.ミルは、生産と富の増加を信奉する当時の「成長論」には、いくらか懐疑的である。彼は、当時の人々が抱いていた理想一自らの地位を改善しようと苦闘している状態こそ人間の正常的状態であり、互いに人を踏みつけ、おし倒し、おし退けることは最も望ましい人類の運命であって、決して産業的進歩の過程での忌むべき特質ではない。一には魅力を感じない、と『経済学原理（四）』の中で述べている。そして「生産の増加がいまだに重要な目的になるのは世界の後進的な国々においてのみである」として、先進国では分配の改善と人口の抑制が必要だと言っている。このように、理論的には他の経済学者と、ほぼ同じような結論に達しているミルであるが、思想的には大きく異なっている。富の増大イクオール人間の進歩という通念に疑問を投げかけ、本来の人間のあるべきかたちとは、どういったものかを彼の理想に基づいて打ち出そうとしている。

ミルの時代には、まだ今日の様に切実に環境問題が訴えられてはいなかったのだが、彼はこのようにも言っているのだ。「自然の自発的活動のためには全く余地が残されていない世界を想像することは、決して大きな満足を感じさせるものではない。…富と人々との無制限なる増加…そのために地球がその楽しさの大部分のものを失ってしまわなければならぬとすれば…私は後世の人たちのために切望する。彼らが必要に強いられて停止状態に入るはるか前に、自ら好んで停止状態に入ることを」と。これは自然環境の快適性を破壊する経済成長と人口増加に対する批判の先駆といってよいだろう。

このようなミルの提言と比較し、我々のいる現状はどのようなものだろうか。我々人間は単に富や豊かさにおいてのみ進歩してきたが、環境破壊という現実を前にして、私は停止状態に入る機会を逸してしまったのではないかとさえ思うのだ。

3．来たるべき文明社会

それでは現在のような公害や環境破壊という問題の解決として我々は単に、文明や科学を否定するだけでよいのだろうか。

再び、ここでミルの言葉を引用したい。彼は、「資本および人口の停止状態なるものが、必ずしも、人間的進歩の停止状態を意味するものではない。」と、述べている。停止状態においても、あらゆる種類の精神的文化や道徳的社会的進歩のための余地があることは従来と変わることがなく、『人間的技術』を改善する余地もまた、従来と変わることがないであろう。そして、そのような産業上の改良が、ただ富の増大という目的にのみ奉仕するのではなく、労働を節約させるという本来の効果をのみ生み出すことになるだろうと、彼は続けている。つまり、ミルは停止状態においても技術の改善は、なされていくだろうと予想しているのであるが、ここにおいてその目的は労働の節約に限定されている。しかし、もしその目的を現在、我々が抱えている問題に照らし合わせて、環境の保全に向けても、おそらくミルの意向に反するものでないことは明らかである。過去にもどれない我々には、技術によって問題の解決にあたる他、道は残されていないようだ。

公害へ向けられた憤りが技術そのものまで巻き込んでしまったら、人間には破滅しか残らない。いかに困難が多くても、人間は自然との調和を構成する技術の開発という方向に解決を探すほかないであろう。これまでの、自然を畏敬せず、破壊、歪曲するような文明を是正し、自然の下で我々

が他の自然物と共存できるような文明社会の到来を私は期待する。例えそれが社会科学であっても、自然科学であっても、技術はそれを用いる人間の姿勢によって生かされもし、無意味なものともなるのである。

《参考文献》
○ジョン・ステュワート・ミル「経済学原理（四）」（岩波文庫）
○清水幾太郎「人間と自然の調和について」（ダイヤモンド社）

現代社会における混迷
～豊かさを考える～

経済学部　4回生　高井　賢一

序論

日本経済は1945年から70年にかけて歴史的にも、国際比較でも稀な年率10パーセント程の高い経済成長を遂げた。この驚異的な成長は、まさに経済効率のみを最優先したためである。このようににして現在の日本経済が形成され、今もなお成長しつつある。しかし、この傾向はいかなる方向に向かっているのであろうか。

今日、我々のまわりには溢れんばかりの多種多彩な物質が存在する。以前の日本経済と対比するなら物質的には豊かになったともいえよう。生産物は、有り余っているがそれでも社会は多くの新しい物、異なった欲望のようなものを生み出す。一見、物質が多く存して豊かに見える社会であるが、人間にとって現代の社会とは本当に豊かなのであろうか。何を「豊かさ」の基準と定めているのであろうか。

現代社会は、経済を限りなく拡大させる構造のうえに成り立つ社会であり、その裏には生産力のめざましい発展があることは疑問の余地がない。経済の量的な成長、繁栄がどのような利益をもたらせたにせよ、我々人類の眼前に大きな壁が生じていることも確かであろう。そしてこの極めて深刻な事態はこうした経済構造の所産でありながら、「経済」だけを対象にしていては、その全貌を明らかにしえない事態となっているように思える。その大きな壁、深刻な事態とは、各個人間の貧富の格差における人間関係（経済的南北問題）や地球生態系の破壊（環境問題）や食べ物の食品添加物による商品化（食糧問題）などがあげられる。そして今なお同じ経済構造に支えられた成長の発展上において経済上をますます増大させている。すなわちシュマッハーのいわゆる“前のめり大敗走”的方向を依然として突き進んでいるように思われる。

現代社会における混迷は、経済的な南北問題であり、環境問題であり、食糧問題等であって、これらは我々の生活と深く関係していると思う。この小論においてはこれらの問題を取り上げて、現代社会（一見物質が溢れ、豊かに見える社会）そのもののあり方を問い我々が当然のように何ら疑問なく受け容れてきた現代の「豊かさ」の価値それ自体を考え直してみたい。

第一章　南北問題と南の現状

第二次大戦後に帝国主義の植民地体制が崩壊した国際環境のなかで、新しい国際経済問題が発生

した。それは、ある日突然に出現した事柄ではなく、歴史的に形成されつつある動態的な問題なのである。つまりここで言う「南北問題」とは、発展途上国が経済的に不利な立場にあり、帝国主義の直接的な権力的支配を被り、主として先進国との国民的生産力水準の格差に起因し、そして世界経済において隔たった地位を改善するためにおこなう国際経済秩序の改善の要求とそれに対する先進国の対応（不充分な政府援助や多国籍企業の富の収奪等）から生ずる国際間の富の格差の経済問題である。

しかし、ただそれだけではない。「南北問題」を机上の論議から現実のものとして、我々は犬養道子氏の『人間の大地』で指摘されているようなもっと南の悲惨な現状を直視しなければならないと思う。「一時間に千五百人の割りで五歳以下の子供が餓死しつつある。現在、飢餓状態の人間は五億人いる。」（1981年）〔『人間の大地』より〕これが現実なのだ。我々の世界からは想像もつかない悲惨な状況である。自分たちのいる居心地の良い環境になれてしまい、同じ地球上において飢餓状態にあるこれらの人々との間に自然と溝を作ってはいないか。私は一人でも多くの人にこの事実を知ってもらいたい。というのも知らないということが、この危機意識から人々を遠避けていると思うからである。

第二章　環境問題～高度工業社会の諸結果～

高度に発達した工業社会は、科学技術の様々な成果を生み出し、我々はその恩恵を受けている。しかし、自然と人間の本来的な営為は、適切であるのか。人は、自然の緑、澄んだ空気、海、湖、川、生きた景観を破壊してそのかわりに植木、人工の緑、機械とエネルギーを使った空気調節、人工の海、プールなどを創造した。ここでは資源・エネルギーの問題と土の荒廃の問題という二点について考えたいと思う。

第一の問題として、資源・エネルギーを大量に消費する社会構造を創り上げたことで、我々は深刻な問題に直面している。自然や環境破壊を含む地球生態系の破壊がそれである。その規模は、計り知れないものである。公害問題とは現代産業の本質部分を成し、人類の生活基盤そのものに関わる人類史上はじめての事態である。地球の生態系は日一日と破壊され続けていると同時に、我々の肉体もむしばみ続けている。

第二の問題として、土の荒廃の問題がある。農業生産の特徴は少なくとも土を育て、土の持っている育成能力を生かして食物を作ることである。しかし、このような農法は科学技術の農業への波及とともに急速に衰退した。最大の変化は工業に依存した農業になったことである。そして農業は生産性を向上させることに執着した。

農業が工業経済への依存度を高めていくにともなって、深刻さを増してきた問題は、農業の命ともいうべき土の荒廃であり、ひいては砂漠化である。生命の源の一つである土が荒廃して、どうして豊かな生命活動がいとなめようか。化学肥料・農薬は土のもつ生きた自然を破壊し、栽培植物は害虫がつきやすく、成育力が弱まり、過保護を要求する。そして、近代農法は悪循環に陥る。

第三章　食糧問題

我が国には多くの種類の食品がある。食品メーカーは、利潤追求のため様々な策を講じて消費者に訴え少しでも多くの商品を売ろうとしている。そのために市場は消費者の作る市場であったのに、メーカー側の作る市場に消費者が入り込んでいるように思う。つまり消費者は、経済構造の奴隷となっていると言ってもよいであろう。野菜を例にとると真っすぐなキュウリや虫のつかないレタス

などがある。自然は本当にこれらのような野菜を我々に与えてくれたのか。又、消費者は何の疑問も持たずにこれらの野菜を買い続けるのか。

我々にとって“食する”ということは必然であり、その総量は非常に大きく、まして食品は直接に体内に入るのであるから絶対に安全な物でなければならないはずである。

結論

科学と技術の力が開花する中で、近代人は自然を奪い去る生産体制と人間を骨抜きにする社会形態を作り出した。多くの富みさえあれば、その他のものも全て豊かになると考えたわけである。策略を講じて必要なものを手に入れ、損失を補うことができると思った。このようにして、生産の発展と富の獲得が近代社会の最高の目標とされた。

私は現代社会における「豊かさ」の価値について疑問をなげかけてきた。経済の発展が即、生活の向上につながり豊かな社会を作り出すという考えは、第一章、第二章、第三章を通して経済の持つ側面が明らかになるにつれて浅慮であることがわかってきた。それでは、これら三つの章より「真の豊かさ」というものは何であるかを考えたい。それは、非物質的価値を尊重し、そして道徳的選択をするという事ではないかと思う。非物質的価値すなわち正義や調和や美や愛や健康というモラルの基底となる、「金」で買えないものを、尊重することにより本当に豊かになっていくのではないか、又、人間生活を復興させることが出来るのではないか。

《参考文献》

○シュマッハー「人間復興の経済」（佑学社）
○前田芳人・小川雄平「国際経済の新展開」（世界思想社）
○犬養道子「人間の大地」（中央公論社）

Ⅵ．甲南大学谷口研究室　昭和６０年度年間活動報告

1．講義および演習

①哲学（哲学とは何か，西洋哲学思想の流れ，現代哲学のトピックス）

②哲学特論（ホッブス，ロック，スミスの自然法および市民社会論）

③西洋哲学史II（19世紀の哲学：ベンサム，ミルを中心に）

④演習I，II（情念論研究と現代哲学の諸問題：

文献：ルソー「エミール（第三篇）」，三輪正「議論と価値」）

⑤特殊研究（卒業論文指導）

2．研究発表

①研究論文

谷口 文章：自己是認・否認の原理と公平な観察者および良心論（上）

——アダム・スミス「道徳感情論」の研究——

（甲南大学紀要・社会科学特集・1984年度）

②卒業論文

小竹 代里子：哲学の視点から見た禅

村松 伊津子：ジャン・ジャック・ルソー“自己愛からの出発”

——市民と人間——

石田 智子：詩人における感覚の問題（文学部 高坂ゼミ）

——中原 中也論——

植木 通博：光合成細菌 R. rubrumの非紅色変異菌についての研究

（理学部 中村ゼミ）

③研究生論文

川崎 幸千代：ルソー「エミール」における教育の意義

——透明な心を探して——

④ゼミナール論文

吉内 信子：楽園を求める心

——顕教四方仏・弥勒——

黒川 禎三：日本人の意識構造

——現代社会の意識形成における宗教の位置づけ——

菅原 宏樹：J.S. ミルの停止状態論にみる環境問題

高井 賢一：現代社会における混迷

——豊かさを考える——

3．研究会

①ヒュームとスミスの会，入会

②日本18世紀学会，入会

③シンボルと元型研究会

④深層心理学研究会（於：亀岡市自宅）約月2回

テキスト：フロイト「夢判断」，「幼児性欲論」読了，箱庭療法実習

メンバー：甲南大生，京都府立医大生，立命館大生，竜谷大生，OB　計10名

4．ゼミナール合宿

①第十回ゼミ合宿（昭和60年3月8日～10日，於：IUSK）

研究発表会(1)哲学系・・・ルソー「人間不平等起原論」（岩波文庫）

(2)心理学系・・・ロジャーズ「人間の潜在力」（創元社）

(3)教養系・・・VTRを資料として使用「ゼロ才からのたたかい」他

エンカウンターグループ（第2回）実習

②第十一回ゼミ合宿（昭和60年7月19～21日，於：愛知県犬山市日本モンキーセンター，京都大学霊長類研究所）

ゼミナール研修旅行として犬山市の日本モンキーセンター及び京都大学霊長類研究所を訪れ、討論の機会をもつ。

③第十二回ゼミ合宿（昭和61年3月7日～9日，於：IUSK）（予定）

研究発表会，VTR討論会及び心理学実習（箱庭療法，フインガーペインテイング）

※IUSK＝関西地区大学セミナーハウス

5．ゼミ構成員

川崎幸千代（文研究生），北村真（法修1），

大野康（文4），小竹代里子（文4），村松伊津子（文4）

吉田秀樹（文4），石田智子（文4），吉内信子（文4），

黒川禎三（経4），桜井智晴（経4），菅野晃弘（経4），

菅原宏樹（経4），高井賢一（経4），植木通博（理4），

合志由美子（文3），鈴木路子（文3），房安雄司（文3），

紋谷陽子（文3），山田美紀（文3），脇田博代（理3），

川上義雄（理2），北詰由美（理2），小谷英子（理2），

小林究（理2），高木敏宏（理2）

6．受講生

和田浩一（理３），岡保利佳子（理３），藤田清士（理２），
馬道佳代（理２），大嶋利枝（理２），岡千秋（理２），
滝谷忠則（理２），岩田哲郎（理２），井上友雄（理２），
前田幸俊（理２）

7．人事

(1)昇格

谷口文章：助教授（昭和60年4月1日付）

(2)研究員

シンボルと元型研究会、研究員（甲南大学総合研究所）

※本年度の研究室活動にあたってゼミ幹事の高井賢一，脇田博代，合志由美子の諸君そして、ゼミ合宿の運営において高井賢一，脇田博代，川上義雄，高木敏宏の諸君に感謝します。

Ⅶ．編集後記

梅のつぼみもふくらみ始め、春の気配に心ひかれながら甲南大学哲学倫理学研究室で朝から晩まで和文タイプとワープロを動かし続け、ようやく完成することができました。

毎年の事ながら、来年こそは余裕を持って完成をと誓いつつ、またゼミ合宿まで後〇日という“ドロナワ”をしてしまいました。それにも拘わらず和気あいあいと作業できましたことをとても感謝しております。今回も同様一年間の活動を一冊の報告書にまとめあげました。前回よりもよりレベルアップした内容を目標とし、卒論、ゼミ論、レポートにも力を入れて取り組んで参りました。どうぞ厳しくかつ暖かい目で御読み下さいますと共に、より一層の御指導をお願い申し上げます。

最後になりましたが、協力して下さった甲南大学の皆さん、お忙しい中を駆けつけて下さいました藤松昭（奈良高専OB）佐保田圭吾（立命館大）の諸兄に感謝致します。特に、藤松氏には、表紙の作製の件でお世話になりました。そして今回も谷口文章先生には、実に様々な面にわたって御指導頂きました。改めて深く感謝致します。

昭和六十一年三月

編集代表者　和田浩一

脇田博代

岩田哲郎

昭和60年度活動報告書

編集者　高井・黒川・桜井・菅原・小竹・吉内・村松
和田・房安・岡保・脇田・合志・川上・藤田(清)
小谷・北詰・小林・高木・馬道・岩田・井上
滝谷・藤田(益)・北村

発行所　甲南大学文学部谷口研究室
TEL (078) 431－4341

発行日　昭和61年3月31日　初版発行

印刷所　甲南大学コピーセンター

KONAN